是より先き、鎮撫使愈出向とありて、仙臺藩に於ては、玉虫左太夫及び若生文十郎を派遣して、米澤藩と協議し、共に會津藩を説服して、降服謝罪を謀り、以て國内の靜謐を期さむとす。然るに會藩は、曩きに薩長二藩の誅戮書策を知得せし事とて、俄かに心服する譯に參らず。弊藩京都騷擾の罪は、是れ天朝に謝すべき道にして、薩長に對しては、是を謝するに、未だ一點の罪責あるを知らず。弊藩を撲滅せむとする彼薩長の奸臣、彼等容易ならざる宿怨に對しては、弊藩も亦互角を以て、大に抗爭する所なかる可らす。願くは、今回の御勸誘暫く是を見合せ、以て奸雄を決するに、防衛の戰備を許容あれと。實に意氣昂然たるものあり。會藩の所説、天朝に謝すべき罪は、最早免れ難き所ながら、その薩長に對しては、寸毫の罪跡あるを認めず。然らば今や降服を乞ふ、暫く熟考の猶豫を欲すと。それ或は然らむ。然りと雖も薩長今や錦旗の下にあり。會藩の一念唯だ薩長奸臣の宿怨と斷ずるも、やがては天朝に抗するの格となる也。會藩の論議事茲に出でず、薩長の事實行爲をして、是を錦旗の外に觀察したるは、抑々不明の罪の致す所にして、憐れむべき心理狀態に在り。

然れども、此際に當りて、會藩が、よし仙米の勸告に依り、降服謝罪に決したりと雖も、元來が許さるゝ譯には非ざる也。蓋し前述する如く、薩長には一種の宿怨を抱持し居りて、而かも此宿怨は、己れ天下を握りたりとて、將た又江戸の巢窟を取り崩したりとて、苟も會津を焦土と爲さゞる以上は、斷じて滿足する譯に參らざる也。是れ予の獨斷ならむも、向後の經過を推考して、先づ茲に豫言を發せざる可らず。

此時に當りて、參謀世良修藏は、紅賣（べにうり）の行商人と化けて、漸々として、白河口に發足す。世良は、仲々の好男子にてありしとか、壯々たる美男子、値段は無類安價なるを以て、人々我れも〳〵と、老若男女寄つて、たかつて、是を買ひ求む。然れども、元來が會津征伐の軍事探偵、會津追討の大參謀也斯くして所々に流浪多くの人に接し、休息を名として、衆人の同座に侍り、以て會津道中を説きつゝ、本道間道を問ふを常とす。人々いと懇切に途を敎ゆれば、世良、踴躍して去る。かくて會津の四圍に彷徨し、夜に入りては、

筆と卷紙に四方の動靜と本道間道を記して、夜も更かしつゝ、內情を報告するを常とす。

かくて、列藩の重臣は、鎭撫使奧羽下向を聞き、みな靜謐の誓約書を懷中にして、御機嫌伺ひにと、仙臺指して發足す。三月二十日、仙臺中將伊達慶邦は、松島觀瀾亭に召されて、左の令書を拜受す。

右早々人數差出會津ェ可討入事
策畧等之儀參謀可申談候事

仙臺中將

會津先陣被仰付候就テハ彼國情探索等精々行屆居可申ニ付巨細御本陣ヘ可申出事
會津追討の動員令は降れり。會藩片意地を作つて謝罪する事を爲さざるに依り、最早內亂干戈の餘儀なしと。即ち茲に至りて、仙藩は討會先鋒の兵を動かすべく、三月二十五日、諸將の部署を定む。即ち五靈櫃口先鋒の一軍は隊長伊達筑前（登米城主）、參謀和田織部（蒲生城主）、監察加藤重三郎等とす。その湯原口（刈田郡）先鋒となるものは、隊長伊達藤五郎（亘理城主）、參謀增田歷治、監察片平信太郎、伊東相摸、櫻田春三郎等とし。關宿口（刈田郡）は、隊長伊達彈正（岩出山城主）、參謀高城左衛門等なり。以上は米澤を經由して、會津北方の國境檜原口に向ふもの、更に隊長瀨上主膳（鹿又城主）、監察姉歯武之進等は、福島表に在りて、信夫郡土湯口を固む。その本宮中山口は、隊長伊達安藝（涌谷城主）、亘理此面、參謀奧山十之進（大原城主）、監察白石七郎右衛門等を以て是を固む。更に二本松國境石筵口は、隊長大松澤掃部輔、監察東儀平等なり。其外刈田郡越河關門は、熊澤今朝之助。宇田郡駒ヶ峯は、三浦源太夫等を以て、仙臺本陣を警護する事と爲したりき。

茲に於て、奧羽鎭撫總督府は、岩沼驛に置かるゝに及びて、仙臺藩は、會津追討の軍を動かすに、片倉小十郎（白石城主）、を先鋒と爲し、藩主を擁して白石

を本陣とするにあり。先軍出發して、桑折驛を保つ。總督府より命あり。

今般會津追討出張之兵爲見廻明十四日ヨリ參謀一人差廻候間敵之模樣ニ依テハ進退駈引可致ニ付何レモ其指圖ヲ請候樣端々之兵隊ニ至ル迄嚴重之沙汰可有之候事

但兵隊一小隊附添候事

四月十三日（慶應四年――明治元年）　奥羽鎭撫總督

所々流浪の紅賣行商人世良修藏は、此時に當りて、いよ〳〵探索を了して岩沼の本營に在り。依て奥羽鎭撫總督府には、密議を重ぬること日夜止ます。これ列藩の動員と庄内追討の畫策なり。明くれは四月十四日、副總督三位澤宜嘉は、參謀大山格之助と共に、薩長二藩の兵を率ゐて、庄内追討の大命を以て、いよ〳〵羽州に出向す。庄内追討の顚末は、是を出羽戰史中庄内追討問題下に、詳說することゝすべし。

四月十六日、總參謀醍醐忠敬、參謀世良修藏は、諸藩出兵を嚴督しつゝ、追討軍を指揮すべく、福島方面に發足したり。十九日に至れば、土湯口の仙軍は、瀨上主膳と共に、いよ〳〵猪苗代に進擊す。會軍、變を聞きて大兵を送り、仙軍と鬼面山に會して、大に猛戰す。此地山間の險難會軍よく是を拒ぎ、對峙頑强にして、仙軍進む能はず。かくて兩軍の砲戰は益々激しくして而かも仙軍には兵糧來らず。隊士疲勞して土湯口に逃げ戻る。土湯の俠客鬼兵吉と云ふもの、土民を使嗾して土寇を起し、突如に驛中を燒くや。瀨上、狼狽して兵を收めて荒井村に退却す。茲に於て、荒井白山寺を土湯口の本陣と定め、地藏原（一名荒井原）の草野に堡壘を築き、大に戰備を期するにあり。

四月二十六日、一ノ關藩主田村右京大夫は、兵を率ゐて、白石陣所に來る此日會津の降伏使米澤に來る。後段に詳說すべし。

閏四月一日、總參謀醍醐忠敬、本宮の軍營に在り。茲に於て、石筵、中山五靈櫃の部署に當りて、明日未明を以て、會津進擊を令するや嚴なり。依て中山口の隊將亘理此面は、仙臺、二本松の諸軍を率ゐて、二日未明に、突如

として壺下關門に迫る。會軍惶擾殆んど戰守の策を失し、銃砲を棄てゝ而して走る。かくて石筵口に於ては、大松澤掃部輔、二本松、福島、相馬、守山三春の諸軍を率ゐて、兵を本道間道に分ちて、いよ〳〵幕成關門を攻む。會軍一敗地に塗れて、猪苗代に走れり。

醍醐總參謀等白河に到る。依て會津追討の軍令部を常瑞寺に定む。石城、棚倉、三春、守山、二本松の諸軍は、既に白河に屯營し在りて、命令今や遲しと待ち居れり。十五日となりて、戰守の陣配いよ〳〵成りて、石軍の咏岡隊は偵察の任務を帶びて、甲子道御藏入の諸道に進む。十六日、響導役勝見善太郎、一軍を率ゐて會津陣地を攻む。會軍即ち漫然吾が國境を犯す不法者奴と、大に怒つて兵を進めて白河に向ふ。二十日、會軍襲來。白河城の西に當つて、砲聲は連りに響き渡りて、天地また裂けむとす。參謀世良修藏、猛然として諸軍を指揮しけるが、城郭を目指して、會軍の純義隊は、捲土重來して攻め來る。攻防烈戰して、益々彈を込めて對峙頑强なり。忽にして會軍の大兵は、あなたの森林に現はれて、大呼猛突して、三春の陣を崩し、仙臺の營を斬りまくりて、白河城に突入し來る。

諸軍大敗幾んど爲す可きを知らす。變報、常瑞寺内に來つて、總參謀醍醐少將等愕然色を失へて、急騎を飛ばして、岩沼方面にと長驅す。此時に當りて、會津町に猛火起り、道場町より黑煙揚りて、折柄の大風に、炎焰天を焦し、城郭の四邊灰燼に歸して、滿目又悽慘たり。

奥羽同盟に至りし事情

〔一〕會津藩の謝罪

會津追討の兵は起りて、鎭撫參謀等白河口に往復し、大に諸藩の兵を指揮する所ありけるが、會藩いよ〳〵恐懼して、大に寛恕を乞ふに至れり。即ち曩きに、九條總督等愈々京師を出發し、東北の風雲俄かに險惡を告ぐるに至りて、その仙藩に於ては、米藩と共に、會藩謹愼奥羽靜謐を期して、その降服謝罪の途を勸說せしかど、當時は猛然薩長に謝するの罪無しと爲し、敢て躊躇して、容易に勸告に應ずるの色なかりけるが、方今追討の諸軍は、いよ

〳〵向ふ所の部署成るに及びて、國境の一戰よく會藩の膽を潰すに至る。然ればは會藩たるもの、封内素より些の戰備を施す無き所、今やその四圍の戰守を望み見ては、謝罪の途深く熟考する所なかる可らず。即ち其非を自覺して、罪を謝するに吝ならず。茲に於て、會津家老梶原平馬を藩公名代と爲し、伊藤左太夫、河原善左衛門、土屋宗太郎、山田貞助等を送りて、米藩にその周旋を依頼すれば、藩公上杉齊憲は資性温厚仁慈の人、兵馬の慘害萬民塗炭の苦を避けて、奥羽の靜謐を要望するには、年來既に定見あり。今や會藩の謝罪出づるに及びて、そは吾が意を了解せる振舞ぞと、欣喜滿面に溢れて、必ずその赤誠を貫徹せしめんため、會津の使者を容るに至る。茲に於て、米澤藩士木滑要人及び片山仁一郎は、上杉齊憲の命を帶び、白石陣所に來つて、大に後事を議する所ありき。實に四月二十六日とす。茲に於て、旨を總督府に届出、同時に二十九日を以て、仙米の國境關宿に於て、會津使臣を尋問する事に決す。

會津容保爲謝罪歎願之、家來共別紙名元書立之通(略ス)罷越候由米澤ヨリ申入候ニ付陣門ヱ相通承リ申候間先以御届申上候　以上

四月二十六日

仙臺　中將　内　　但木土佐

米澤　中將　内　　木滑要人

四月二十九日、會藩謝罪謹愼の眞僞につき、是が尋問のため、仙藩よりは國老但木土佐、同坂英力、參謀眞田喜平太等出張し、米藩よりは、木滑要人片山仁一郎等來つて、國境關宿に相會す。茲に於て、會藩が京都發砲の一條處決には、(一)藩主容保城外に於て謹愼。(二)會津領地の削封。(三)鳥羽伏見輕舉の重臣首級差出。以上の三大條件を具して、その赦免を乞ふや切也。

弊藩之儀ハ山谷之間ニ僻居罷在風氣陋劣人心頑愚ニシテ舊習に泥ミ世變

に暗き土俗ニ御座候處尤寡君京都守護職被申付候以來乍不及　天朝尊崇
奉安　宸襟度一途之存念ヨリ他事無之粉骨碎身罷在萬端不行屆之儀ニハ
候得共　朝廷之御垂憐ヲ蒙多年之間何トカ奉職仕居臣子之冥加此上難有
奉存鴻恩萬分之一モ奉報度聞國奮勵罷在奉對　朝廷御聞體之心事神人ニ
誓ヒ毛頭無御座伏見一擧之儀ハ事卒然ニ發不得止次第柄ニ而是亦異心等
有之儀ニハ毛頭無御座候得共一旦奉驚　天朝候段奉恐入候次第ニ付歸邑
之上退隱恭順罷在候處此度鎮撫使御東下御兩藩ヘ征討之命相下候由承知
仕愕然之至斯迄奉惱　宸襟候儀何共可申上樣無御座此上城中ニ安居候而
ハ奉恐入候ニ付城外ニ屏居罷在奉待　御沙汰候間一視同仁之以御宥恕寛
大之　御沙汰被成下度家臣擧テ奉歎願候右之段幾重ニモ厚御汲量被下宣
御執成之程深奉懇願候　以上

慶應四年閏四月

會津家老
西郷頼母　近憲
梶原平馬　景豐

會藩の謝罪歎願書是なり。惟ふに、鳥羽伏見の戰端や、事薩長の挑戰に係りて、會藩、たゞ幕軍先鋒の勇を振つて、是に應戰したるのみ。然れば武士氣質より立論すれば、事の理非曲直は、專ら事端が我れに在るや、否やに依つて判定するもの。果たして然らば、鳥羽伏見の戰爭の事端は、何人も疑はざる如く、薩長の密謀に成りて、薩長が進んで挑戰したるものなる以上は、禁闕發砲の責任論、純理より云ふ時は、薩長先づ其責任を明かにし、然る後ち、會津にも是を分擔せしむるが至當なるべし。會藩の意見、また茲にあり。然ればその責任薩長にも存する事とて、俄かに謝罪の道を取つて、頭首を同一責任の薩長に屈服すると云ふ事は、武門の習はしとして、將た亦男子の面目として、到底忍び難き所、會藩が仙米の勸說に躊躇したるは、決して理由なきに非ざる也。然れども勅使の奥羽下向とありては、事實は薩長と會藩の衝突なるも、表面は既に〳〵朝敵の取扱ひ、斯く成れば今や責任の自他はさ

て置き。潔く謝罪の途に出で、而して凡てを咽鳴するより外途無しと。會藩の謝罪行爲、冷靜に是を審究して、當時の戍辰事件の眞相を語るべし。然るを世上是を曲解して、徒に權勢に底頭し、會藩を飽く迄も佐幕藩に擬し、是を王政復古に反對する朝敵と爲し、以て汚名を千歲に殘すは何事ぞ。

〔二〕奥羽列藩の會庄庇護顚末

會藩、曩きには仙米の勸告に躊躇し、靜思熟考能く其非を悟り、こゝに謝罪歎願を申し出づるに及びて、即ち奥羽平隱靜謐の實擧がれりと云ふべし。然れば會藩にして、事茲に至らむか。鎭撫總督の奥羽下向をして、大に旨趣貫徹したると共に、その仙臺、米澤の兩藩は、追討先鋒の大勅に對して、頗る面目を得たるものと云ふべき也。茲に於て、米澤藩は、その使臣を送るに至りて、會藩自省の明あるを賀し、以て鎭撫使の深慮をして、一日も早く是を安せしめ奉らむと、即ち會津尋問を交渉したる也と。

されば會津謝罪問題に接しては、奥羽列藩たるもの、隣邦の好として、追討の大勅に見て、大に審議する所なかる可らず。依て本問題に對しては何分仙米の兩藩は、追討先鋒の地位に顧みて、是に處するに一旦は休戰を宣し、而して會藩と總督府との間に在りて、圓滿なる平和の解決を收めざる可らざる責任にあり。茲に於て、仙米の處決左の如し。

會津容保爲謝罪歎願之家來共相越候に付陣門ヱ相通承り候次第ハ別而御届申上置候通ニ御座候處右容保恭順謹愼降服謝罪之儀只管歎願申出候ニ付一先戰爲相控申置候全体之儀ハ追而可申上候得共先以爲御聞置此段御届申上候　以上

閏四月四日

仙臺中將內
但　木土佐
米澤中將內
竹俣美作

本書は、蓋し諸將休戰の屆書也。次ぎに會津問題審査の爲め、奥羽列藩に對して、評定參列の廻文を發す。即ち左の如し。

陸奥守並彈正大弼儀會津容保御追討之先鋒被仰付陸奥守被出張候處今般容保家來共陣門へ相越降服謝罪之歎願申出候ニ付致御衆評度候間御重臣方之内白石陣所へ早々御出張相成候樣致度候

上杉彈正大弼　内　竹俣美作
千坂太郎左衛門

閏四月四日

伊達陸奥守　内　但木土佐
坂英力

會津謝罪の案件是を公論に決す。何と奥羽列藩の立憲的なるぞ。奥州羽州に亘るの大小二十四藩、列藩の重臣は、漸々として白石に到る。かくて白石城の書院（今日の會議室）には、會津謝罪を討議すれば、仙藩以下十三藩、平穩且つ謝罪の赤誠に在る會藩の風情を望み見ては、誠に憫諒に堪えたり。然れば武人の去就や、俯仰天地たゞ公明なる態度は、最早追討の餘地なく、況んや、その咎ある前非すら事卒然に發し、而かも薩長が挑戰して、實効あるに至りて敢て事茲に至りしに於てをや。然らば會藩既に罪を自覺し、謹愼閉門謝罪のは、隣邦また同情の涙なきを得ず。惟ふに、武士たるものゝ芳涙は、抗する者は是を討ち、其降る者は是を容るゝ、蓋し三河以來の士風也。されば會藩謝罪の實情は、列藩その隣邦の好みを以ても、是を鎭撫總督に哀願し、而して追討赦免を取計ふ所無かる可らすと、論議一決して意氣高し。閏四月十一日、米澤中將彈正大弼、自ら白石城に來つて、仙臺中將に面語する愼重なり。依て主公及び重臣の歎願は、いよ／＼硬き決心の裡に斷行せらる。

討會先鋒被仰付兩國共出兵罷在既に仙臺先手勢一應及接戰候處今般降服謝罪之儀容保家來共申出候ニ付仙臺國境陣門ニ於テ問罪督責爲致候處伏

見暴動ノ一擧ハ畢竟指揮不行屆ヨリ全ク卒然ニ發シ奉驚
天聽候段至極恐縮之餘リ容保儀ハ歸邑退隱之上當時城外ニ於テ恭順謹慎
相盡シ頗ル先非悔悟罷在寛大之御處置被成下候樣別紙歎願書之通（前項ノモノ也）
家來共申出候間益
天朝之御仁德奉感戴候樣御處置奉仰望候會津國情等之儀ハ委細演說ヲ以
申上候通ニ御座候間深ク御汲量寛典之御沙汰被成下樣一同奉歎願候以上

閏四月十一日

仙臺中將
米澤中將

仙米の兩公、岩沼の總督府に到つて、九條大納言に接見し、奥羽輿論を代表して、會津寛典の御處置を乞ふや切なり。此時に至りて、白石城の列藩重臣は、又別に連署して、大に哀願する所ありたり。即ち如左。

此度會津征討被仰付各藩出兵既ニ仙臺先手勢及接戰候處容保家來共降服
謝罪之儀申出仙臺國境於陣門糺明相遂候處伏見暴動之儀ハ全異心等有之
筋ニハ無御座候得共事皆卒然ニ相發奉驚
天聽候段深ク恐入其節先手隊長ハ別而謹慎申付置奉待
御沙汰何樣共所置仕候由ニ御座候處畢竟容保兼而指揮不行屆之所致ニ有
之候段至極恐縮仕當時於城外謹慎相盡先非悔悟罷在家來共歎願書ヲ以申
出降服謝罪仕候上ハ幾重ニモ寛大之御處置被成下至仁之
聖恩奉感戴候樣奉仰望候尤當時
王政御一新之御場合ニモ被爲在候得者何分不被爲動干戈人心之向背ヲモ
深ク可被爲有御汲量御時節ト奉存候勿論春夏之間ハ農時之甚急務トスル
所ニ有之自然民命之大ニ所關係ニ御座候間是等之儀共篤ト御諒察被成下
今日之事ハ只ニ會津孤國耳之御處置ト不被爲　思召寛大之御沙汰被成下
候ハヽ實以奥羽御鎭撫之道赫然被爲立候樣偏ニ存込列藩衆議相盡奉歎願
候猶又連名外之輩一駈付次第可申上候　恐懼謹言

慶應四年閏四月十一日

伊達陸奥守家來（仙臺六十二萬石）
坂　英力時秀
但木土佐成行

上杉彈正大弼家來（米澤十五萬石）
千坂太郎左衛門高雅
竹俣美作久綱

南部美濃守家來（盛岡二十萬石）
野々村眞澄雅言

丹羽右京大夫家來（二本松十萬石）
丹羽一學富穀

松平大學頭家來（守山二萬石）
三浦平八郎義質

阿部美作守家來（棚倉六萬石）

平田彈右衛門重世

相馬因幡守家來（中村六萬石）
相馬靱負胤就
佐藤勘兵衛俊信

秋田萬之助家來（三春五萬石）
大浦帶刀忠恒

水野眞次郎家來（山形五萬石）
水野三郎左衛門元宣

板倉甲斐守家來（福島三萬石）
池田權左衛門邦知

藤井伊豆守家來（上ノ山三萬石）
渡邊五郎左衛門東

岩城左京大夫家來（亀田二萬石）
大平伊織觀成

田村右京大夫家來（一ノ關三萬石）　佐藤長太夫時敎
生駒大藏內家來（矢島八千石）　推川嘉藤太末彬
佐竹左京大夫家來（久保田二十萬石）　戸村十太夫義効
戸澤中務大輔家來（新庄六萬石）　舟生源右衛門成定
安藤對島守家來（平五萬石）　三田八彌宜隆
六鄕兵庫頭家來（本庄二萬石）　六鄕大學政景
本多能登守家來（泉二萬石）　石井武右衛門美貫
內藤長壽丸家來（湯長谷一萬五千石）　茂原肇
立花出雲守家來（下手渡一萬石）　屋山內記繼篤
上杉駿河守家來（新田一萬石）　江口俊藏
津輕越中守家來（弘前十萬石）　山中兵部泰靖
南部遠江守家來（八ノ戸二萬石）　吉田左膳政喜

奥羽列藩の歎願書即ち是なり。京都に於ける會藩の態度、それ或は慶喜に加擔して、干戈を敢て醸したりと雖も、事苟も前非謝罪したる以上は、その赤心に見て、寛大の處置を懇願する也。況んや奥羽鎭撫の目的や、事會藩一

個に係るとも、其結果は奥羽列藩の興廢に關する所、萬民塗炭の慘害を避け安寧を永遠に保持するには、その主たる職責に見て、頗る當を得たる方略と云ふべきなり。然らば鎭撫總督府は、列藩の歎願を處遇するに、果たして如何なる所見ありや。即ち總督九條大納言は、本書を手にするも、仙米兩侯の所說に對しては、內心是を赦さむ風情もありしかと、參謀を懸念して、一言も發せざるに似たりと云ふ。然らば參謀の意見如何と云ふに、世良修藏は意氣昂然として曰く、會藩、誠に罪を謝すれは宜しく、城及び兵伏を收め、恭順實を現はすべし。今仍ち然らず、隣近諸城へ大兵を出し、盛んに防禦の策を爲し、武備を固めて以て官軍に抗し、陽に書を出して、過ちを飾り、哀を乞はむとするに在りて、謝罪の途何を以てか是を證せむと。(近世史略卷三)依之看是、會藩にして、若し城及び兵伏を收めたらむには、それ大に是を許すの意あるに似たりと雖も、否、決して然らず、斯る寬大なる所見は、素より毫末も存せず。次項に揚ぐる軍書より推すも、會藩の討滅は、奥羽下向本來の目的にして、會藩、今更謝罪を申出づるも、何條許すべき節なきに、仙米兩侯お人よくも是が救解の勞を取るは、即ち鎭撫の大勅に背く違法ありと、云はぬばかりの態度を以て、九條總督に臨むものなりと云ふ。然ればこそ、九條侯も一言を發せざるなるべし。茲に於て、鎭撫總督府に於ては、列藩歎願書不受理の議起れり。されば白石陣所の重臣等は、日々に命の降るを待ちて、憂苦措く能はず。坂本大炊、坂英力及び但木土佐の命を帶び、世良參謀の跡を慕つて、白河に尾行し、大に數千言を吐く所ありけるが、世良、坂本を諭し、而して曰く、萬事命令の降るを待つべしと。坂本再び白石に來つて、旨を報ず。果たせる哉、列藩歎願の應報は、變報、奇想天外よりあま下りて、左の令書を發せらる。

今般會津謝罪降服歎願幷奥羽各藩添願書被差出熟覽之處朝敵不可入天地ニ罪人ニ付難被爲及

仙臺中將
米澤中將

御沙汰早々討入可　奏成功者也

閏四月　　鎭撫總督

奥羽列藩、切角の歎願も、詮議に及ばれ難しとありては、豈泡を吹かざるを得んや。世良、曩きには坂本大炊を諭し、白石列藩の重臣共に對して、萬事予が意にあるを以て、暫く命の降るを待てよと。即ち雨か、風か、半眞半疑に待ち焦れらしめ置きて、今に至りて、突如として、天地不可入の大罪人を誅せよとの命を發す。得て大膽不敵者と云ふべし。されば重臣共の驚愕、論議鼎沸して、騒蜂の嵐起も曾ならず。列藩重臣たるもの、事茲に至りて、全く失望落嘆して策なし。果たして然らば、向後の經過こそ、如何に成り行くか。人心の激昂は、急轉直下の變動に、恰も迷宮に彷徨する概ある也。

憐れなる哉奥羽列藩、精神誠意心力を込めて、大に奥羽靜謐追討赦免を請ひは、世良參謀の態度意外にして、一擊の果斷は列藩大願を踏み破り、漫然、追討奏功を强ゆるに、會藩を目して天地不可容の大罪人と爲し、以て爾後の

辨疎を卻けて、是を嚴命するに於ては、列藩を侮辱するの甚だしきもの也。然らば奥羽問題の明斷、是を鎭撫總督府に對しては、最早願望を托するの途なきことゝて、諸藩の杞憂と憤慨は交々來つて、こゝに大同一團結束して、蹶然大政官に哀願し、而して一視同仁の皇恩を仰ぎ奉るに、飽く迄も是が貫徹を期するにあり。茲に於て、仙米の兩中將は、旨を總督府に屈出づ。

今般會津容保降服謝罪之儀家來共歎願申出候ニ付國情等之儀委細演說之上寬典之　御沙汰被成下候樣過日奉懇願候處　朝敵不可入天地ニ罪人ニ付難被爲及　御沙汰早々討入可　奏成効旨御達之趣承知仕候固ヨリ降服謝罪顯然之事ニ而降ル者ハ容レ拒ム者ハ討候社王者之兵ニ有之殊ニ更始御一新之砌被爲動于戈候儀於　天朝必不被爲好旨征討。總督府ヨリ御沙汰相成居候次第モ有之此上押而御征伐之命被相下候儀乍恐公明正大之御處置如何ト奉存候加之當時農桑繁忙之折柄諸藩數萬之出兵徵發轉輸之苦ニ不堪既ニ所々一揆等相起候勢實以不忍聞最早蒼生塗炭ニ陷リ候間是迄

出兵之口々解兵仕猶又衆議相盡奉伺大政官候外事無御座候此段御屈申上候以上

閏四月十九日

仙臺中將
米澤中將

本書を見よ、武門亡びて更始一新、天下漸く耳目を覺醒して、至仁至慈の天日を拜するに至るや。畏きあたりよりは、干戈を釀すは、これ朕が好む所に非ずと、のたまへ給ふ御聖慮の程仰出ありと。總督府自らが是を公言して仙米の兩藩主に、奥羽鎭撫追討の先鋒を命じたる、抑もこれ何の意たるぞ。聖慮の程感泣せば、何故に列藩の大願を卻けて、而して天地に入る可らざる罪人を討たしむるや。罪を謝し降を請ふ、會藩の身の上は、頗る一新したるもの也。會藩の先非や、謝罪降伏の外更に何物を以てせむ。然れども是を許さず、飽くまでも追討を强ゆるに於ては、列藩又是に處するには、向後大政官に乞ふより外に、策計は盡きたり。總督府の諸公たるもの、言行既に相反

すは遺憾也。かくて、仙米の兩侯は、追討解兵と大願の貫徹とに、所論を總督府に屆出つると共に、是より仙臺に到り、而して列藩重臣をば、青葉城の大書院に會し、愈奥羽の輿論をして、大政大臣三條實美の許に、是が貫徹を期さむと、即ち哀願書は成れり。

王政復古更始一新之被仰出、奥羽之邊土迄モ奉承知、御布告之御趣意遠上古之、列聖ニ被爲臨、廣大之五大洲ニモ、可奉比樣無之、聖代ニ奉逢候儀　實ニ難有莫大之幸福ト、人民不堪欣喜、御新政ヲ奉望、德川始諸藩追討被仰出候得共、高貴之宮始メ公卿御方、大總督等之御大職ニ被爲任候ニ付テハ、必聖明之、叡慮ヲ御擴充御寬仁ヲ以、膺懲之典ヲ被爲正降服之者ヲ被容、不日ニ海內淸寧ニ可至ト、奥羽之二洲旱ニ雲ヲ望候ニ等シク奉待上候處、於仙臺ニ、鎭撫使御三卿ヲ奉迎候得者、存モ不寄、即日會津御追討之先鋒、仙臺ヱ被　仰出、至急ニ侵擊可仕由之御催促而已ニテ、御仁恤之被　仰出迚モ無之、加之、庄內御追討卒然ニ被　仰出、

勅命二洲俄ニ騒擾驚惑、人民手足之措所ヲ辨兼候爲體不堪悲痛候得共、奥羽固ヨリ至嚴猶豫可仕筋無御座候ニ付、先鋒應援之各藩ヨリ出兵仕候處、會津容保儀悔悟降服仕、城外ニ謹慎罷在候上、封地ヲ被爲削候與、伏見ニ而事ヲ誤候謀臣之首級ヲ差出候、トノ三ケ條ヲ以奉謝罪度、仙臺米澤エ申出候ニ付、國情委細承届、九條殿下エ、演達仕候上、諸藩連名ヲ以奉歎願候得共、容保不可容天地罪人、難被爲及 御沙汰、早々討入可奏成功旨、御差圖ニ有之、一同當惑罷在候。先年長洲之暴臣、對 禁闕發砲仕候一條、寛大之御處置モ兼而奉伺候上、御一新之折柄ニ候得者、尚更寛典可被處ト存居候處、容保之謝罪ヲ不被爲容、更ニ御攻擊被 仰出候而者、天下億兆之望ニ被爲背候御處置ニ可相至、左候而者、乍恐王政復古之御大業、御創造之御場合ニ對シ、如何可被爲有哉、安ニ干戈ヲ伺候方聖德ヲ奉汚候而者、却而恐入候儀ニ付解兵仕、猶又、大政官エ奉用ヒ、ト相決シ、九條殿下エ、其段奉申上候。次ニハ、庄内何樣之罪狀會得仕朝敵之惡名ヲ被相下、御追討被仰出候哉、反覆思慮仕候得共、愈

會得仕兼、前條同樣評決仕、解兵之上、是亦九條殿下エ奉申上候抑モ忌憚ヲ不顧、叩ニ陳言仕候段不堪恐懼之至候得共、至仁ヲ以民ニ被爲臨而者、一夫其所ヲ不得儀御座候、而モ不被爲安 宸襟ヲ御事ト奉存候。況、會庄二藩之存亡、人民許多ノ死生、實ニ重大之御事件ニ御座候得者、降者被爲容候、名ヲ被爲正トハ、鎮撫御三卿之御賢明ヲ以、御英斷可被仰出儀ト奉存候處、參謀大山格之助、世良修藏儀、恣ニ 總督府ノ命令ヲ矯、如斯奉反、叡慮ニ候樣之御施爲而已ニ有之、其一身之擧動ニ到候而者、貪婪無饜酒色荒淫醜聲不堪聞ニ事件枚擧仕兼、兵卒者、暴戾劫奪鹵掠ヲ常ト仕、至處厭苦不仕者無之、其害豺狼ヨリモ甚敷共可申哉、如此者共ニシテ、前文之通大事ヲ恣ニ仕、御三卿之 思召聊貫徹不相成、皆以參謀之誣妄ヲ被爲受、渠カ、會庄之私怨ヲ快スヘクト仕候ヲ、御禁絶被遊兼候勢衆人之既ニ奉察候處ニ有之、參謀、御三卿ヲ奉誣罔、既ニ如此ニ御座候得者、德川ヲ始諸藩之御追討 被仰出、天下之兵ヲ被爲動候者、必奉誣罔朝廷候。姦回之手ニ出叡慮者奉申上候迄モ無之、總

我宮御始之御眞意ニ被爲出候儀ニハ決而無之御事ト奉存候。方今實ニ千歲之一時ト可申上、王政復古更始一新之　聖運ニ被爲當候。御廟堂之御間陽ニ右ヲ口實トシ、虛名ヲ張リ、詐謀ヲ儲陰ニ大權ヲ竊ミ、暴欲ヲ恣ニシ候國賊有之候樣ニ相聞得候。速ニ御正シ不被爲有候ハヽ、何樣之禍亂ヲ釀候哉難計、萬一、元建之覆轍ヲ被爲蹈候樣之御儀モ御座候ハヽ、天下萬世無窮之遺憾、實ニ過之候儀有御座間敷ト、仰テ奉遙拜　九重俯之諸藩ヲ哀憐仕不任、悲憤慟哭ニ候間、敢而僭越之罪ヲ犯シ、海內同志而衆庶ト共々協力仕、大義ヲ伸、禍亂ヲ除、奉維持　皇國候素願ニ御座候處、正邪不相辨、人心恟々之餘、終ニ賊徒追討之義兵相擧候勢、顯然ニ相見得申候間、江海之度量ヲ御開、天下之公義ヲ被爲容、德川始會庄之　御處置　被仰出、王政復古更始一新之御大業、御成就被爲有、皇國ヲ萬全ニ被爲措候樣、偏ニ奉歎願候條、宜敷御執奏被下度候。

奧羽列藩の、會庄庇護の哀願書、即ち是也。本書に加盟したるは、前揚の列藩は勿論、更に松前志摩守重臣下國彈正秀定、米津伊勢守重臣根本策馬保雅、織田兵部少輔重臣長井廣記季吉の諸士あり。依之看是、會津及び庄內の追討問題は、其是を庇護する爲めに、奧羽蝦夷の列藩を網羅したる譯なり。思ひ見よ、追討赦免と東北の靜謐を期し、以て王政復古の慶事をして、萬國是が一視同仁の聖恩に浴さむと。歎願尙是を忍びて、人事の總てを盡し、趣旨貫徹に注ぎし今日迄の方策は、遂に鎭撫總督府に通せず、興廢興奪の運命に臨み見て、最後の手段は何ぞ。奧羽の諸藩素より干戈を好まず、飽くまでも平穩なる解決を欲して、王政復古更始一新の御代に添はむとする也。然るを鎭撫總督なるものは、列藩庇護の赤誠も、是を一の奸計とのみ猜疑して、敢て是を顧る事を爲さず。果たして然らば、抑も王政復古なるものは、それ國家的なるや、將た薩長の爲めなるか。奧羽問題の所見、列藩、是を公道に見て、最後の手段を議するや、即ち大政大臣の明斷を仰く也。

本書は實に奧羽人心の輿論也。會津の實情や、敢て咎むべき無し、その前非すら、既に謝罪せり。庄內また罪跡を認めず。兩藩一意平穩なる態度こそ

鎮撫追討の必要は、果たして那邊に存す可きぞ。然るを漫然追討を嚴急にし敢て列藩大願の赤誠を卻くるとは、得て解す能はざる總督の處遇也。邦内諸藩みな皇國の赤子なり。王政一新天下億兆の民は、一視同仁の天日の下にあり。果たして然らば、自省せよ、薩長の徒輩、禁闕發砲の一條、必ず先づ責任の伴ふものと爲さば、その始めに當りて、長州藩が、往年に於ける蛤門の暴舉をして、斷呼たる所罰の例を殘し置くべし。然るを何ぞ。大兵を擁して、朝議を脅迫したる不臣の大罪、是を已れ同盟藩たる情實に眩惑して漫然獨裁的に特免し、今や參政の大官たる高位を送りて、薩長擧げて權を專らにす。薩奸、それ人非人の作法ならずや。更に近くは、已が天下を守らんとて、鳥羽伏見の軍謀を立て、而して罪なき者を、強へて罪に陷れ、一意會庄二國を焦土と爲さむとは、偏見暴惡なる術策、是を鎮撫の名に藉口して、事を擧げんとするに外ならず。何ぞ是そ叡慮に出つる思召と云はん。天恩雲上薩長の宿怨これ奥羽二州を横行するのみとは、實に白石會議に於ける、奥羽列藩重臣の憤慨也。列藩の至願唯だ會庄庇護の一念、勢の激する所尙是を忍び、而

して他く迄も平穩の解決を以て、救護の本望を貫かむとす。奥羽列藩の態度、實に人道の美と云ふべし。

此時に當りて、四方口々の追討軍は、みな國元に引き揚げて、向後の成り行きを監視するのみ。人心の發憤怨嗟の聲は、鎮撫使の頭上に往行す。即ち本書は、仙藩國老坂英力、米藩庄田莊五郎等是を携へて、海路より品川に出航す。然るに江戸四邊は、折しも上野東叡山追討の折とて、上陸不如意となりて、大田盛等是より京に上り、坂等は直ちに歸國して、軍政を司るにあり。

〔三〕奥羽問題と參謀の密計

奥羽鎮撫使の下向は、仙米の兩藩に對して、會津追討を督促する外、更に何物も無かりしなり。然れば仙米の諸藩は、王政復古更始一新の御盛典に見て、聊か物足りぬ感もありけるが。勅命至嚴一藩擧げて、是を奉戴し、而して討會の兵を動かすにあり。折しも會藩は、事皆薩長の姦謀とのみ輕侮して敢て防禦の戰を起せしが。何ぞ夫れ勅使の御下向と承りては、俄に恐懼謝罪

に出づるに及びて、薩長の所謂追討鎮撫政策と、會藩の謝罪と、列藩の庇護意見とは、茲にいよ〳〵復雜を極めて、東北の天地漸く多端を告ぐ。此時に當りて、その鎮撫參謀等の所見如何と云ふに、會藩の謝罪に對する處決は、列藩の主張する事とは、全然相反するものたる勿論にして、庄内追討の參謀大山格之助は、初め會藩の謝罪書の出づるに及びて、逸早くも、是が計謀を立つる所あり。即ち左の一書は、白河口の參謀世良修藏に送りて、大に向後の意見を叩くにあり。

爾來御壯健被成御出陣、引續御配慮之程奉恐察候。

陳者、總督樣ニモ彌其御地ヱ御轉陣被爲有候筈ト奉察上候。扨者、過日仙臺米澤兩人岩沼ヘ參陣、別紙歎願書（前掲）持參、種々姦計ヲ以總督府ヘ奉迫、或ハ宇都宮賊徒又々守返シ、相蔓リ、或ハ各藩降服抔ト申立候段ハ、最早御承知モ被爲有候半ト奉存候。實ニ不容易一大事之御場合ニテ、萬一、一言御採用之御沙汰相發候ハヽ、二度取返シモ難出來、殊更手足ニ汗ヲ握候次第ニ御座候。夫レニ付澤殿（澤副總督）ヘ、別紙之御紙面ヲ以テ御相談ニ相成、一昨日仙藩指遣、右仙藩之者甚姦物ト…四字程不明…等ヘモ參リ、色々模樣等相伺候。又者澤殿ヨリ御返答振之事迄相尋候ニ付、御存慮之事ハ、全不存旨相答置候。過日被仰越候通、彌兩藩（仙臺米澤）此儘ニ指置候テハ、若策不成時ハ、遂勅ハ勿論、會津庄内ヘ相結ヒ、反逆スル時ハ大變之次第ニ御座候。就テハ、兩君將ハ、早〻京都大阪ノ間エ、御呼寄被成置、兩三年之内、奥羽鎮撫土臺相据候迄ハ、被指留候樣ニ無之候而有、實ニ　皇國一變現在相見得候間、御熟考被下、何分ニモ早々兩卿ヘ御懸合被下候樣奉存候、尤モ諸藩重役モ、今ニ白石ニ指留相成候由、是非迫リ付候十分見留有之哉、段々秘策ヲ盡シ候筋ニ御座候。若京師迄御召之處急速運兼候ハヽ、指懸關東迄大總督宮ヘ御召相成、會歎願之儀、御糾ト申事ニテモ可然奉存候、早ク相除キ候方專要ト奉存候。

薩藩、當方ヘ指向候由ニテ、先觸相達大ニ力ヲ得申候。南部之兵ハ、

今日明日ト待入候得共、今以着之左右無之候。此兵着次第、一時ニ四方ヨリ大擧シテ、討入蹈破ル賦ニ御座候。棚倉モ先燭相見得、是ハ山形留置候テ、同時ニ六十里越ヘ指向候賦御座候。佐竹ハ(秋田)彌奮發、既ニ昨日ヨリ討入候儀、昨朝申來候。

京都ヨリ申來候藝ト有馬之應援、如何之都合ニ御座候哉、昨朝蒸汽船二艘酒田沖平島ヘ着ニテ、則佐竹ヨリ物見指出候得共、帆印等不相知候由、自然右應援之兵者ニ候得者、別而之上都合ニ御座候得共、賊之應援カモ不相測候。

松山之儀モ彌本藩(越後藩ノ事也)ヘ附屬出兵、此節、本導寺口邊ニ、彼藩之者召捕其得及再伸重役呼出之儀相達候所、種々及强訴候所業、此上ハ不得止事討入可申候。左樣御聞置可被下候。

前件之次第、何卒速ニ御評決被下、關東エ御懸合奉希候也。

右色々要事迄如此御座候。尙此使ヨリ御地エ御模樣爲御知可申候。

〔別紙〕

仙臺米澤等出頭ニテ、會賊歎願書三通爲見被下、且演說之儀共、御細書之趣敬承仕候。於下官、猶篤ト熟考仕、愚存之程、左ニ奉申上候。

一抑容保儀奉對　天朝、眞ニ奉恐入儀ニ候得者、最初官軍國境エ押付候節、開城降服、暴臣之罪ニ於而ハ、首級差出候ハヽ、彌恭順之節モ相立乍可也モ、御聞届可被爲有哉ニ奉存候處、國境ニ砲臺ヲ築キ、官軍ヲ引受防戰、剩サヘ、越後路邊所々エ蔓延、兵ヲ募リ、央表面ニ降服歎願申立候儀、彌以暫時之難ヲ避候爲ト被察候。只今之形勢ヲ以、歎願御採用鎭撫行届候委ニテ、御伺之儀於　大總督府、如何被爲思召哉ニ奉存候事。

二是迄征討之實功無之、仙府御着陣即ヨリ數ケ度、急遠討入遂成功候樣御達モ有之候儀、何モ承知之通ニ御座候處、種々遁辭申立時日押移リ、終ニ農耕之時ニ至候儀、卑境、仙米等之俗論ヲ釀シ候罪ト存申候。前後ヲ不辨、今更農事之苦情申立、加之、奥羽之諸藩重役衆議ヲ企、全ク大義明分モ不辨候。重役等之連判ヲ以申立廉々、如何

被思召候哉ト奉存候事。

三御沙汰之通、萬民之苦實ニ可憐次第ハ、幾重ニモ汲量仕、追々奉申上候通、於當方者、引續戰爭、人馬之費日夜苦慮仕事ニ御座候。乍去、不得止之時機ニ至リ、若今憐情ヲ以兵事閣時ハ、何レノ時歟、鎭撫之職掌ヲ盡シ、平定之功遂可申哉、實ニ乍二全クハ參籌、依而ハ差向キ奥羽之農民、當年半減收納被仰付候樣、第一ニ被仰立度ト奉存候事。

四前件容保歎願之儀ハ、國中一統悔悟謹愼恭順ヲ盡シ、實功相顯候ハヽ、國境砲臺相毀チ、開城之上、總督府御入城、武器御取揚迄行届候ハヽ、其上死一等ヲ被宥、寛大之御沙汰御伺御相當ト奉存候事

但 慶喜之御所置ニ被準可然候。

五仙米等、如何程因循固息ノ說ヲ申立候共、名分條理不相立儀ハ、決而御動キ不被爲有樣ニ奉願候。何分其御方參謀ヘ御示談被爲在、御評決被遊度奉存候事。

右五ヶ條、乍不束愚意之程奉申上候。宜敷御推見奉仰候也。

本書の到達したるは、閏四月十五日のこと也。時に參謀世良修藏は、本宮に在り。此時に當りて、奥羽列藩は、歎願不受理以來、總督府の出兵の命あるも、不平滿々不可動の體を固守して、敢て向後を傍觀するの有樣にてありけるか。其間自ら布說を起し、憤激の論難は四方より來つて、語氣既に最後の決心もて、列藩大擧反抗の態度いよ〳〵確然たるに至れり。世良、疑雲重疊の時局を見て、思案夜も深更に及びて本宮を發し、而して信夫郡松川村に到る。蓋し此所は福島及び二本松の國境にして、その八丁目には所謂松川本陣なるもの在り。二本松藩士宇田要八、此地に代官として、是を管領す。世良の本陣に來る、即ち此所には總參謀醍醐忠敬の待つあり。(後項に詳說す)

茲に於て、參謀等は大膽不敵なる善後策を立つるに、所詮兵力を以て、列藩一押の討伐を斷行するにあり。即ち其計謀は、是を羽州參謀に漏らして、後事を議するに一書を認む。曰く、

引續御配慮奉察候。其御地追々賊退散ニ付、日々御進軍ニ渡ラセ候事ト想像致居候。

扨テ、右賊退去ノ事ニ付、昨夜仙臺藩坂本大炊ト申者、態々白河エ申來候ニハ、今般會津降服謝罪ニ付、庄内エモ早々兵ヲ引退謹慎可然段内使指立候故引揚候譯ニテ、何レモ官軍御勢相增候故逃去候儀ニハ無之、彼多勢之賊共ニハ、仲々引取候譯ニハ無之候間、此段報知致置クトノ事ニ御座候。眞否ハ不相分候得共、爲念右申入置クヘク候。

就而ハ、十五日御出立之御書翰、今晩本宮ヨリ到來。貴見之赴キ拜誦シテ、大ニ安心仕候。先達以來噂相聞候會賊降服謝罪歎願書三通、去ル十三日、仙臺米澤兩中將岩沼ヘ持參、且演舌ヲ以テ申陳ニハ、『容保儀、恭順謹愼ハ勿論、向後開城可致心底之處、兎角激兵内亂ヲ生シ、官軍ヘ對シ如何樣之不法仕候モ難計、左樣ニシテハ、彌容保罪科難遁都合ト相成故、一同心痛仕候間、何卒寛大之御處置ヲ以テ、減地ハ勿論謀臣共之首級可指出次第ニシテ、謝罪可被召聞朝裁ヲ奉感候樣致度且兩中將モ歎願申述候。然レトモ若シ萬一右御取上無之、愈會討ニ相成候而ハ、兩國之人民難澁ニ及ヒテ、蜂起之徒追々出來候而、鎭靜討伐多端ニ成リ行キ、各藩疲弊終ニ社稷難保チ場合ニモ至リ、勤王之赤心屆兼ネ、却ッテ恐入候次第ニ付、何卒會津之願ニ不拘、是ヲ各藩之願ヲ以テ、奥羽兩國之民ヲ安堵被致候樣思召ヲ以、速ニ御裁許願度』段申出、一旦總督ニモ右三通指返シ、右段之件云之ハハ兩中將等、總督樣ヲ要シテ、夕七ッ時頃ヨリ夜之九ッ時迄詰居、先年德川慶喜主上ヲ奉安リシ一件ヲ初メ、幕ヲ助ケタル功勞ヲ縷言シテ、容易ニ退去スル譯ニ不參。元來容保儀ハ、慶喜ニ加擔シテ、常ニ京師ヲ動搖セシメ、彼是之件々皆會之指圖ト可得相見、罪惡斷シテ寛宥ヲ與フル譯ニハ參ラス候得共、總督樣ニハ、情實誠ニ不得止、願書ノミ御取揚ケニ相成候由ニ候。此際總督樣方ニ於テモ、兵力迚ハ一人モ無之爲、今回之一條モ、押シテ返セハ今日ヨリ兩中將始メ、各藩共ニ會ヘ合シ候樣

相成可申、少々ニテモ兵隊有之候ハヽ、斯カル事ハ斷而不仕、一言ノ下ニ押付出來申候ヘ共、今トナリテハ迚モ六ツケ敷。宇都宮轉戰之味方勢モ、追々賊徒所々ニ蜂起有之樣ニテ、千今不來、大ニ困リ居申候。乍併、一且總督府ニ於テ、是ヲ取上候モノヲ、只々返ス譯ニモ不申參候間、此上ハ一應京師ヘ相伺ヒ、奥羽之情實篤ク申入、今之間ニ於テ、奥羽皆敵ト見テ逆擊之大策ニ致度所存ニ候。就而ハ、乍不及小子急々江戸ヘ罷越、大總督府西鄕樣ヘモ入々御示談ノ上、夫ヨリ直チニ發足シテ登京仕リ、事ニ依テハ大坂迄モ罷越、天下之大軍ヲ引卒シ、大舉之兵力ヲ以テ、奥羽エ皇威之赫然致ス樣取斗フヨリ他ナク、此歎願通ニテ被相免候時ハ、奥羽ハ一二年之内ニハ、朝廷之有ニ不在樣可相成奉存候。

何分ニモ仙米之賊輩ハ、朝廷ヲ輕ンスルノ心底、片時モ難閣奴ニ御座候故、總督樣ヘノ申談モ嚴强之樣子ニテ、明分理非モ不辨、漫然歎願不許可ト相成時之威嚇マテ言上、暗ニ會庄之賊ヲ幇助スルノ目算ラシク、斯ク相成候而ハ一大事、其迄之間ニ於テ、右大舉之兵ヲ指向候手筈ニハ、最前ニ拂底之軍艦ニテモ、一二隻ヲ酒田沖ヘ相廻シ置キ。當方ヨリ大勢ヲ相增シテ、前後ヨリ挾擊之手段ヲ取ル外、更ニ良好ナル方策ハ御座ナク候。

越後口ヘモ近況可申遣、其御地之方ハ、急々可討入樣可被致候。右件々篤ク御相談之上、萬事取斗可申筈ニ候得共、一日長引ク時ハ、一日丈賊論沸騰シ、今更不忍聞候間、千萬潛越之至ニ御座候得共、書中ニテ申上置、直チニ發足上方ヘ出懸可申候間、副總督樣(澤鄕)ヘ宜シク申上可被成下候。

別紙三通之歎願書之分ハ、早々札場ヘ書出シテ、公然ト人ニ見セテ當分人氣ヲ被靜度、且又桑折其外ヘ築立候砲臺モ、今日ニ至リ候テハ、却ツテ賊之固メト相成候都合ニテ、人氣沈靜ト云フ點ヨリ見テ、大關係モ有之候故、右等ノモノハ悉ク崩シ候樣可被申付候。

仙モ内輪ニ於テハ、歎願若シ相叶ハサル時ハ、叛逆之心組ニ有之事ヘ

公然ニ噺モ致居候事ナレハ、勿論弱國二藩ハ不足恐候得共、會庄四國聯合ト相成候時ハ、何分多勢ニモ始末六ヶ敷候故、差當リ是ヲ防クニ白石之重役共ニ解退叶ヒハ、何ヨリノ大幸ニ御座候。乍然難成候半、今之内ハ成丈ケ穏便ニシテ、四藩ヲ謀可被下候也。尤モ仙米藩内ニテモ兩三四人之外ハ賊徒魁モ無之樣子ニテ、主人(藩主)ハ確カニ好人物ナラン。小生出足後ハ、何レモ平坂新八郎ヘ托シ、少々之事ハ、中村小治郎ヘ頼置候。大體之處ハ、醍醐參謀卿ヨリ被申聞度、

尚　途中ヲ恐レ、福島足輕ヲ頼ミ持參爲致申候、書中疎ニ候得共、御覽之上ハ御投火可被下度候也。

後ノ四月十九日　八ツ半時

世良修藏

本書は世良參謀より、大山參謀に送るの書也。奥羽諸藩が赤誠を込めて一意是が貫徹に注ぎし庇護の一念、鎮撫總督府の參謀等是を望み見て、總他郷の火事なり。會庄撲滅の政略は、諸藩何物を以てするも、頑として動かす能はず。豈然かのみならず、今は諸藩の訴願を郤け、更に意外なる大計を以て、東北の大空を一掃せむとす。見よ世良の斷案、會庄庇護の處決、總督府に多勢の兵力なかりせば、諸藩の動靜愈不安の裡に、列藩大願も受理せざる可らざる情實なりとて、一且是を受理したるは、萬餘義なき結果と爲し、而も是を受理するも、愈聽届と爲るに於ては、そは奥羽をして、皇國治外の叛賊國たらしむるを以て、是が裁斷は、飽く迄も排斥に努め。列藩が、解兵庇護の命を待つの虚に乘じて、世良修藏自らは、是より京に上り、而して奥羽皆敵の計謀に依り、急遽天下の大軍を注ぎて、奥羽一擊を企つるにあり。されば其時に臨みなば、海軍は軍艦を送りて、酒田の海上より攻め起り、更に北陸東山の兩道に大兵を注ぎて、奥羽諸藩を蹂躙せむとす。意外なる哉參謀の密計、世良が京に上りて、後事を計るの間は、會庄仙米の四藩をして、是が連合接觸を避くべく、宜しく綾釣りを以て、敢て曖昧朦朧なる所決を依頼するにあり。

〔四〕鎮撫參謀の遭難事件

奥羽列藩會庄庇護の大願も、鎮撫總督府の命に依り、一擊の下に打破せられたり。されば問題となりたる會藩の謝罪も、天地不可容の大罪人と爲るに至りて、諸藩は澁々の裡に、足の踏む所を知らず。出兵の嚴命いよ〳〵急迫を告げて、而かも諸藩の憤激天を衝き、今や楚歌の聲を發して、遂に休戰の屆は現はれたり。醍醐卿、諸藩出兵嚴督の爲め、再び白河口指して出發す。桑折驛に到る。四方の土民是を望み見て、兇器を提げて、土寇となりて狂起す。醍醐卿も變を聞きて、蒼々顏色を失し、暫しは陣屋に日を送りしが。世良參謀は、此時須賀川驛の愛妾の許に在り。かくて、百姓一揆も鎮定するに至りて、愈福島藩に護衛を命ず。家老松原作右衛門、物頭高橋純藏、兵を卒ゐて勅使を奉迎し、而して松川本陣（信夫郡松川八丁目）に到る。醍醐卿即ち營に入りて、休息暫時なり。折しも奇怪なる駕籠は、本道を急馳して、二本松口より來るあり。等しく本陣に入りて、醍醐卿と密議する數刻、日、漸く西に傾き、群鳥また森に歸らむとす。茲に於て、醍醐卿は二本松兵に守衛せられて、白河指して發足し、奇怪の駕籠は、いよ〳〵福島にと赴きたり。奥州街道を下る早駕籠、それ何人の在るやを知らず。疑雲暗々隊士は是を監視しつゝ、その行く先きに尾行して、遂に北町妓樓金澤屋に投せしを確む。茲に於て、隊士の物情いよ〳〵騷然を極め、籠中の怪人、四方の探索を蒙れとも、其名秘して語らず。さる程に、福島藩士鈴木六太郎は、金澤妓樓の怪人に召さるゝあり。怪人、聲を潛めて云ひけるは、此書は大急を要するもの也、足下よ、板倉の足輕を類みて、仙臺藩に漏れざる樣にし、而して是を羽州新庄に御屆を乞ふと。即ち密封の一包は渡されたり。鈴木、包を手にして辭去するや、さても彼何者なるを知らず、小聲の演舌何となく不可解と爲り、延ては仙藩を遠慮する要件と知りては、疑念愈鼎沸して、首尾戰慄せざるを得ざる也。

時に會津追討土湯口の仙軍は、白石陣所の休戰命令に依りて、目下福島に屯陣す。鈴木、怪人の授托物、これを仙軍に秘するは、却つて後難を悟り、寧ろ公然なるを欲して、受托の顚末をば、仙軍の監察姉齒武之進に密告すれ

は、姉齒、疑問續出して是を本陣に報す。隊長瀨山主膳、姉齒に命じて、授托の包を檢閲せしむ。雨か。風か。その中には、羽州庄内追討の參謀に宛てたる密書一通、裏には世良修藏とあり。竊かに是を開封して、何とありけむ意外なる哉、參謀の軍書。前項所載の密計は、玆にて曝露せられたるなり。

奥羽皆敵逆擊の大計、何ぞそれ大膽不敵なるぞ。今日迄の專斷なる處置、既に奥羽諸藩を侮蔑したる程に、尙是にて倦き足らず、更に進むて逆擊の陰謀を企つるとは、禍危眼前に切迫して、最早默し得べきの所に非ず。而かも本書は醍醐卿と世良參謀が、松川本陣に於て作製したるものと思ひは、かゝる大陰謀に與りし者に對しては、仙軍また奥羽の爲めに、何等かの善後策を講せざる可らず。然れば密計の責任者は、世良修藏と、醍醐忠敬にして、早駕籠に依りて、人目を忍びし怪人は、疑ふべくも無く、世良參謀なる事を確認し、その禍島に滯在せる意中を推考すれば、天下の大軍を引卒するに、奥羽諸藩討伐の計畫を以て、明日にも上京の手筈にあるもの。されば斯る詭略を知るにつれ、奥羽諸藩は、會庄庇護歎願の如き、迂遠なる了見に安閑たるを得ざるは勿論。今に於て、參謀の詭計に應對すべき策計を必要とするは、十目の見る所萬口一致にあり。果たして然らば、奥羽諸藩は如何なる態度を以て、向後に處するの途を講ずべきか。先決問題は、世良參謀の上京を防遏せざる可らず。蓋し世良が書中に云ふ如く、己れは大軍の出動を仰ぐべく、是より京に上る算段なるを以てなり。而して世良を禁足して、先づ彼を尋問し、その結果を得るに及んで、鎭撫總督に對して、奥羽諸藩は責任を問ふ所なかる可らず。蓋し大納言九條道孝は、其身苟も勅使として、奥羽鎭撫總督たるもの、其職責より是を見るも、平穩恭順の意を体せる列藩の大願に對しては、所見何等の異存在るべき筈無きに、然るを列藩の赤誠を卻け、大願も踏み破り、剩つさへ其部下たる參謀等には、奥羽撲滅の詭計を確定したるに於ては、參謀の責任と諸藩の体面に就て、如何にしても嚴重の處決を仰がざる可らず。豈啻に嚴談に及ぶのみならず、事に依ては、會庄庇護の一念を貫徹する爲めに連合大擧して、兵力を以て是非を決し、而して君側の奸を播蕩せざれば止まざる也。

世良參謀は、北町の妓樓金澤屋に在り。隊長瀨上主膳は、世良の所在に付きて、其探索を乞ふべく、福島代官に旨を告ぐ。代官富田善平、目明（今日の刑事巡査の由）淺草宇一郎をして、金澤屋に往いて、是を探らしむれば。世良即ち樓奥の土造の間に在りて、能く飲み能く語りて、絃歌は暗を破りて、戸外に漏るゝ仄かなり。かくて夜は深々として更け亘る。宇一郎、世良の相方たる娼妓に命じて、彼の就眠を待つて、その大小刀を隱匿せしめ、時措かず、世良捕縛の取手は、いよ〳〵妓樓に侵入す。仙軍監察姉歯武之進は、仙藩田邊蘭吉、赤坂幸太夫、福藩遠藤條之助、鈴木六太郎等を卒ゐて、宇一郎及ひ其手先の者を案内に、各その向ふ所を定め、表裏の戸口及ひ樓上樓下を警戒すると云ふ、かゝる物々しき算段を以て、配所の捕手は、一擧に世良の寢室にと躍り入りたり。暗闘騒然隣室また夢を破りて、男女裸体となりて、狼狽の醜狀言語の外なり。此時に當りて、世良の隨員勝見善太郎は、赤裸一褌三尺の秋水を振り廻して、大に狂亂せしかと、捕手は益々驀入して、遂に世良に打つて掛る。世良、刀を探りて遂に見當らず。短刀を以て抵抗すること鋭意當る可らず。捕手大槻某、大棍棒を以て世良の腰を打てば、世良、アット一聲叫びてよろ〳〵、大槻、その手を押へて、短刀をもぎ取るや。世良、捕手を避けて一偶に至り、矢庭に短銃を取つて、是を放たんとす。然れども狼狽遂に發する能はず。かゝる間に仙藩赤坂幸太夫は、世良の手より短銃を奪ひて、遂に是を縛す。捕吏、世良參謀を瀨上主膳に差出すや、世良、雄然として眼光人を射る。瀨上、高きに在りて、密書の事を糺問すれば、世良剛放勇膽是を答辨して曰く、其書は正に拙者の筆也。今茲に露顯したる以上は、何をか默さむ。奥羽の者共順逆明分を辨せず、徒に妄訴を逞ふして、總督府の命を侮る、そも夫れ何事ぞ、拙者是より大軍を呼び起し、妄訴の罪を問はむのみ、然れども今や繩あり。事茲に至る、一死又何をか是を惜まむと。泰然自若剛膽なる態度こそ、それ猛惡鬼神の權化なりけむ。されば世良の度量には、一座の者も竊かに恐怖し、禁固するも後日の憂患あると察し、寧ろ此機を逸せず、是を刎首するに如かしと。即ち世良を福島の東端に導きて、阿武隅川の流るゝ岸邊に於て、一刀の下に彼を殪して、その首級をば、白石陣所に送致

するに至る。實に閏四月二十日とす。

怨嗟の聲に包まれたる世良修藏、下河原にて一命を鄭つ。後人世良の人物を痛惜して、奥羽人不明の早計を難ず。それ或は然らむ。然りと雖も、利害相反する當時の物論、奥羽人か追討の禍亂を遁れて、奥羽平穩萬民塗炭の苦を避けて、王政一新の天日をは、薩長人と自他の差別なく、一視同仁に是を仰かむと欲せば、薩長にのみ甘き汁を吸收せしむる譯には參らざる也。此意味に於て、討伐の密計を知るに至りて、薩長私藩の宿怨に對しては、是を懲らすに非常手段は怨すべき也。世良を殪したるは、當時に於ける奥羽の立場として、是を論難するよりは、寧ろ詮なき次第に屬すと云ふべし。

瀬上主膳、福島在陣の諸軍に令して曰く、薩長の奴輩人目を忍んで、日々に奥羽を壞亂せむとす。其罪憎みても餘あり。然らば是より監視を嚴にし、來往行人を檢し、以て薩長は勿論、事苟も奥羽に不利なる者の通行は、斷じて是を禁じ、而して旨を本陣に屆出づべしと。かくて各口々の關門は、一增の嚴備を盡す所ありき。果たせる哉。奥州街道を歩み來つて、福島に到らむ

とせる三騎士。忽ち須川の橋上に現はれて、駒の足跡頻り也。遙かに是を望めは、今迄に見慣れぬ網笠白衣の扮裝、何ぞ夫れ前騎は長藩野村十良にして、後騎は奥野正玄なり。而して其中央の人は、松川本陣に於て、奥羽討伐の密計を立てたる總參謀醍醐忠敬。先日發足せる醍醐總參謀等何故今日此所に現はれしぞ。他無し、醍醐總參謀、松川本陣を發足して、駒を早めて郡山驛に在りけるか、凶變、世良參謀斬殺の報あるに至りて、惚々色を失する驚愕に、その眞否を糺さむと。即ち福島に急行したる也。

須川關門は、嚴備を極めて、三騎進む能はず。仙臺及び福島の守兵、桝形陣の東西に在りて、殺氣紛々。三騎は整然死を決して、馬を繫いで唯だ悄然たり。桝形西持場に在りし仙軍、橋上早くも三騎を目して、薩長の奸兵と爲し、將に一擊を與ふべく、銃口を並列す。長藩野村十良、壘中に進み來つて座して動かず。刻下の景況奈何に成り行くか、何分關門守備頭は、今や城中に在つて、その指揮を待つに由無し。茲に於て、旨を城中に報じ、而して白衣の三騎を酒樓運天に導きて、暫し休息せしむる所ありき。三騎尙も笠を深

くして、腰打ち懸けながら、死別の酒盃を取り交はしつゝ、談議平然として意氣高し。さる程に、仙軍、隨員奥野正玄を縛して、關門口に是を繫ぎ、而して殘る二名に出立を迫る。醍醐總參謀等即ち酒樓を發し、その導かるゝが儘に、街路を裏通りすれば、須臾にして、後背に起る氣合一聲、見る間に隨員野村十良は、鮮血淋漓として四方に迸りて、茲に殪れたり。何ぞ仙軍監監姉齒武之進の命に依り、田邊關吉、鋭刀ヒラ〳〵振りかざして、今や二士の首級を得んとするもの。野村の首級は地に飛び去れば、更に田邊の返し太刀は、尚も進むで醍醐總參謀に及ばむとす。此時に當りて、關門守備頭高橋純藏は、早馬を以て城より駈け來り、遙かにこの慘狀をば望み見て、大聲を發して是を制す。田邊、後を見て狼狽し、刀を收めて此所を去る。高橋即ち馬を止め、醍醐總參謀を寶林寺道に案内し、長樂寺内軍事係泉田志摩（仙藩藩士城主）に報じて、後ち福島城の書院に宿城せしめたり。かくて世良參謀の密書も、その首級も、みな白石に送られし事として、列藩の憤激はいよ〳〵捲土重來して、奥羽の天地殺氣滿ち〳〵、昨日までの鎭撫使も今日は其逃げ場に窮するに至る。依て醍醐參謀も、時局險難福島在城も不案となりて二十五日の拂曉を待つて、避難の發足となる。高橋純藏、竊かに紅葉山藪林に船を招き、醍醐總參謀及び奥野正玄をば、孤船に移して、是に福島藩兵を附屬せしめて、阿武隅川の流れを下りて、而して岩沼の本營にと帆を開く。

〔編者曰く〕　醍醐參謀は岩沼着陣後、九條總督と共に盛岡に走り、土崎在陣の澤副總督と、日を期して秋田に會す。後ち醍醐卿は弘前藩に到ると云ふ。蓋し秋田と弘前を勸說するに在り。

世良修藏の首級は、白石月心院内に葬り、壯嚴なる靈神の碑あり。その福島稻荷公園地に在るものは、奥羽平定につきて、庄内追討に在りし長軍が、福島を通過するに當りて、是を建設したるものゝ由

元來、世良修藏は、奥羽鎭撫使團の主腦力を有したる傑物にして、蓋世の才ある不世出の英雄也。奥羽人が深き恨みを注ぎし丈け、長州の世良と、薩州の西郷は、確に好一對の維新の大豪傑にて在りしなる可し。世良を現在せしめて征韓論、西南戰爭等に預らしめなば、薩長提携の大豪傑が謀する所、果たして如何なる奮奮闘なるぞ。世良が首級は、奥羽敗賊の手に落ちて、土塊視ぜられ、行人は是に小便を放ち、土童雀女は、日々の悪戯具と爲して、白石に持て餘されて、雨風泥土に晒されし事久しく、その體軀は、是も阿武隅川の石河原に、

雨晒となりて、何時消え失するとも無く、遂に流失するに至りしとか。英雄の末路は、萬事件の如しと云はむか。さても憐むべき次第なり。當時岩瀬郡須賀川驛に在りし愛妾某、内縁の夫たる豪傑の靈碑を抱きて、心細そ道辿りつゝ、仇し浮き世を渡りしとは、さても同情に堪えず。

奥羽同盟

夫れ、追討鎮撫使の奥羽に下向するや、命令一下會津征伐を迫るにあり。奥羽諸藩は、勅命至嚴直ちに是を奉戴して、愈會津四邊に兵馬を動かせば、會藩恐懼前非を謝するに吝ならざるに、諸藩は是を汲量して、討會赦免を具狀するや切なりき。然るに大命一下歎願を卻けて、會賊天地不可容の令旨あり。奥羽諸藩愕然として足の踏む所を知らず。今や總督府と會藩の間に立ちて、憂苦尚情實の渦中に在りて歎聲あり。然れども尚是を忍び、列藩連署公道の處決を仰ぐべく、いよ〳〵大政官に哀願に及びて、何等かの御沙汰あるまでは、討會の兵を解きて國境に收め、而して奥羽平穩を期し、以て萬民を塗炭の苦涯より避けしめむと。即ち列藩休戰を宣して時局の經過を傍觀するに一決したりき。

然るに、鎮撫總督府に於けるや。世良大山等の參謀等に大計あり。即ち會庄追討は、是れ奥羽下向の眼目にして、列藩の是を打破せむとする庇護の作法は、鎮撫の政略に見て、氷炭相容れざる所なり、果たして然らば、諸藩尚も妄訴を逞せむか、然る時は、理非曲直に敢て問はず、斷然奥羽皆敵と看做して、天下の大軍を以て、一擧して是を誅せむと。今や鎮撫の密計曝露するに至りて、奥羽諸藩も漸く本意を確認し、獰猛酷虐暴戾の處置として、反感交々來りて、疑雲怨嗟の裡に、鎮撫の大勅を迎ふ素より其處なり。

然らば事茲に至る。奥羽諸藩たるもの、應變の處置を急がずして、敢て默々に看過し得べけむや。此時に當りて、奥羽列藩白石陣所には、兇報頻々遠くより齎らして曰く。世良參謀の密書露見せりと。世論いよいよ激昂して、更に來るは、世良參謀の斬殺あり。密書も首級も到達して、人心躍動昇天の慨もありけるか。報者また來りて、羽州出張の澤副總督等は、仙米の藩士を斬殺したりと。發憤漸く聲高きに至りて、其次に到るは、總參謀醍醐忠敬の

遭難事件也。奥羽の天地禍危迫りて、風雲嶮惡を告ぐ。されば切迫せる時局論議鼎立して、最早明日の變を知る可らず。諸藩尙迂遠安閑たらむか、其間に於て、兇變また頭上に迫らば、最後に至りて、奥羽の社稷は如何に終らむ況んや奥羽討伐の密計は、鎭撫參謀に依りて確定したる今日に於てをや。如かず、是に處するに、諸藩一心同体、飽くまでも共同動作を相守り、而して奥羽藩士を保全するに、列藩自衛の道を講ずるの急なるをと。茲に於て、仙藩但木土佐、坂英力は、奥羽同盟の張本人と成るあり、米藩また提唱するあり。二藩丹羽一學加盟を卒先するあり。かくて列藩は是に伍し、最後の手段は、交戰同盟を暗示して、愈左の約盟は調印せられたり。

奥羽列藩約盟書

一、今度奥羽列藩會議於仙臺告　鎭撫總督府欲以盟約執公平正大之道同心協力上尊崇　王室下撫恤萬民維持　皇國而安　宸襟仍條例如左。

一、以伸大義于天下爲目的不拘泥小節細行事。

一、如同舟涉海可信居以義動事。

一、若有不慮危急事比隣各藩速援救可報總督府事。

一、勿負强凌弱、勿計私營利、勿泄機事、勿離間同盟。

一、築造城堡運搬糧食雖不得止勿漫令百姓勞役不勝愁苦。

一、大事件列藩集議可歸公平之旨細微則可隨其宜事。

一、通謀他國或者出兵隣境可報同盟最寄藩事。

一、勿殺戮無辜勿掠奪金穀凡而事涉不義者可加嚴科事。

右之條々於有違背者列藩集議可加嚴遣事。

慶應四年閏四月

奥羽列藩家老連署（姓名略ス）

奥羽同盟は成れり。東北諸雄藩愈大同團結して、以て西南人に一呼の抑壓を加へむとす。何とその志氣の壯烈なる。勝敗は兵家の常にして、賞罰は人爲の裁量たり。素より順逆を以て、その去就を律す可らず。況んや、勝てば

官軍敗れば賊徒、旗色暗々たる王政復古の當時に於てをや。奥羽列藩大擧の勇、何と旺んなる。

惟ふに、奥羽同盟の擧たる、東北諸藩の去就如何を問はず、形式上官軍に抗爭する以上は、奥羽朝敵叛逆の罪免る能はず。然りと雖も。是を當時人心の趨向を以てせば、大權の安固と隆盛を計り、皇國をして、泰山の安きに置かむとする國民性は、寧乃愛國の情溢れ、憂國の血湧きしものにして、皇室の尊崇と萬民撫恤を期するが爲め、彼れ薩長藩を憎みて、目して君側の奸と爲し、是を除くに奸雄を決せむとす。思ひ見よ、今日迄の經過、會津追討の發令以來、仙藩の建白となり、追討督促となり、列藩出兵となり、庄内追討となり、會藩の謝罪となり、眞否糺問となり、重臣の回章となり、白石會議となり、重臣の歎願となり、仙米の奔走となり、歎願却下となり、休戰解兵となり、大政官へ哀願となり、出兵嚴督となり、藩士の斬殺となり、奥羽逆擊の密計となり、世良參謀の刎首となり、醍醐總參謀の遭難となり、越後口侵略となるに至るまで、終始一貫列藩の赤誠を無視せる鎭撫の行動は、國内一視同仁に見て、叡慮の在る所那邊に存すべきぞ。それ薩長の無謀專斷なる宿怨と云ずして、何ぞや。思ふて此所に至れば、對等の私藩、皇命を賊して、慘虐を極むる非法の奸物と叱呼せば、奥羽の大氣反抗の念慮の湧く、云はずして明かなり。されば是迄は忍びに忍びし列藩の苦痛も、今や一度に爆發して、嘶然、薩長攻擊の反旗を飜さゝるを得ざる譯也。茲に於て、列藩重臣は悲憤を漏らして云ひけるは、死を賊陣に散らすとも、義を公道に盡しなば、武門の最後事茲に至りて、後世何をか憾みとせむやと。如斯して突發したる現象が奥羽同盟也。庇護の一念東北の大空に結晶し、興亡を一戰に賭して、男子の信念を貫かむとする、奥羽武士道の底氣壓也。

奥羽諸藩の約盟は、その眼目とする所のもの、一意薩長の攻擊に係り、要は參政藩閥の暴虐を矯め、その權勢を驅逐して、將來を猛省を促すと共に、君側の奸を除き、恨み疊まる警告を與ふるに、劍に訴ふる也。故に朝廷の式徽を計るに非ず。王政復古を破壞して、舊幕政治の再出現を夢想するにも非ず。また己れ參政の要路を奪はむとするにも非ず。たゞ〳〵會津庄内をして

一視同仁の皇恩に浴さしむると共に、奥羽萬民塗炭の苦を除くが爲めに、列藩の庇護の一念を貫徹に注ぐのみ。然りと雖も遂に通せず。而かも是に報ゆるに、騒擾兵亂の鎮撫政策を望むに至りて、奥羽諸藩は大同團結して、最後の手段に訴ふる也。藩閥攻擊に注ぐ心血の權化也。

奥羽諸藩の去就、それ右の如し。然れば事茲に至る、飽く迄も公道無私、而かも列藩は慨然として、今や公義の爲めに、賊名までも甘受して、兵馬の上に起たむとするなり。勝敗は兵家の常にして、賞罰は人爲の裁量たり。奥羽諸藩が、禍危迫る東北問題に處し、是を解決するに交戰同盟を以てす。美ならずや東北男子の信念。その反抗的態度に宿る權威ある成果が、苟も薩長藩閥の權勢をして、是を打破すると共に、將來を猛省せしめ得たらむには、事茲に至れるの目的は達せられ、死して尚遺憾なき也。奥羽同盟は、日本武士道を体現したる、東北武士の花也。

〔編者曰く〕 弊藩に於ては云々、御國元にては云々と。土地人民を私有じて、列藩更に浸交渉なりし舊幕時代に於て、苟も二十數藩が、同一信念に体合紐束したる現象は、古來幾千年の國史を繙くも、吾が奥羽同盟より外に、またさあらまじ。終始一貫言責を重んじ、義約に殉れたる奮闘や、實に偉觀を呈するものとして、予は是を敬賞せざるを得ず。今日の代議士たるもの、在野黨と爲れば、一も二も無く、内閣攻擊の御努力。政府與黨と爲れば、我田引水の自黨御自慢。吾人は是を耳にするだに、ブリキを叩く音にも聞かず。俗耳如斯。果して然らば、吾が東北出身代議士たるもの、黨情を打破し、政派を捨て、超然的眞面目なる態度を以て、東北振興問題に關し、今日の政治上に於て、第二の奥羽同盟を實現するを得ざるものなりや、否や。

奥羽軍事局と防戰計畫

奥羽列藩白石會議の顚末は、會庄庇護に始まりて、遂に交戰同盟に終る。其間に於ける經過、前項までに縷述する所たり。然れば奥羽列藩いよ〳〵西軍に抗し、東北武士の本領を發揚するに於ては、先づ同盟諸藩の兵を、指揮採配する盟主なかる可らず。仙臺中將伊達慶邦、米澤中將上杉齊憲、撰ばれて其任に就く。茲に於て、仙臺及び米澤の諸軍は、一藩擧げて、全力を平潟白河、越後の諸口に注ぐものとす。茲に於て、其口々に屬する諸藩は、各區

域に從つて、藩兵を進退せしむるに在り。而してその盛岡中將、弘前中將、秋田中將等は、專ら北邊に在りて、奥羽の藩土を守護するにあり。何と功妙なる計謀ぞや。

かくて、列藩軍事局は、今日までは白石に在りけるが、戰鬪地帶は南方にありて、更に米澤庄内を視る上に於て、是が中央地を選ばむと。即ち閏四月二十三日を以て、福島町長樂寺内に於て、列藩の軍政を司るにあり。仙藩家老坂英力、福島軍事局に司宰者たり。而して白石はたゞ形骸を殘すのみにして、その平潟口は、平町一丁目に軍事局を置く。

是より列藩の配陣を見るに、平潟口は、仙臺、相馬、平、湯長谷、泉の諸藩を以て是を固め。その白河口は、會津、仙臺、米澤、二本松、三春、守山棚倉、福島の諸藩を以て守り。更に越後口は、北越諸藩が奥羽に呼應するに至りて、米澤、長岡、會津、庄内、仙臺、桑名、村上、村松の諸藩を以て、是を防ぎ。その秋田口防戰は、庄内、米澤、仙臺、山形、上ノ山、天童の諸藩とす。而して列藩の督將を見るに、左の如し。但し其部署する所は、專ら交戰口に止むべし。

◉白河口

總督將　會津　西郷頼母
總參謀　仙臺　片倉小十郎
參謀　會津　今泉龜之助
同　仙臺　大松澤掃部輔
同　瀨上主膳
同　佐藤宮内
同　氏家兵庫
同　細谷十太夫
同　棚倉　阿部内膳
同　平田彈右衛門
同　富賀須中
同　二本松　内藤準人

同　丹羽右衛門
同　高根義人
同　脱藩　吉村要人介

◉平潟口

總督將　平（軍事總長）　上坂助太夫
總參謀　仙臺　中村才助
參謀　平（指揮役）　三田八彌
同　仙臺　柴田中務
同　米澤　若林軍監
同　相馬　相馬將監
同　同　佐藤勘兵衛
同　泉　石井武左衛門
同　湯長谷　茂原肇
同　脱藩　酒井宰輔

◉越後口

總督將　米澤　上杉主水
總參謀　長岡　河合繼之助
副長　米澤　千坂太郎左衛門
參謀　長岡　萩原要人
同　中條　豐後
同　仙臺　山本帶刀
同　葦名　名取負
同　牧野　新兵衛
同　星　忠狂
同　米澤　色部兵部
同　甘槽　備後
同　芋川　大膳
同　田丸　左京

同　會津　一瀬要人
同　佐川官兵衛
同　土屋總藏
同　木村理左衛門
庄内　石原多門
同　榊原十兵衛
同　中村七郎左衛門
上ノ山　松平誠之進
桑名　立見尚文
同　山脇十左衛門
村上　鳥居三十郎
村松　堀右衛門三郎
同　齋藤安明
水戸　市川三左衛門
同　朝比奈彌太郎
脫藩　古屋作右衛門

◉庄内

▲印ハ奥州口ニ重複

總督將　鶴岡　酒井吉之亟
總參謀　同　松平甚三郎
參謀　同　長坂右近介
米澤　竹俣美作
山形　松尾政右衛門
同　小林榮
同　雄倉源右衛門
上ノ山　山村逢之助
▲仙臺　柴田中務
▲同　中村參政
同　亘理大吉

同　石母田備後
同　瀬上主膳
▲同　盛岡野々村眞澄
同　澤田齊
同　一ノ關三上左次馬
同　岩井大助
同
同
同
同
同

依之看是、仙臺及び米澤の兩藩は、有繋は戰鬪擔任の主腦力者たる名に背かず、奥羽防戰の各口々に兵を送る也。白河口仙軍參謀細谷十太夫は、正式なる仙臺兵を督するには非すして、信夫、伊達、關東に於ける無頼の徒黨を以て成る烏組を指揮するにあり。是即ち白河口の烏組と稱し、猛勇倔强眼前敵なしと云ふ筆鋒を以て、よく血戰に大功ある荒武者、蓋し本來が無頼漢に屬し、たゞ是に体裁を加へたるまでの事にして、隊士みな黑裝なりと云ふ。烏組（カラスグミ）とは語源是に起因し、西軍は諱號を送つて、細谷烏（ホソガヤカラス）と稱す。是と好一對的のものに、棚倉藩家老阿部内膳及び右田内記の率ゆる十六人組あり。唯だ組織分子が士族たるのみ。西軍諱號して、是を十六さゝげと云ふ。茲に於て面白き俚謠あり。「細谷烏と十六さゝげ、なけりや官軍高枕」是なり。西軍戰ふ毎に、是を高吟して進軍したりと云ふ。細谷烏、それ無頼の蠻勇、果たして如何なる奮鬪なるぞ。

追討軍將主一班

奥羽征討に向ふ西軍は、東海、東山、北陸の三道軍に成る事前記の如し。而して是には、大總督を置き、其下には總指揮官あり。更に諸道の軍團には軍參謀あり。是れ一軍の督將にして、其配下には各藩の參謀あり。更に三道軍の進擊する所には、その口々に從つて、一軍團の總督あり。左に是を列記する所あるべし。

征東大總督　有栖川宮熾仁親王

征東軍總指揮官　大村益次郎

總督參謀（東海道軍參謀）　西郷隆盛

同　（同　）　林　道顯

同　萬里小路左少辨

北陸道軍總督（越後口）　小松宮嘉彰親王

總督參謀　西園寺公望

同　任生基修

總督將（北陸道軍參謀）　黑田清隆

同　（同　）　山縣有朋

東山道軍總督（白河口）　鷲尾待從

同　（同　）　正親町中將

同　（平潟口）　四條少將

總督參謀　久我大納言

同　姉川榮藏

總督將（東山道軍參謀）　伊知地正治

同　（同　）　板垣退助

庄內追討總督　九條道孝

總督總參謀　澤爲量

同　大山巖

同　佐竹義堯

總督將　戶澤中務大輔

南部追討總督　醍醐忠敬

總督參謀　弘前中將

總督將（軍令）　杉山成知
同　（同）　大道寺繁禎

藤原口總督　鍋島鷹之助

右は征東の總幹部なり。而して其軍團には、薩州、長州、土州、藝州、因州、筑州、尾張以下、茲に枚擧するは繁雜の嫌あり。依て諸軍に就ては、是を各其向ふ所に依りて、後段に於て詳記する事とすべし。されば是より督將を記さむに。

參謀　野津道貫
同　相良長發
同　前原一誠
同　近藤頼藏
薩州參謀　河村純義
同　篠原國幹
同　桐野利秋
大村參謀　渡邊清
藝州參謀　野村帶刀
同　藤堂豎物
因州參謀　馬場金吾
同　河田佐久間
參謀　香川敬三
同　三好軍太郎
同　竹田重左衛門
同　堀潜太郎
（以下略ス）
軍監　姉川榮藏

同　（長軍）　木梨精一郎

同　（土軍）　牧野群馬

（以下略ス）

以上は西軍將主の一班也。更に海軍あり。即ち奥州東海岸と日本海に出沒して、平潟口及び新潟近邊を砲擊する外、更に陸軍を輸送して、秋田弘前に向ふあり。海軍は消略すべし。

德川脫藩浪人

江戸城の明け渡しに依りて、德川浪士の巢窟を取り崩したりと雖も、慶喜水戸の隱退となるや。浪士いよ〳〵狂亂したと、關東八洲に蜂起したり。即ち江戸より走り、甲州より戻り。武州より歸り。常州に起り。總州より進みて、勇往混亂。是には幕府の步兵隊あり。砲兵隊あり。新選組あり。紀州藩あり。請西藩あり。結城藩あり。水戸藩あり。其他諸國の浪人は、恰も蜘蛛の子を散らせし如く、今や東北諸藩の蹶起を望み見て、大氣大に揚り、晝夜に亘りて往行する所、愚民を煽動しては、新政不滿を叫び、浪士を狩り集めては薩長征伐を高唱する也。

浪士の叫ぶ所氣焰萬丈關東の天を衝き、萬口一致して痛罵あり。曰く、陰謀惡策名を復古に藉り、德川の明斷を無視して、獨斷專恣の薩長幕府を出すそれ非法なる草賊の輩、何ぞ忠義を語るの口ありや。己れの外界唯だ是れ賊徒と斷念し、理否を弊せずして徒に追討を起し、國內騷亂却つて叡慮を惱ましし給ふ程、それ邦家の汚瀆者にして、君側の奸ならずやと。明治維新分岐の過度時代、西南の暗雲は關東北に雨を起し、薩長の大風は渦き來つて、德川武士の頭上に嵐は起れり。されば大將軍の沒落は、歷代家臣みな逆境兒と爲りて、今や天下の浪人たり。浪士、たゝ悲憤慷慨敢て一戰を謀らむと。即ち糧を掠み、財を略し、志士みな武裝して四方を煽動する也。日々に群る不平浪人、勇往突進檄を遠近に飛ばして、隊を編みて、薩長に抗爭せむとす。志氣壯烈誠に其處たり。思へば更始一新王政復古の慶典に處し、天下人心の不

歸一を招來したる、その罪惡果たして何人の所業ぞや。見よ、浪士の檄文、逆境兒が發憤の度や、左に依て推量するを得べし。

官賊、奸謀ヲ逞シテ、德川大君ヲ朝敵ニ陷レ、封土城郭兵器悉ク奪ヒ、臣子ヲ以テ君父ヲ討タシム。決シテ公明正大ノ王政ニ非ス。況ンヤ、今上御幼冲、叡慮ニ出テサル事天下衆人ノ識ル所、必竟、彼等ノ所爲ニシテ、朝廷ヲ奉欺所ナリ。

官賊、先日尊攘（尊王攘夷）ヲ主張シナガラ、今日既ニ皇室ヲ輕侮シ奉リ、朝憲ヲ亂シ、人倫ノ大義ヲ破リ、外夷ニ媚ヲ献スルニ至ル。其反覆表裏、賣國ノ賊タルコト明カ也。諸藩主、是ヲ諫事スルモノナキノミカ、却ッテ惡ヲ助クルハ抑々何事ソヤ。嗚呼、悲哉。皇國ノ正氣泯滅シ、外國ニ併呑セラルヽ期遠カラス。夫レ、大君、一己ノ私ヲ去リ、皇國百萬生靈ノ爲メニ社稷ヲ惜マス、三百年ノ基業ヲ一朝ニ抛チ、水戸ノ僻邑ニ退隱ス。大君ハ眞ニ仁者ト云フヘシ。僕等、譜

代恩顧ノ臣トシテ、泣血奉命主家ノ顚覆ヲ救ハス、賊手ニ一矢ヲモ投セス、オメ〳〵ト脫走スルコト、士道ノ耻辱。先朝孝明天皇及ヒ德川氏祖神ニ對シ、地下ニ謝スルノ辭ナシ。然ルヲ僕等忍ヒテ命ヲ全フシ、暫ク浮浪ノ徒ト爲ルト雖モ、皇國ノ人民タリ。何ソ、賣國不義ノ賊ト俱ニ、天ヲ戴クニ忍ヒンヤ。唯々、節ニ死シテ後止マンノミ。待ッヘシ、不日官賊ヲ屠リ、且ッ之ヲ助クル藩主ノ不義ヲ問ハントスルヲ。之レ僕等ノ私ニ非ス。報國盡忠鋤奸ノ義舉タリ。此時ニ當リ、錦旗、天地ニ翩飜スルモ必ス踏躪スヘシ。錦旗、素ヨリ人手ニ成リ。賊手ニ在リテハ賊手ニ動ク、賊旗、何ソ恐ルヽニ足ランヤ。大公、至正志膽義烈、德川浪士、皇國ノ爲メ賣國不義ノ賊ヲ誅鋤ス。即チ天兵也。

天兵起ルノ日、兼テ同盟諸藩君臣四方ニ應援協力スヘシ。却ッテ機會ヲ失ヒ、汚名ヲ千載ノ下ニ殘ス勿レ。

依テ檄ス。

德川浪士の檄文、それ右の如し。一讀三嘆、何そ猛烈の立論なるぞ。さわ云ふものゝ、これ今日に於ての驚嘆なり。顧つて往時を推回するあらむか、德川浪人の意中たゝ薩長を憎むのみ。然ればこそ斯る檄文も草し得べけれ。光陰矢の如く戰後將に五十年、今日此所に晒け出す、それ或は趣味あらむ。本書は關東浪人軍の總督將大鳥圭介が、麾下浪士を狩り集めるに當りて、その非凡の才と氣焰とに依りて、自ら起草したるものなりと云ふ。圭介、得て大膽不敵の言論を吐く者也。斯る筆鋒を以て麾下を督する限りは、當時の雷同不平浪人たるもの、圖に乘らざるを得ざるは勿論、錦旗に對して發砲するも、敢て怪まざりしは、素より其所と云ふべし。

關東戰史

〔一〕常總方面の接戰

人心鼎沸の江戸大城も西軍の手に入りて、四月四日は勅使東行して、田安中納言家達と會見し、其結果は駿遠奥七十萬石を以て宗家を建て、而して戊辰騒亂の中心人物たる慶喜をば、愈水戸に退隱せしむる事と爲して、茲に江戸城の解決を告ぐるや。殺氣滿々として虎視を張れる舊幕臣、德川の處置を望み見て、苛酷失當を絶叫して、俄然として江戸市中に群集し、論議囂々不平の聲も昂騰して、早晩にも一大爆發の氣勢を示して、漸々四方に狂奔蜂起するに至る。然れば舊幕府閣老たりし、板倉伊賀、小笠原壹岐を始めとし、閣臣の面々皆東北に匿るに及びて、傳習隊長秋月登之助、七聯隊長米田桂次郎、御領兵頭加藤平內、回天隊長相馬左金吾、貫義隊長松平兵庫守、草風隊長天野加賀守、純義隊長山中幸次、歩兵二大隊長大鳥圭介を始め、幕府新撰組、遊撃歩兵隊の士官等は、上總下總の間に混入して、爆發四方に起し、人心の煽動に大馬力を加ふるにあり。關東の戰氣陣容所々に成るに及びて、結城藩主水野日向守、卒先して是に同和するあり。下總請西藩主林昌之助、また赤裸一褌人となりて呼應するあり。大鳥圭介、德川陸軍部內の豪の者、才智軍謀遙かに天下を壓する氣慨に、推されて關東德川浪人軍の總督將と爲り、土

方歳三、是に總參謀と爲るに至りて、福田道直、徒黨を率ゐて起つ。勇往突進武勇昇天の氣を吐いて、關東に叫合するに、概ね檄を四方に飛ばして、薩長を攻擊する頗る妙を得たるを以て、四隣風を望んで同ずるもの、日に〳〵其數を層し、今や奥羽に靡きて猖獗を極めたり。

さる程に、其結城藩に於けるや、小幡兵馬なる者、若殿を奉して蹶然勤王を說き、藩士數十人を結束して、遂に藩主水野日向守を逐ふ。元來水野日向守は開同意見を有するもの、政体改革は其好む所なからも、薩長二藩の專横に不滿を抱き、是が發憤は如何にしても一戰を欲するもの。今や居城を放逐せらるゝに及びて、烈火の怒心禁ずる能はず、浪士を率ゐて恢復戰に猛然たり。小幡兵馬、よし義兵と雖も、多寡が知れたる僅か三十餘人、與奪の一戰何ぞ利のあるべき筈無く、攻防の對戰須臾にして遂に殪れ、徒黨斬滅となりて、若殿遁れ〳〵て、身を西軍の營に托す。此時に當りて、幕府新選組長近藤勇、相馬主計等、麾下を擁して流山の險にあり。大鳥圭介、今や脫軍數千を率ゐて疾風迅雷す。關東の天地變報道路に湧き、人心恟々として足の踏む

所を知らず。かくて西軍の謀略は宇都宮を扼して、奥羽と關東の連絡を絶つべく、彥根、黑羽、館林の諸藩を以て應援出兵を手配するあり。諸軍、今や伍々として陣に滿ち、戰備大に振ふ。大鳥圭介の關東に出現する、既に諸藩は畏怖する所なる程に、その愈々宇都宮追落を聲明して、大兵北進の報あるに至りて、西軍宇都宮の屯營は、愕然急騎を板橋驛の本營に送る。茲に於て東山道鎭撫先鋒總督岩倉具視は、參謀香川敬三をして、薩洲、長洲、土洲、上田の諸軍を督せしめて、板橋を發す。千住に到る。四方の脫軍是を望み見て、踴躍して來り是を攻む。龍爭激鬪脫軍遂に利非す、退きて流山を固守す。流山は新選組の守る所、近藤勇の猛勇、堅鬪殊守して是を防ぎ、激鬪數合、血戰慘を極めて互に勝敗あり。然れども脫軍遂に敗績して、新撰組の督將近藤勇遂に捕手に落ち、囚徒となりて、板橋に檻送せらる。夫れ近藤勇は幕府の麾下として、京師の間にありし時、客年（慶應三年）會津藩士と提携し、土佐の浪人坂本龍馬を殺したる片書ある人、以來藩長は皿目を以て監視する所たり。近藤即ち京に送られて梟首にせられしと云ふ。

香川の率ゆる援軍は、凱歌の裏に流山を拔き、大呼猛突して結城に逼る。脫軍堅鬪百砲を發して是を防ぎ、水野日向守、部下を叱督して殊守しけるが衆寡素より敵す可らず、激鬪一敗地に塗れて四方に走る。香川敬三、結城を略して昇天の慨あり。大鳥圭介、變を聽きて憤怨措く能はず、大舉の軍令を發して、大兵を四方より進めしむ。脫軍襲來砲銃亂射して、破竹の勢あり。西軍是を迎え戰ふに必死の勇ありと雖も、大兵の包圍壓迫に衆寡敵せず、香川、愈々苦戰となりて、身を以て宇都宮に遁れ、大鳥圭介、結城を略取す。

四月十七日脫軍結城を發す。總勢二千捲土重來して小山に迫る。彦根、大垣、秋元、笠間の諸軍彈丸雨注して防戰必死、攻防の接戰慘を極めて互に勝敗あり。然れども大鳥圭介の勇猛鬼虎の慨あり。西軍苦戰長將南部、秋將石川等を始め隊士の死傷其數を知らず、彦軍被害慘を極めて小山の要害遂に崩る。西軍宇都宮に走り、脫軍栃木驛に駐屯す。

四月十八日となりて、宇都宮方面の西軍甚だ險惡なり。依て薩洲、長洲、土洲、因洲、大垣の諸軍は板橋の本營を發して、市ヶ谷に達す。十九日、總軍は關宿を經由し、宇都宮に向ふ。時に飛報あり。即ち脫軍千餘人岩井驛に據りて、本道、間道を扼守すと。茲に於て、西軍は進軍を中止して、先づ全軍を二分し、一軍を小山に備へ、一軍を進めて岩井驛を衝かむとす。依て岩井攻擊の西軍は、夜半に利根川の渡船を破壞し、四月二十日を以て、愈岩井驛に驛に迫る。古河、長洲の諸軍急先鋒として、未明より巨彈を脫軍の陣に注く然れども脫軍は既に陣配の成り居るもの、眼前西軍の影を望むに至りて、霹歷一聲天を突き、砲銃彈の運用愈妙を極めたり。西軍攻防の激鬪焰煙地を覆ひ、飛丸に殪るゝもの、其數を知らず。かくて西軍は鏖戰苦鬪と爲りて、援を迫るや切なり。翌二十一日拂曉に至りて、薩洲、因洲の諸軍は、小山より來つて是を援護するあり。茲に於て、西軍志氣大に振ひ、攻勢を執つて三道よりと躍進すること、捲土重來も曾ならず。されば堅守奮鬪の脫軍も、遂に僻易して殆んど爲す所を知らず。此間に於て、因洲參謀河田佐久間は奮擊突戰、縱橫に斬り拔いて本道を破る。脫軍狂亂間道の守を捨て、土崩瓦解となりて、筑波山脈を迂り、下館方面にと敗走するにあり。

四月二十二日、西軍は岩井驛突破の勢を以て、一呼して下館に逼りけるか、脱軍は驛外に戰守を固め、彈丸雨注して防戰頗强なり。兩軍の砲戰殷々たる硝煙の中に激甚を極め、隊士の死傷其數を知らず。さる程に、長洲、因洲の諸軍は間道軍となりて、脱軍の横背に當りて猛擊を開始す。脱軍、後を顧みて防ぐ能はず、隊長林昌之助、部下を叱咤すれども、最早聽く者は無く、土崩瓦解となりて敗績す。此時に當りて、小山驛の戰鬪激烈を極め、西軍、彈藥つきて頻死の狀態にあり。依て下館の西軍は援を送りて小山を攻む。(小山方面は次項に揭ぐ)

常陸、下總は今や砲戰陣となるに從ひ、其上總方面もまた、形勢甚だ險惡となりたり。即ち福田道直是が首魁となりて、木更津の要衝を保ちて猖獗を極む。依て西軍は備前、筑前、藤堂、佐土原の諸軍を送り、備軍は八幡を固め、藤軍貝塚を守り、築軍行德に陣し、佐軍鎌ヶ谷に在り。

閏四月十二日黎明を以て、脱軍は一躍して八幡及び貝塚に迫る。時に上野東叡山の彰義隊は、夜暗に乘して援を送るあり。茲に於て、別動隊を編成し鎌ヶ谷本道に伏兵せしむ。八幡の戰鬪激烈となりて貝塚の砲戰酣なり。脱軍堅鬪是を拔き、兵を激して益々尾擊す。備前、藤堂の諸軍は此一戰に腰を拔かして、市川の渡口に逃げ來る。脱軍追迫益々急なるに至りて、西軍その血路を開くに、隊士は渡船を爭ふ。かくて西軍敗士は市川に混亂し、其窮狀言語に絶す。折柄脱軍の進擊は、益々彈を込めて迫る。西軍敗士の機敏なるもの彈を避くるに既に船を發す。然れども元來が木葉船、剩つさい敗士押し詰りて尙爭鬪止まず、或は河に投ぜられ、或は墜落して河中に浮沈し、舟、轉覆して溺死する者其數を知らず。

佐土原藩、鎌ヶ谷の部署に在りて、市川に於ける味方の敗戰を知らず、轟々たる砲聲を耳にして、是が援後にと、意氣堂々本道を進み來る。折しも起る脱軍の伏兵、その足もとに現はれて、彈丸雨注して佐軍を襲ふ。佐軍不意を喰つて殆んど戰守に苦しみ、百歩を退きて田畝の間に撤兵す。伏兵機に乘じ益々攻め來りて、佐軍の防戰將に瓦解せんとす。かくて佐軍の砲兵は、猛然來つて是を拔くるあり、茲に於て、佐軍は漸く頽勢を盛り返し、臼砲を猛

射して脱軍を碎く。時に八幡及び貝塚を破りし脱軍は、凱歌を擧げて船橋に宿陣す。依て佐軍は一勝の機に乘じ、本道及び間道より兵を進め、更に海路より後背を攻むべく別軍を送りて、三道より一呼して船橋に迫る。脱軍勇猛百砲を發して防きけるが、忽ちにして筑前、備前、藤堂の諸軍も攻め來りて驛中に放火して脱軍の虛を衝き、包圍壓迫を加へて是を燒討す。脱軍混亂遂に起つ能はず、敗士、散り〳〵となりて宇都宮に走れり。

〔二〕宇都宮本道の接戰

脱軍小山を保ち勢猖獗を極む。それ小山は奥洲本道の要衝にして、脱軍此所を略して四方を環視するに於ては、西軍援軍の北進を阻隔すると共に、その常總方面に於ける西軍の消長に關する大なり。かくて宇都宮西軍の變報は益々急なるに至りて、その板橋驛西軍本營に於ては、作戰の謀議密なるものあり。さる程に、德川陸軍を率ゆる大鳥圭介は、四月十九日の拂曉を以て、愈宇都宮を指して北進するに至る。時に西軍は松本、黑羽、根笠間、任生、土岐岩村、田須坂、彦根、大垣、宇都宮の諸軍を以て、宇都宮を守るべく、南方里餘の要害に據りて、戰備を嚴にして脱軍を待つ。果たせるかな、大鳥圭介土方歳三等は、兵を分ちて驀進し來る。西軍烈戰奮鬪して防けとも、軍裝常に甲冑を附け、進止誠に遲鈍にして、稍々もすれば脱軍の陣後に落つ。然れども陣を固守して、最後まで防戰せんとす。脱軍の突擊いよ〳〵猛烈となるに至りて、西軍も遂に防ぐ能はず、茲に於て、兵を收めて宇都宮本城に據れり。一勝に乘せる脱軍の猛威尙も本道を猛擊する外に、更に別軍を鹿沼より注ぎて、宇都宮に向ふ。かくて本道の脱軍は早くも驛邑に迫り、巨彈を連發して大に是を擊つ。西軍力鬪百砲を以て防ぎけるが、折しも近鄕に潛伏せる諸國の浪人、四方より群がり蜂起し、各々隊を編みて脱軍の勢を援けて猖獗を極む。彼我の砲聲四方に湧き、戰鬪愈猛烈となりて西軍は苦戰にあり。忽ちにして鹿沼の脱軍別隊は、急轉直下に西軍後背より攻め上り、脱軍勇猛突進四方に起り、濠を越し、石垣を踏破し、城門を蹴つて猛然たり。西軍殊守遂に敵せず、土崩瓦解となりて、宇都宮は脱軍に屠られ、藩主は館林に走れり

小山の脱軍頑強にして、攻防の砲戰晝夜に亘るも勝敗決せず。四月二十二日となりて、脱軍南進の報あり。茲に於て、西軍には宇都宮攻城戰を張らんとす。脱軍、其計謀を察知し、城を去る一里の要害に進み、更に別軍を伏して待つ。果たして西軍の進擊は起れども、兩軍敢死奮鬪陣を固守して相讓らず、激鬪慘を極めて亘に勝敗あり。かくて薩洲、長洲、黑羽の諸軍は安塚を攻めけるが、此所は何ぞ大鳥圭介が自ら守る所にして、防戰の巧妙西軍を渦卷き、砲銃彈の運用奇効を奏して、西軍の死傷は山と積みたり。此時に當りて、脱軍の別隊は、土方歳三に率ゐられて、薩洲、大垣、因州の陣に迫りて突如として後背より襲擊すれば、西軍大敗殆んと計を失ふに至る。適々薩州長州、大垣の諸軍は下館を發し、雀宮より突入する所ありしが、脱軍及桑名の兵は奇略を以て、その中堅を拔くに及びて、西軍遂に戰守の百計つき、兵を纒めて遠く引く。

時に小山驛の西軍敗績して、今將に悲鳴を擧ぐるの苦境にあり。脱軍勇猛砲銃彈を注ぎて壓迫殿なり。依て下館突破の西軍は援を送りて、その四月二十四日を以て、脱軍の後背より攻め入らしむれば、小山の西軍再び復活し、兩道呼應して大に戰ふ。攻防烈戰百砲轟々として天地を震動す。此間に於て、西軍は鬪を擧げて突進す。血戰數合遂に是を拔き尾擊して北進す。

四月二十五日、下館の西軍は宇都宮に達す。茲に於て、西軍は大呼して再び宇都宮を攻む。それ脱軍の總督將大鳥圭介は軍略あり。脱軍隊士その多くは佛國式陸戰術の練兵にして、精鋭到る所西軍を惱ます掌中にあり、今や宇都宮の要害に據り、四方の關門を扼して嚴備す。西軍、兵を進めて宇都宮を攻むれば。脱軍殊守防戰頗る巧妙を極め、西軍の作戰、脱軍の右を衝かば、忽ち左を破りて後背より襲來し、中央を攻むれば左右を突破して狹擊の陣を張り、作戰の巧妙愈神秘の極なり。更に脱軍の精鋭は桑名、幕府七聯隊の諸軍を主力として、その神明、八幡の險に據り、援を城下に送りて、西軍の部署を襲ふこと屢々。龍爭虎擊、彈丸雨注となりて、西軍の塵戰今や死傷山と積み、苦戰の陣に隊士の疲勞大なるを望み見て、脱軍は鬪を擧げて突進す。長軍敗れ、黑軍崩れ、垣軍走りて、西軍の陣營、風靜かなり。かくて小山突

破の西軍は漸く味方の敗陣に駈け付けて、勢を盛し返し、大呼猛突して宇都宮を反擊す。脫軍堅守百砲を發して是を迎え戰ふ。攻防の砲戰四方に起り、萬山呼動して天地裂けむとす。脫軍益々彈を込め必死の頑守は西軍をして攻城の策を失はしむ。此時に當りて、因州參謀河田佐久間、西軍の敗勢益々甚だしく、隊士また志氣沮喪して、戰ふ能はざるを望み見て、馬を躍らせ、彈丸飛行の戰線に起ちて憤激止まず、部下を叱咤して曰く、浪々たる流賊の爲め多く兵士を失ふは殘念なり、今にして是を破らざれば、夜間の接戰益々危險なり、然らば日の未だ沒せざるに及びて、城を拔かむ、それ我れに續えて進めと。猛然として外郭に迫る。脫軍是を防ぐに石垣の上にあり。忽にして西軍の打ち出す巨彈は城門を破る、河田、即ち猛進して死傷過多、然れども尙屈せず、益々突進を令して、隊士を激督す。須臾にして垣軍來る、茲に於て、河田は一呼して內郭に突進す。脫軍勇往左右の堅壘より銃を發して戰ふ。德川軍監吉村要人介、拔刀隊を率ゐて河田に肉迫。血戰激鬪死傷を踏んで戰ひけるが、吉村遂に敗れて退却す。河田、一勝に乘じて城壘の一角を拔く。

凱歌、砲聲の間より漏れて、ほのかに外郭に聞ゆ。爾餘の西軍之を望み見て鬨を擧げて躍入す。脫軍混亂遂に敗れて四方に潰走し、時既に日は暮れたり依て西軍は一呼して神明、八幡の兩陣に迫る、電光石火、兩軍の戰鬪猛烈を極めて、脫軍遂に守る能はず、土崩瓦解となりて、日光口に走る。

西軍は宇都宮を略取して、主力は此所に宿陣す。而して薩州、長州、大垣の諸軍は、奥州白河口偵察を兼ね、西軍先鋒として、國境に向ふべく夜間を行軍するなり。依て宇都宮本軍に於ける、軍議を見るに、明日の白河攻擊につきては、長州、大垣、黑羽、館林の諸軍は南旗宿を攻め、然る後その大垣黑羽、館林の諸軍は、南湖を廻りて、棚倉街道に進み、薩州、長州、大垣の諸軍は本道より攻む。而して土州、彦根、因州、筑州の諸軍は白坂驛を左折し、黑川村より原方口を攻むるにあり。依て午後四時を總擊の期とし、間道の西軍が、白川後背に至りて、火の手を擧ぐるを以て合圖とす。

〔附記〕西軍先鋒は直ちに白河口に接戰し、宇都宮の本軍も翌日白河に進みたり。然るに未だ白河口を拔く能はず、茲に於て、五月十一日を以て、增兵、器具、

彈藥を請求するが爲め、村田三介は東京に發足し、十二日本營大手門前なる酒井侯の舊藩邸に於て、西郷隆盛と會見、十三日總指揮官大村益次郎に協議し、白河口の內情を報告する所ありけるが、大村は頑として是を排斥したり。西郷は參謀世良に依りて、奥羽の實情を知悉するもの。依て白河口の嚴備を說き、益々援の急なるを迫る。茲に於て、彰義隊征伐の議一決し、十四日大總督の裁可あり、即ち彰義隊環視の西軍を逐るに至る。

〔三〕上野東叡山の戰

江戸旗本の血盟團、宗家の安否を哀願すれとも、遂に聽き容れられざるに至りて、俄然として其態度を一變し、大同團結して薩長に抗し、以て德川の屈辱を晴らさざれば止まず。薩長を論難するもの、旣に常總に關東に蜂起し北陸東山共に兵馬の馳驅する所とはなりて、上野東叡山に籠れる三千の旗本は、こゝに彰義の一戰を交へて、一命を宗家に棒けんと、陣容堂々として、隊旗を北風に飜す。されば德川旗本の義擧を望み見たる親藩恩顧譜代の諸藩は、竊かに是が聲援する所とはなりて、援軍伍々として來り會するに至れり。

而して列藩より送れる援軍には、遊擊、步兵、猶興、純忠、精忠、貫義、旭臥龍、神木、松石、萬字、馬勝、浩義、白虎、水心の十五隊其數千五百人、血盟團と相俟つて、江戸市中に橫行する樣眼前敵無きが如し。されば江戸市中の物論は俄然鼎沸し、洛中の騷動殺氣滿々として、方今の形勢いよ〳〵不穩を極めたり。依て追討大總督府に於ては、頻りに解散命令を降して、大に市中の平寧を計りけるが。その血盟團に於けるや、一度は主家德川の安危の定まるまてと答へて之を拒み、二度には宗家の廟堂を離るゝに忍びざる旨を答へて應せず、三度には歷代の書冊、記錄、寶器等を保護せざる可らずとて命に服せず、かくして幾度の命にも從ふの樣子も無く、有繋の御大將たりし慶喜も、彰義隊の旗色を望み見て、今や專心力注の謹愼蟄居の狀も、却つて人心の凝惑を買ふべきを悟りて、切々妄擧を抑制しつゝ、嘆聲を漏らせしも憐れなりき。去る程に、江戸城明渡の期日も來り、同時に江戸退去の時期と爲るに至りて、慶喜も今や詮なく、麾下の末路に、深き遺憾を殘して、身は御一門の封地なる水戸表にと遁れ行きたり。されば大總督府に於ては、彰義

圍の輩にして斯の言を左右に托するの所以は、夫れ或は輪王寺宮の在る故なるを察して、法親王をして京都還行を勸むる所ありき。然れども當山の執當覺院と云ふ坊主、頗として容れず。かくて總督府の命令頻發するを見て、隊士は皆戰鬪の免れ難きを語り合ひつゝ、東叡山は日々に戰守の陣を固め、隊士は劍を磨き、腕を撫して大道狹しと云はむばかりの活歩、偶々市中に西軍隊士を見るや、或は罵倒し、或は殺害して益々暴威を逞ふするに至る。時適々大總督府に在りては、諸道の援軍急なるに至りて、彰義隊の監視を絶たざる可らざる事情起る。茲に於て、五月十五日を以て、愈彰義隊追討の大命を降し、以て諸軍の向ふ所を定む。

五月十四日夕暮に及んで、追討の大命は東叡山に降る。されば彰義隊に於ては、一山の周圍は戰備を盡すと雖も、攻防の對戰に臨みては、尙外柵の要を認め、依て之を市民に徵するや。市民は彰義隊の身の上に深く同情し、競ふて金穀木材類を搬出して應援するあり。外柵の固めも今は成りて、臼砲、四斤砲等を始め巨砲を据え付くる至りて、附近の町人老幼一切をして、兵火の間暫く避難を布令す。月、朧ろにして、南風吹きそよく十四日の夜は、市民避難の騷動引きも切らず。此間に於て、東叡山の各部隊は皆部署に就きて、彈を込めて守り明かせば、五月十五日、天、漸く曉を報ず。曉風は細雨を齎して、天地肅々、砲聲遙かに大城に起れば、鹿兒島、萩、佐賀、岡山、鳥取熊本、德島、柳川、佐土原、津、彥根、尾張、新發田の諸軍、部署を四方に取りて、押し寄すること、捲土重來も啻ならず。

鹿兒島、熊本の諸軍、逸早くも上野廣小路に現はれ、大小の砲を開きて、東叡山南門に突進す。更に岡山、佐賀、尾張の諸軍は、富山、水戸の二藩邸より迂回してまた南門を攻む。それ南門は東叡山の咽喉を爲す要害の地、此所を守るは、血盟の彰義隊を始め萬字、神木、浩氣の諸隊を以てし、而して南門より穴稻荷門に亘りて戰守を張る。砲彈爆發天地を破り、彼我の硝煙陣を覆ふて四顧暝曚、此間飛丸は往行して隊士の殪るるもの數を知らず。然れども彰軍の陣は高きに在りて、常に俯瞰の地位を保ち、接戰益々猛烈を極むるも、防戰奇効を奏し、更に步兵隊の來つて、射擊を援護するに至りて、西

軍今や進むに途なし。依て廣小路に巨砲を配置し、猛烈なる砲擊を以て對峙す、此時に當りて、その烏軍は、湯島臺なる天神の別邸に在り。遙かに南門の味方敗勢を見て、忽ち火を放つて四方の民舍を燒き、黑煙地に靡きて四顧溟濛なるに乘じ、中町の裏に進みて、不忍池の地畔に現はれ來る。彰軍、遙かに杉森の中より是を望み、巨彈を込めて俯してその到るを待つ。忽然起る彰軍を砲聲猛彈連續して烏軍の陣を碎く。烏軍、愕然其爲す所を知らず、死傷を捨てゝ廣小路に走れり。茲に於て、南門口の西軍は大呼猛突して、砲を發して躍動す。彰軍山王臺の砲陣は今や百彈を送りて、四方を擊つ。南門の彰軍益々勇を皷舞し、大に西軍撤兵の陣に彈丸を雨注す。砲聲天地を衝き硝煙漲りて人色を辨せず。戰鬪激烈となりて互に死傷あり。山王臺の巨門益々猛烈となりて、西軍進む能はず、百步を退きて是を防ぐ。時しも津軍は竹町の方面より進み來つて、山下に逼り、酒樓に登りて座敷の中に兵を配り、簾の中より銃口を並列して、山王臺を狙つて、一齊に彈丸を雨注す。彰軍堅壘撤彈を込めて大に津軍を攻む。山上の彰軍より打ち出す巨彈は、轟然天空に

鳴り、悽聲を發して酒樓に命中すること數發、爆裂飛び揚りて火災起り、焰烟朦々渦き起りて、滿目悽慘たり。津軍、最早戰ふ能はず、隊士混亂して、煙りの中より漸く身を以て遁る。

その谷中門に於ては、天王寺、養福寺、淨光寺等に各砲陣を取り、彰義、步兵、旭、萬字、松石の諸隊を以て、一手の防備に就き、更に精銳を送りて根津權現堂の境內に、前衛陣を張らしむるにあり。果たせるかな、荻、岡山の諸軍は本郷路を進軍して、東叡山の西北なる根津より迫らむとす。彰軍の前衛は是を防ぐに、霹靂天を衝きて銃を發す。西軍猥狽殆んど戰守に苦しみ百步を退きて、撤兵して相爭ふ。忽ちにして、荻軍は躍進して迫る。彰軍殊守血戰尙衆寡敵せず、退きて三崎町の要路を保つや、一勝に乘ずる荻、岡山の諸軍、勇猛大呼して是を拔き、捲土重來の勢を以て攻め寄せたり。彰軍谷中の本陣は高きに在り。敢死奮鬪大小の砲を亂射して、防戰尤も努む。折しも昨日今日の五月雨に、天地今や雨露となりて、小川の水は濶々として四方に溢れ、茲に於て、西軍は進むも退くも水理を辨せず、淺瀨を探りて隊士混

沌す。彰軍、遙かに是を望みて、虚を衝くこと猛烈を極め、彈丸雨注して西軍を殪すこと、其數を知らず、烈戰苦鬪荻軍崩れ、岡軍また悲鳴を擧げむとして、三崎口を固守す。南門の西軍は、是を望み見て憤激止まず、忽ち大村、佐土原、佐賀の諸軍を進めて是を援けしむ。彰軍、是を阻碍するに猛彈を發し、兩軍奮擊突戰紅白を辨せず、諸軍は必死を期して攻め戰ふ。然れども高きに在りし彰軍の猛擊陣には、三崎口援護の西軍も、最早堪ゆる能はざるに至りて、土崩瓦解となりて、根津方面に敗潰す。彰軍、閧を擧げて是を尾擊すること急轉直下、彰義隊は澁澤誠一郎是を督し、歩兵、萬字の諸隊は、准隊長春日左衛門に卒ゐられ、遂に根津の坂下に到れば、折りしも西軍の殘したる伏兵は、あなたの竹藪の中より突如として現はれ、彈丸雨注して、彰軍の不意を衝くに至る。彰軍狼狽最早防ぐ能はず、土崩瓦解となりて谷中に兵を引く。此時に當りて、三崎口に苦鬪したる荻、岡山の諸軍は、其虚に乘じて、萬難を排して不忍池畔に走り、忽ち隊士を小舟に移し、發砲しつゝ中島に航き付けて、急轉直下穴稲荷門に逼る。茲に於て、神木隊長酒井良介は、浩氣隊と力を合せ、中島の西軍を砲擊すること猛烈なり。

彰軍下寺通三門に於ては、彰義、遊擊、純忠、精忠の諸隊下寺等に陣を固め、而して山の外なる啓運寺、養玉院を保ちて、大に殊守決戰を待つにあり果たせるかな鹿兒島、岡山、德島、津、彦根、新發田の諸軍大呼猛突して啓運寺口に現はる。茲に於て、啓運寺及び養玉院にありし彰軍の砲陣は、轟然として巨彈を連發して防ぎ戰ふ。西軍頑守百砲を發して益々攻め來る。西軍の戰鬪硝煙陣を覆ふて人色を辨せず、彈丸飛交して隊士の死傷悲慘たり。此間に於て、岡山、德山の諸軍は大呼して猛進し來る。彰義隊准隊長川村敬三遊擊隊長人見勝太郎及び副隊長伊庭八郎等進み出でゝ是を迎ひ擊つ。激鬪數合遂に血戰陣中に斬りまくり、その逃ぐるを追つて進擊しけるが。新發田、彦根、鹿兒島の諸軍は猛然來り是を擊ち、茲に兩軍は殊死決戰頑强勇邁、此間砲聲は天地に轟き渡り、龍爭虎擊、兩軍の力鬪益々慘を極む。折しも遊擊隊副長伊庭八郎、拔刀隊を率ゐて閧を擧げて突進す。爾餘の諸隊意氣大に振ひ、新發田の陣を崩して攻め入りしかば、西軍遂に守る能はず、陣を亂して

御徒町にと敗績したり。さる程に、西軍の精鋭は來つて、御徒町の敗軍を盛り返し、彰軍の疲勞を衝いて躍動す。疾風迅雷當る可らず、彰軍儕易して再び逃げ戻り、銃砲を亂發して必死の防戰愈酣となれり。

さる程に、南門口の戰鬪は愈猛烈となりて、山王臺の彰軍の猛彈を發する百雷も啻ならず、巨彈益々飛び走つて西軍の中堅を破るに至る。西軍更に精鋭を是に注ぎて攻むれども、彰軍の殊守堅くして南門は容易に拔く能はず、激鬪慘を極めて、西軍尙苦戰にあり。時に津軍は大城の外郭なる筋違見附に現はれ廣小路を橫斷して、山下の南邊に逼る。然るに津軍の陣形は、恰も彰軍が南門の橫背陣を保つにありければ、彰軍の猥狽一方ならず、爲めに志氣大に阻喪して部署に動搖起る。西軍是を遠きに望み見て勇を皷舞し、奮擊突戰、捲土重來して、アワヤ石垣を踏み越さむとす。されば山王臺の砲陣に於ては、撒彈を込めて四方を防ぎ、銃手を送りて津軍を擊たしむ。茲に於て、津軍は半ば殪れ、廣小路の西軍死傷山と積みたり。連續せる激鬪に彰軍の南門陣も、彈將に盡きむとして、疲勞は更なり。此狀況を窺ひたる西軍の參謀西鄕隆盛、命令一下總勢を南門口に注ぎ、大呼猛突して疾風迅雷も啻ならず鹿軍先鋒早くも石垣を踰え、熊本、鳥取の諸軍土堤を蹴破り、岡山、佐賀、尾張の諸軍猛進して、遂に南門を拔き、尙も進みて新黑門に迫る。此時に當りて、谷中門は崩れ、下寺口も敗れて、砲聲轟々天を衝き、飛彈四方に交叉して部署は崩れ、硝煙暝曚上野の山を包みて、隊士の混戰千軍萬馬の走驅となりたり。

熊本、鳥取の諸軍早くも穴稻荷門に裏切るあり。酒井良介、全軍を率ゐて敢死奮鬪、遂に敗れて新黑門に到れば、彰義隊准隊長天野八郎等今や西軍の中に亂入して、血戰悲慘なり。その山王臺は、爆彈を取交はして既に血戰あり。忽ちにして谷中門の西軍は押し來る。澁澤隊長、春日准隊長等敗れに破れて、にげ來るあり。遊擊隊長人見勝太郎、副長伊庭八郎、川村准隊長等また下寺の苦戰に逃げ來る。菅村准隊長等天野八郎と共に新黑門に敗れ、兩軍の混戰今や路上となく、林中となく、上野の山を埋めて龍爭虎鬪、激鬪慘を極めて兩軍の死傷其數を知らず、隊士鮮血淋漓屍を踏んで、勇往邁進、槍手

は進み、拔刀隊は鬨を擧げて發し、銃手は進み或は退きつ、今や屍山血河の戰場となりて、慘また慘を極む。かくて西軍の大勢は廟廊の近邊に群がり、凱歌を擧げて百砲を亂發す。砲彈爆發四方に起り、忽ち廟堂を破壞して火の手を援け、今や中堂、法華堂を始めとし、金殿玉樓は煙烟渦卷きて地を焦し黑煙天に漲り滿目悽慘なり。隊士の混戰此間に行はれ、或は自刄するあり、刺しちかいするあり、猛火の中に躍り入るあり。上野の血戰慘風血生ま嗅き間に、輪王堂宮公現法親王は、萬苦の中に宮殿を御遁れ給ひ、漸く根岸に忍ばれて、三河島村にと落ちさせ給ふ。夜もすから戶田川の渡りは舟止と爲りて、艱苦の中に辛ふして、うち越えさせ給ふ御身の上や、黑きすみ染めの法衣をまとい、御足には草鞋を付けさせられ、蓑と笠とに御身をやつして、息も絕え〳〵疲れに疲れて、僧に援けられつゝ、絲より細き五月雨の、ひねもす降る草野の旅路に、落武者の群に入らせられ、道を探りて奧羽に御下向の先途も憐れなりけり。

〔附記〕上野彰義隊及援軍中には、追討の命も今日明日には降るまじと、大に油斷し、就中、援軍中には竊かに寓居を訪れしもの、或は今や歸陣せむとするもの多々ありて、みな急轉直下の戰爭に腰を拔かし、歸陣することを止めたるを以て、實戰に當りしは、約盟の彰義隊と援軍の半數なりと云ふ

輪王寺宮には會津御降下の御豫定なり。然れども日光、宇都宮、白河口は西軍の屯營もなりて今や途なく、依て常陸海岸に御避難あらせらる。

東叡山は德川二代將軍秀忠の治世に於て、大膽不敵橫暴老獪と云ふへき、天海と云ふ坊主、家康死後、家康の遺訓を振り廻し、大に勢力を得たるに圖に乘りて、第一に已れ老體川越より伺候は骨が折れるを以て、江戶の片隅を拜領して草庵を營みたしと、小さく申出たるに始まりて、第二に上野の山を手にし、第三に此所は江戶城の鬼門地なるを以て、平安朝の比叡山を楯として、東照宮を勸請し江戶鎭護の靈場たらしめ、第四に後水尾天皇の第二皇子今宮を迎へて親王門跡と爲し、斯くして將軍の全力を注がしめたる靈臺なるを以て、費多の歲月と、幾億萬の土木費を浪費したるかは更なり。その德川大將軍たる權威を以て諸侯の心血を傾倒したる遺營に係り、大に國寶として保存すべき建造物なるは勿論なり。その常行燈は尾張義直、法華堂は紀伊頼宣、輪藏は水戶頼房、文殊堂は堀直寄、石の鳥居は酒井忠世、鐘樓は土井利勝、三王門は永井尙政と何れも天下の美を盡せるもの。四軍隊士は見當り次第、手當り次第、無暗に破壞するに於ては、山僧たるもの、欲と慢みの經文を上ぐるも當然なり。

彰義隊突破の西軍は是より主力を奥州平潟口に注き、その白河口には繃錦なる旗を翻して東叡山の敗士は、品川沖に在りし徳川海軍に吸收せられ、後ちに蠹を起す榎本武揚に投するなり。

〔四〕輪王寺宮殿下の御末路

彰義隊の戰場より御遁れ給へし輪王寺宮殿下は、鈴木安藝守以下十六名の隨員を召させられ、北行の御道程にありけるが、日光口絶たれ、白河口塞がりて、今や會津に通ずるの途なきに至りて、海路より遁れて常州平潟港に上陸せられたり。實に五月二十九日なりとす。

それ平潟は奥州濱通りの戰線地帶にして、奥羽軍戰守の陣、今や海陸何時攻め寄せらるゝや計り難きより、親王御一行は直に發途、夕暮を俟つて泉藩に御宿陣、翌三十日未明を以て御出發、平町飯野八幡神社に御滯陣あり。社掌飯野盛容直ちに平藩に通達し、軍事局よりの伺候多端なり。茲に於て鈴木安藝守は明六月一日御出發を傳へ、而して平、泉、湯長谷の三藩に對し、警護を命ずる所ありけるが、今や攻防の戰雲奥羽に渡り、白河口の戰鬪を見るだに、會津御下向は殊の外不安となりしを以て、奥羽軍事局は平穩の御道を待たるべく、御滯留を奏上するにあり。

法親王は飯野神社に暫く時期を待たるゝ御事ながら、恐れ多くも御尊体を伺ひ申し奉らば、衣は汚れ、袴は破れ、實に御召替もなき御有樣、雨露を忍ぶに漸く纒ひ給ふに過ぎず。かくて六月十六日も、御在陣の折柄。西軍愈北進して平潟口の砲擊あり。十七日も砲聲あり。十八日となりて、小名濱には砲彈飛び來る。親王の御憂苦こそ、果たして如何ばかりなりけん。親しく鈴木安藝守を召されて、のたまふらく、予は既に東叡山の落ち武者、遁るゝ苦辛は汝等と共にすべきも、予等が落ちゆく會津は未だ戰爭なきや、それ予の前を憚りて機を逸する勿れと、即ち御出發を急がせ給ふ所なりき。然れども安藝守は親王の御紛裝より一行の内情に心痛あり。戰陣多端また諸藩に協議の途なく、親王が御不足御不自由の御苦境を目擊するだに、獨り心を惱まして過ぎ暮すなり。六月二十日に至れば、平藩に於ては、法親王の御機嫌伺へとして、御菓子一折献上す。親王、いたく御嘉賞ありて、平藩の名代は拜謁

を賜はり、それより安藝守に會見、親しく議する所ありき。安藝守曰く、今回の親王御避難は、東叡山兵火の中より遂かの御發途にて、素より充分なる御用意とて是なく、親王には、御旅費其他の御缺亡を拜察して、我等今や恐懼に堪えず、今や御地も兵亂と爲りては、親王の御身體も一と先づ會津に移さゝる可らず、軍事多端の折柄申すも恐縮ながら、此際の御準備何卒可然取斗を乞ふと。

茲に於て藩臣恐縮措く能はず、速かに走つて御準備品を急ぐ、依て平藩老公安藤信正は五百兩を献じ、上坂軍事總長以下重臣等醵出して、二百兩を奉じ、更に刀劍其他の用品を献納して、御出發の準備成れり。此時に當りて、白河口の戰陣奥羽軍の敗勢連りなり、依て六月二十五日を以て、愈御發程と定めらる。

親王の御一行は西を指して平を發す。時はこれ細雨の候、天地雨露となりて諸川みな濁流となり、四方洪水田畝に泥濫し、諸河はみな舟止めに道は通せざるなり。親王の落ち行く先きは會津にと、西に西にと向はせ給ふも、道は崩れ、橋は流れ、路頭に御迷ひ給ふこと幾度となく、かくて日も暮れて天地は暗く、一夜の宿を乞はむとするも家なく、或は山に夜を明かし、或は野に旅寢して、谷を亘り、岩を踰えさせ給ひて、漸く阿武隈川畔に達すれば、水は滿々として白泡を浮べ、大浪渦を爲して逆か卷き、渡舟場は、河船をみな陸上して締り固く、日將に暮れむとして、全く途方に暮れて、川岸を流に添ふて降らせ給ふ。今までは金殿玉樓にあらせられ、土踏む折もなかりし御尊体、ふり返り見て、安藝守は暗涙に咽ひけり。親王、遙かに川を望ませられて、「安藝、汝御苦勞なり、若し舟なければ流れのまゝに仙臺に往かむ」と隨員を激して涯も渡り岩も越し、藪も通りて、道なき道を踏み給ふ程に、小舟の漂流あるを見て、隨員羽瀨彦太郎、依田織江、羽倉綱太郎、堀井吉之助、赤崎安二次、大久保與一郎、市川小市郎、山口朴郎、天野雲平、大岩正明、村上剛藏、本間勝五郎、山口龍五郎、石川益太郎、菅野喜三郎、山口松三郎等必死を盡して是を捨ふ。親王、隨員に曰く、予は東叡山の管領なりし身、永代の寶器靈場今や烏有とならば、予も亦一命を捨つべき筈のものなりき、

然るを今は此所まで落ち延びしも、やがては、奸臣（薩長藩を云ふ）の手に如何なる辛き目を受くべきぞ、若し、この舟に掉して舟碎けなば、予等は捨つる一命を此所に埋めむ、君し天恩幸に無難なりしなば、是より奥羽諸藩と語らいて、後事を畫せむ、それ生死をこの一隻の運命に委せむと。即ち大浪に葉舟を放つて、波のまに〳〵に、渦卷く濁流に漂ひさせ給ふ。道中の御困苦誰か知らん。渡場の役人は、非常の警報を打つて、捕手を四方に起して、罪人呼はりを爲せしかと、親王の御避難と聞きて恐縮汗顔。着して此所は何所と土民に問ひは、安達郡本宮なり。それより中山道に出でゝ會津に御着、後ち仙臺に御下向と拜承す。宮の檄書其他は卷尾附錄中に登載せり。

〔五〕日光方面の接戰

宇都宮に敗れし脫軍は、長驅して日光山に據るなり。大鳥圭介尙脫軍の總督將として、日光街道に出沒猖獗を極む。茲に於て大總督府は、軍監鍋島鷹之助を日光口西軍總督と爲し、安藝少將野村帶刀を總督將に任じ、宇都宮、安藝、肥前、大田原、黑羽、館林、薩州の諸軍を送るにあり。時に脫軍は西舟生、道谷原及び新田村方面に戰守を固め、大鳥圭介藤原に陣して昇天の慨あり。八月七日宇都宮、大田原の諸軍は新田村を攻む。脫軍大勢の陣彈丸雨注して、來り是を迎え戰ふ。西軍、遂に利非ず、左右の混沌砥澤川に擊退せらる。敗報、藤原口の總督府に達す。依て速に援軍を起し、藝州、肥前の諸軍を送り、三道を以て反擊を加ふ。兩軍の戰鬪殊守肉戰するも、脫軍の堅鬪よく三道を防ぎて勝敗決せず、此間に於て、肥軍は大渡に潛伏し、その繫舟を遮斷して俟つ、依て西軍は主力を二道に注ぎて敢死奮鬪、脫軍、遂に土崩瓦解となりて、高德道に走れば、その大渡の要路今や一隻の船なく、脫軍混沌右往左行の窮態に乘じ、肥軍の蜂起突如に猛彈を發す。脫軍惱々萬苦の中に遁れ、漸く道谷原を保つにあり。

脫軍は道谷原に戰守を固めて、更に砥澤川の敵を扼する所あり。八月八日西軍は主力を鬼怒川に注ぎて、大に道谷原の脫軍を砲擊す。脫軍堅鬪川岸に巨門を並列して防戰最も努む。折しも砥澤川に閉息したる宇都宮、大田原の

諸軍は、進んで脱軍横背を衝くべく、道谷原を指して發す。されど脱軍は前日來戰守を此所に張るもの、依て砥澤川の西軍出動を見て、忽然其足もとに蜂起し、彈丸雨注して戰を挑む。西軍恟々足の踏む所を知らず、百歩を退きて大に戰ふ所ありけるが、脱軍の壓迫に最早拔く能はず、されば鬼怒川の西軍は兵を四方に進めて、道谷原の包圍攻擊を行ふ。脱軍力闘尚守備危く、茲に於て、夜暗を待つて、藤原方面に輾回す。

八月十日となりて、會津の援軍は先發して日光表の北方に陣す。脱軍の戰氣大に振ひ、今や笹尾村、袴腰、深澤峠の嶮を扼守して勢ひ猖獗を極む。薩州肥前の諸軍大呼して袴腰に迫りけるが、脱軍殊守して對峙頗强なり。攻防の激戰砲聲轟々として、互に勝敗あり。さる程に、肥軍は脱陣に躍進して奮擊突戰、主力を茲に注がしめて肉迫すれば、薩軍、其虛を突いて猛進し、遂に脱軍の本據に火を放つ。焰煙猛火は彈丸を加へて、脱軍の横背より襲來し遂に袴腰の脱陣を屠る。茲に於て、脱軍は潰亂し、みな退いて深澤峠の嶮に據つて是を防ぐ。西軍一勝の威勢は益々是を尾擊し、薩州、藝州、肥前の諸軍を送つて、一呼して深澤を攻む。脱軍勇猛巨彈を連發して頗守し、兩軍の戰鬪晝夜に亘りて勝敗決せず、轟々たる砲聲は、四面を震動すること連日、稍々もすれば西軍は頽敗にあり。茲に於て、西軍は諸道に轉戰せる軍勢を集中し、兵を進めて、深澤峠の後背を衝かしむ。依て脱軍は今や狹擊陣に陷り塵戰苦闘云ふ可らず、深澤峠の嶮戰守有利と雖も、西軍前後の壓迫は、如何にしても防く能はず、みな退きて藤原村を保つにあり。

八月十七日、西軍は大擧して、愈藤原村に迫る。然れども此所には大鳥圭介の鎭座する所、部下を指揮して部署堅く、頗强勇邁、烈戰奮闘、砲銃彈の運用巧に妙を極め、西軍、必死を盡して力戰するも、容易に拔く能はず、今や作戰の計謀將に盡きむとして、殘壘を固守して塵戰苦闘にあり。さる程に、闘東武士の雷名を轟かせし大鳥圭介、夜暗に乘じて會津に向ふ。

八月二十日となりて、脱軍の一軍は都賀郡富士見崎の嶮に據り、岩砦の中腹を保ちて猛彈を發す。薩州、宇都宮、黒羽の諸軍は本道間道より攻め入りしが。脱軍の防備伏して是を擊つ。砲聲轟々猛彈四方に起り、彼我の激戰慘

を極めて日も暮れたり。然れども兩軍の對峙益々猛惡と爲りて、勝敗尚決せず。時に藤原村に火焔の昇るあり、即ち脫軍は要衝を自燒し、糧米を四方に徵發して高原方面に走るに至る。

八月二十三日、大田原軍塩原を攻む。脫軍一敗して四方に走れば、此時に當りて、會津の援軍は、横川村に宿陣の報あり。茲に於て、脫軍は益々勢を得て躍動す。高原口の脫軍、一躍して黑軍を衝き、今市口の脫軍は捲土重來して土軍の營を冐すあり。かくて脫軍は四方に狂起し、西軍諸方の部署を襲撃しつゝ、次第に横川村にと割據し來る。

八月二十五日の曉天、藝軍はその三依村の陣營を發し、兵を三道に分ちて先陣の勇を揮つて、横川に迫る。墳立山、戀路山及本道是なり。此所はそれ會軍の主として守る所、西軍作戰の陣容また周到ならざる可らず。藝軍、進み來つて砲を發するや。脫軍躍起となりて、忽然墳立山より現はれしと見る間に、更に會軍の精鋭は、本道を猛進して、共に藝軍を擊破し、更に戀路山に戰つて、また藝軍を碎くに至る。依て藝軍の敗士はその拔く可らざるを知りて、先を競ふて混亂するにあり。茲に於て、會軍は是を尾擊し、遂に三依村に到つて兵を引く。

忽にして莊原口を進擊せる大田原軍、また横川に來つて、脫陣を砲擊すること猛烈也。時に脫軍の大勢は、既に藝軍を追擊し、陣を守るは僅かの隊士而かも一勝に誇りて守備大に怠る。大軍の突進を望み見て、愕然其爲す所を知らず、アワヤ本陣を失はんとせるに際して、三依村より引揚げたる會脫の大勢來る。脫軍、輕裝その走驅に便なる所、突如として大軍の一陣に亂入し決戰誠に巧妙を極め、會軍また兵を二道に分ちて脫軍を掩護する奇効あり。大軍苦戰殆んど戰守に苦しみ、對峙いよ〳〵險惡となりて、日、既に暮る。茲に於て、會軍は愈横川の防備を固め、兵を左右に部署して、本道を扼守し更に前日來の墳立山及び戀路山には、益々巨門を配りて嚴備を盡し、以て西軍の行動に虎視を張る。然るに西軍は前日の敗戰に鑑み、總勢を横川村に集中して、いよ〳〵會津進擊を合す。二十七日夜は、月、未だ昇らず。此間に於て、部署既に成り、その薩州、宇都宮の諸軍は本道を進み藝州、黑羽、肥

前の諸軍は、墳立山及戀路山に相分れて、進擊を開始し、共に二十八日の拂曉を待つて、總軍一齊に攻め入るにあり。果たして、天、漸く曉を報ずれば本道に在りし薩州、宇都宮の諸軍は、霹靂一聲曉霧を破つて、巨砲を天地に發し、以て横川の總攻擊を報ず。茲に於て、三道の砲陣は一齊に砲門を開き巨彈を益々注ぐ。兩軍の戰鬪天地を震裂し、飛丸は雨霰となりて、隊士を殪す其數を知らず。かくて本道の宇軍は、早くも躍進して、會軍の陣を冒かさむとす。會軍本道を扼して撤彈を發し、大に宇軍の中堅を崩す所ありけるが黑軍墳立山に迫りて一陣を拔くあり。藝軍一進遂に戀路山を破るに至りて、大田原、肥前の諸軍は、本道に主力を注ぎて猛進す。會軍殊守最早彈つき、今や瓦解せむとして、漸く部署を保つ。墳立山戀路山の敗士等來つて本道を防き、龍爭虎鬪、勝敗此一戰に決せんとする程に、陣後遙かの驛中に當りて火焔の渦き昇るあり。焔煙天に漲り、滿目悽慘を極めて、會脫の防備は一度に崩る。蓋し横川本道の接戰、其拔く可らざるを悟り、本陣を自燒して三王峠に據る也。

〔附記〕日光方面の西軍は、是より會津に向ふ。脫軍一敗地に塗れて、會軍は南會津郡三王峠に戰守を張る。依て三王峠の戰より、以下專ら會津日光口の戰爭として、會津包圍總攻擊の部に登載すべし。

脫軍が日光に據りたる所以のものは、去る五月十五日の戰爭に於て、壯嚴流麗なる上野東叡山の造造物が、西軍の爲めに烏有とせられたるに鑑み、又々日光東照宮も其通りと爲りては、痛惜禁じ難く、飽くまでも廟地を守らんとの一念に外ならず。

奥州白河口戰史

〔一〕白河關門の戰

白河は奥州街道の關門地にして、山と川とに依りて自然の要害を爲し、世に云ふ守るに易き攻むるに難き白河城は、驛街を南にして、峨々として此所に聳立す。戍辰も淺き春の東北の天空は、俄然として、かき曇り、奥羽列藩が、固き同盟の下に、愈西軍に抗すべく、今や共同作戰の陣を敷き、以て守殊防戰の心力を盡して、勝敗を此要害の奥奪に堵せんとせるは、また深き所以の存する所たり。

元來、白河城は阿部氏十萬石の居城にてありけるが、慶應三年に至りて、城主、棚倉に移封となりて、今は二本松藩の預り也。されど慶應四年の今日城郭には主人無しと雖も、戍辰事件の惹起するに及びて、會津が裏面の主人役、即ち會津が國境を守るには、白河に嚴備を張らざる可らざるは勿論、今や奥羽諸藩の共通利害の上より見るも、敵を白河關門に入れざるが、聊も大勝の基礎なり。茲に於て、會藩家老西郷頼母、白河關門の總督將と爲り、仙藩白石城主片倉小十郎、奥羽軍の總參謀と爲りて、關門の嚴備いよ〳〵整ふかくて白河を守るものには、會津、仙臺、二本松、棚倉、石城、相馬、福島三藩、守山の諸軍にして、白河口の力戰、それ西軍を一呼に屠らむと、總軍の志氣昇天の概あり。

四月二十五日も夜は深くして、德川脱藩殘黨數百人、彰義隊軍監吉村要人介と共に、江戸街道を落ち來るあり。然るに是を追擊せる土州、薩州、長州大垣の諸軍は、逸早くも坂口及び九番町附近に來りて、此所に夜營の陣を張るに至る。茲に於て、總參謀片倉小十郎、諸將を會し戰守を議して曰く、我軍、白河の戰爭は愈切迫したり。凡そ初陣の勝敗は、常に全軍の志氣を左右す。然らば我軍是を傍觀して、敢て敵の襲來を受くるより、我より進みて、敵の一膽を潰すに如かしと。即ち會津幷に脱軍を進めて、翌二十六日、突如として西軍の營を攻む。西軍狼狽、隊士は惚々として、戰守の砲を發せしかと、奥羽軍の勇猛には當る可らず。接戰一敗五里餘を退きて、芦野村方面に

と其影を殁す。

白河の初陣、砲聲四方に鳴動し、以て西軍の襲來を報ずるや。棚藩家老平田彈右衛門、大兵を擁して界の明神社内に陣を固む。此時に當りて、西軍の主力は既に宇都宮を發し、芦野村に到達す。薩州、長州、土州、大垣、因州館林、黑羽、彦根、忍の諸軍、奥羽の大空を望み見て、意氣揚々昇天の慨ありと云ふべし。されば奥羽軍は、南旗宿の嶮に據り、巨砲を連發して是を防ぐ。然れども西軍大勢の陣は、百砲を放つて四方より進み、砲戰二十八日より起りて、二十九日に終る。其間戰鬪晝夜止まず。此間に於て、西軍の鋭鋒は、いよ〳〵白河城の突破に、全力を注ぐに至る。依て大垣、黑羽、館林の

諸軍は、小鹿山の麓を迂回し、南湖を進軍して、棚倉本道に現はれ。土州、因州、倉根、忍の諸軍は、白坂口より左折して、黒川村方面に來る。蓋し黒川より進みて、原方より突入するにあり。奥羽軍は是を望み見て、南旗宿の陣に不安を來せしかば、茲に於て、旗宿を退き、城を顧みて本道を扼守す。西軍、南旗宿の空虛を衝いて、薩州、長州、大垣の諸軍を進め、而して九番町の近邑に逼りて疾風迅雷、勢ひ甚だ熾んなり。されば仙臺、會津の諸軍は、是を本道に防戰し、その棚倉、石城、相馬の諸軍は、棚倉口に在りて是を扼守し、二本松、會津、福島、脱藩の諸軍は、原方口に在りて、必死を盡して頑守し、彼我の戰鬪益々猛烈を極めたり。

五月一日、本道白坂口關門に當つて、西軍の突進するあり。依て瀨上參謀は、仙軍を督して本道に進み、會將一柳四郎左衛門は、會軍を率ゐて原方口に防戰す。須臾にして、仙將坂本大炊は、仙軍を督して會津街道の陣を保ては、西軍、白坂及び原方の二道に進み、巨彈を以て是を壓迫しつゝ、突進愈猛烈なり。奥羽軍、殊守して彈丸雨注す。激鬪酣となり、西軍主力は轉還し、兵を分ちて三道より迫り來る。その七曲村より進む西軍は、小丸山に向ふものにして、黒川口の西軍は立石山に來るものとし。更に一軍は西三坂山及び大坂山を攻むるものとす。惟ふに小丸山口は西軍の接觸甚だ近く、會將大沼權兵衛は九番丁に虎視し、純義隊長西村人要介は稻荷山に進み、棚將工藤庄左衛門は登り町を固め、更に阿部半右衛門、小川次郎、中野市藏等の棚將は金比羅山及び大松坂を據守す。而してその西村場は如何と云ふに、天神山及水神原は會軍是を守り、その立石山は仙軍の固むる所たり。

さる程に、下黒川口に在りし西軍は、早くも立石山に迫りて、攻勢頗る猛烈を極め、爲めに仙軍の凡ては見る〳〵瓦解して、遂に西軍の奪ふ所となりて、此所に倔强なる砲陣を置かるゝに至る。茲に於て、西軍は益々勇を鼓舞し、巨彈を以て天神山を連擊しければ、飛彈は新町裏登り町等に落下して、爆音百雷の如し。會將一柳四郎左衛門、同横山主悦、仙將瀨上主膳、棚將工藤庄左衛門等は必死を期して防げども、俯仰の陣形その及ばざるに、苦戰大敗して天神山も侵奪せらる。茲に於て、會軍は米村口に潰走し、仙軍は九番

町に逃げ迷ひ、西軍の逆擊に殪るゝもの數十人、棚將阿部內膳、立石山の敗戰に憤激措く能はず、純義隊副長渡邊綱之助と共に合戰坂に進擊せんとして八龍神に達せば、遙かの山上東南一帶の地には、薩州、長州、大垣、の諸軍は忽然大小の砲を發して、陣形頗る頑强なり。棚軍大砲隊長吉田國之進、榴彈を込めて連擊すれば、砲彈見る〳〵敵陣に爆發して、味方の意氣を鼓舞すること甚だ大也。龍爭虎鬪、烈戰相當りて奥羽軍有勢にあり。茲に於て、薩軍參謀川村純義は十文字坂を間道して、八龍神の麥畑に銃手を撤兵せしめ、突如として奥羽軍の足もとを衝く。奥羽軍、不意の襲擊に驚き立ち、アワヤ土崩瓦解と爲らんとする折しも、棚將阿部內膳は馬上勇々しく、部署を疾驅して兵を田畝に移し、以て薩軍三方の進擊に當らしむ。此時に當りて、純義隊副長渡邊綱之助は、棚軍の火砲を道路の上に挽き出し、榴彈を連發せしめて、その砲煙の立ち昇るを見て凱歌は高く、川村を目掛けて突進す。續いて阿部內膳も躍り出て、棚軍は先鋒と爲りて、麥浪を押し分けて勇み進む。兩軍殊守力戰、川村、棚軍の勇猛に恐れて走り去る。さる程に、白坂口の西軍は兵を纒めて山手に走り、次第に總軍を撤兵して、田畝の間に潛みつゝ、銃を發して驀進す。更に大砲隊は、本道より山上に移して、益々彈を込めて奥羽軍を擊つ。此時に至りて、仙將坂本大炊は、會津街道の要害に在り。西軍の突進益々火急の報を得て、兵を二手に分ちて、谷間に降りて防戰必死也攻防遂に西軍僻易し、百歩を退きて是を防ぐ。坂本、寡兵を率ゐて阿武隈川を渡り、銃を發して益々西に進み、而して部下を激して奮擊突戰。折しも飛び來る銃彈に、頭部貫通せられて茲に殪る。かくて白坂口の戰鬪は、いよいよ酣となるに至りて、參謀今泉龜之助、仙臺及び會津の諸軍を率ゐて、関を擧げて驀進す。

此時に棚倉街道の守備振はず、棚軍衆寡敵し難きに至りて、退きて櫻町關門を固守す。西軍是を逸せず、總軍驀入して櫻町に放火するに至る。棚軍遂に守る能はず、隊士、部署を捨てゝにくるや。諸口々の奥羽軍も、此時みな退きて、白河城壘に據りて戰ふ。茲に於て、西軍は三道より兵を進め、奥羽軍を白河城に挾擊して関高し。奥羽軍、必死と爲りて四方を防ぐも、總軍一

郭の割據は作戰不利なる所、隊士は拔刀して血路を開くに至る。血戰苦鬪、會將一榮四郎左衛門、此所に討死し、奥羽軍四散す。此時に當りて、參謀瀨上主膳は、仙軍の敗士を收めて、須賀川驛に逃げ延び、更に軍事局の命に背きて、二本松まで、にげ來れるに依り、軍罰に處せらる。

五月二日、敗報、福島に達す。軍事局の狼狽、果たして如何ばかりなりけむ。參謀增田歷治、一軍を率ゐて福島を發す。四日須賀川に到る。此時に當つて、奥羽軍事局總長坂英力は、諸藩に令を傳へて、而して須賀川を去る。奥羽軍即ち本道及び會津街道より進みて、須賀川より再び白河城に迫る。西軍力拒百砲を發して、防戰猛烈を極め、かくて戰鬪は日夜に連り、彼我の損傷も甚し。さる程に、軍事局の命に依る援軍は、伍々として列藩より群り、頽勢の奥羽軍を援けしかば、砲聲轟々萬馬狂奔して、五月十日も暮れたり。然れども西軍には援兵無く、且つ彈藥缺亡するに至りて、最早奥羽軍の鋭鋒を衝く能はず、烈戰遂に敗績して、兵を國境に引揚ぐ。敗報、江戸に達す。大總督府、愕然として後事を議するや。總指揮官大村益次郎、猛然議を立てゝ

曰く、傳へ聞く、越後口の戰爭激列を極め、總督宮樣、日夜苦慮遊さると云ふ。援兵は此所に急かざる可らざる所、今や白河口を顧る暇あらずと。此時西鄕隆盛は、大村の議に不法を鳴らして曰く、白河口は賊勢大衆を以て固むる所、容易に拔く能はざる可し、果たして然らば、仙米を擊つ尙遼遠に終る況んや伊知地正治（總督將）は同鄕の士也。我、伊知地を援けざる可らずと。茲に於て、上野彰義隊を攻む。五月十八日となりて、彰義隊突破の西軍は、いよ〳〵白河に達したり。

五月二十一日、奥州岩代信夫、伊達及び關東の無賴漢を以て成れる烏組、督將細谷十太夫と共に須賀川に在り。西軍再び襲來の報を得て、小田川に進發すれば、果たして、西軍の先手は、七曲の嶮に陣す。細谷烏、蹶起勇奮刀を拔いて、七曲に躍入すれば、西軍その委を望み見て、右往左行の混亂と爲り而して四散す。元來細谷烏は刀の武者也。素より一銃を手にする能はず、蓋し本來が無賴の奸物なるに依る。督將細谷十太夫、その戰鬪に臨む都度、奸物連に令を降して云ひけるは、敵は銃隊、我軍は刀の組なり、然れば彼は

遠きに利を得て、我軍は近きに効あり、然らば敵を見る、隊士一二人の死傷を顧みる事なく、進んで刀を揮ふに如かずと。細谷島の接戰、萬事如斯猛獸的なり。更に委そのものが、徹頭徹尾墨裝とありては、西軍の氣に喰はぬ所と云ふべし。

奥羽軍の戰守の陣、遙かに是を望めば、主力を四道に注ぎ、以て關東、米村、原方、棚倉の口々を守るに在り。更に金山口には、富賀須參謀此所に在り、その釜ノ子口には、高根參謀、二本松の兵を督して是に在り。さる程に西軍の交戰陣は砲銃を亂發して四方より群がり迫り、奥羽軍の堅鬪防戰いよ〳〵猛烈となつて、兩軍の接戰は酣と爲りたり。此時に當りて、西郷總督將は今泉參謀を從ひて、會津、二本松の精鋭を督して、坂口、双石、入澤の各地に轉戰し、大に西軍の前進を防きけるか、折しも白寺町方面に起る火煙を合圖に、西軍は大呼して驀進し來る。奥羽軍、最初の力戰遂に僻易して、今や土崩瓦解となりて敗績す。

かくて五月二十五日も暮れたり。奥羽軍は總勢一萬六千の兵を進めて、白河城攻擊の軍議成る。茲に於て、奥羽軍の先鋒隊は棚將平田彈右衛門是を督し、白河口及び金山口の二手に進む。やがて金山口先鋒隊は其追分地に間道するや、西軍は谷間に露營して夜も深し。棚軍大砲隊長吉田國之進、仙臺、會津の諸軍を山頂に導き、府瞰の陣よく西軍を掃蕩して、いよ〳〵郷渡村に總軍は屯集し、吉田、臼砲を率ゐて白坂口の先鋒と爲り、會將木村兵庫と共に進み、その白河口は平田彈右衛門是を攻む。かくて白坂口奥羽軍は旗宿裏を間道し、西軍の盧を衝いて驀進し、白河口に向ふ奥羽軍は合戰坂山頂に配陣するや、西軍は早くも麓に迫り、麥畑の間に撤兵して發銃尤も努む。茲に於て、兩軍の戰鬪は益々猛烈と爲りて、勝敗の決する所無かりけるが、接戰烈しく肉迫するに至りて、奥羽軍の彈藥は缺亡して遂に苦戰と爲りしかば、彈藥奉行の到るを待ちつゝ戰ふ程に、其人は今は所在も知り難きに一同愕然奉行杉浦粂八郎は、部下運搬の人夫を率ゐて、何思ひけん、既に〳〵棚倉城下に歸城したるもの。茲に於て、防戰の策計はつきて、仙軍の持場は俄然として瓦解し、白河口の奥羽軍は殊守尙苦戰大敗、戰守を施す折も無く土崩瓦

解と爲りて潰走したりけり。飜つて白坂口の戰況を見るに、會將木村兵庫は意氣揚々白坂驛の東方に進み、西軍の守備兵を追つて遂に山に登り、銃口を並列して一齊に發せば、西軍是に呼應して接戰起る、忽ちにして西軍の陣地近くには火の手は昇り、奥羽軍の志氣を援けて麓を一掃し、西軍をして西山指して遁走せしむ。棚軍大砲隊は吉田國之進と共に勇み立ち、榴彈を込めて連擊頗る猛烈なりしかば、猛彈爆發して西軍の殪るゝもの其數を知らず、かくて麓を逃げ延びたる西軍の一手は、早くも白坂關門際の土堤に撤兵し、砲銃を亂射して防戰最も努む。茲に於て、奥羽軍の大砲隊は山を駈け下り、關門の敵を目標にして、百彈を込めて堅守奮鬪、烈戰相當りて破竹の勢あり、されば西軍も殊守及ばず、見る〳〵退きて高きに陣す。奥羽軍是を追擊せんとしけるが、此地は密林四方を埋め、湖沿徒に草野に隙れて進止意の如くならず、隊士は憾みを呑んで追追を止め、而して舊の位置に引き揚けて敵情の動靜を虎視するのみ、さる程に、彈藥の缺亡は此所にも起りて、補給の途は事全く絶え、兩道の先鋒中途に坐折して、白河總擊の陣配茲に動搖す。

五月二十九日、西軍、陣容堂々城郭を發し、大呼猛突して是を攻む。攻防の砲戰晝夜に亘り、天地轟々として萬山も崩れむとす。六月一日の曉天、薩將前原一誠は、薩軍を率ゐて、坂口を攻め上れば、阿部參謀、不意を喰つて野石村に走れり。坂口の敗戰に諸軍は驚き入りて、脫軍を先鋒として、仙臺、福島の諸軍は攻め來る。薩軍頑守して彈丸雨注す。折しも駈け來れる細谷鳥の一隊、拔刀して関を擧げて突入す。薩軍、細谷鳥の奮戰に、今や發銃の遑無し。さる程に、仙脫の諸軍は來りて、遂に前原を擊つて走らす。

かくて六月七日も暮れたり。時に細谷鳥は大和田山に潛み、而して西軍の動靜に虎視を張る。折しも銃聲一發、天地を震動せしめて、銃丸は富士見山の頂上より來る。細谷鳥、是を遠きに望み見て、變を通告する間に、西軍歩兵は山を駈け降りて、發砲しつゝ根田町に進擊す。されば仙軍は七曲坂に在りて、細谷鳥を掩護して接戰猛烈。茲に於て、西軍は忽ち七曲坂の仙軍を銃擊して益々迫る。細谷鳥、その虛を衝いて奮擊突戰、此時駈け來れる十六人の拔刀隊、これこそ棚倉藩の劍客の一隊、右手に五尺の大刀を振り廻し、左

手に一丈有餘の鎗を提げて、疾風迅雷す。されば細谷烏と十六さゝげ、一手となりて西軍陣中に亂入して頑强勇猛、接戰當る可らず、力闘遂に斬り崩して、敵を富士見山に追ふ。九日、西軍は富士見山より砲火を開き、彈丸雨注して奥羽軍を攻む。然れども攻防遂に勝敗決せず、日、既に歿して互に兵を引く。

六月十二日、奥羽軍は本道より攻め上りて、一擧して白河を拔かむと、即ち會津、二本松、棚倉の諸軍は本道を進み、仙臺、福島、脫藩の諸軍は、本道の進擊を掩護しつゝ、左翼を保ちて猛擊を開始したり。日、漸く暮れて、天、雨あり。然れども對峙解けず。夜暗益々彈を込めて戰闘酣なり。明くれは六月十三日、奥羽軍は愈戰線を頑守して、一意突進を令す、茲に於て、參謀大松澤掃部輔は、會津、仙臺、福島の諸軍を率ゐ、細谷烏を先鋒と爲して白河の入口に迫り、その愛宕山を攻擊して鬼虎の勢あり。かくて中島主將は二本松、脫藩の諸軍を以て、大谷地村を拔いて、一擧して石切山に進む。此時會津、棚倉、相馬の諸軍は、總督將西郷頼母に率ゐられて、棚倉街道金山口を猛進し、西軍を合戰坂に攻め破りて、大呼して町裏に到る。西軍、城を背にして防戰せしが、守勢甚だ險惡なるを以て、俄然として攻勢を取つて、兩道より進擊を始む。長州、黒羽、忍、大垣の諸軍は江戸街道に進み、薩州彦根、土州、因州の諸軍は棚倉街道に猛進す。疾風迅雷、龍爭虎擊となりて奥羽軍は遂に是を防ぐ能はず、隊士狂亂して退くに至りて、西軍は急轉一下に四方より驀進し、而して和田山を圍むに至る。されば高根參謀は孤兵を激して、是を防ぐに必死の勇を揮へしかと、彈丸今や殆んど盡きて、隊士、拔刀して圍みに亂入す。血戰苦闘ちり〳〵と爲りて四散す。時に仙將大目立武藏は、仙臺、會津、二本松の諸軍を指揮して、白河の西方なる野州羽太より進み來つて、米村の西軍陣營を襲ひけるが、西軍の力戰當る可らず、一擧に擊破せられて、再び羽太に敗兵を收む。されど此時會將相馬太郎は、流彈に中つて殪れ、兵氣大に狙喪す。

六月十五日、仙將大目立武藏、仙臺、會津の諸軍を率ゐて、羽太を發し、夜暗に乘じて白坂を襲ふ。攻防烈戰遂に勝敗決せず、翌朝に至つて奥羽軍は兵を引く。二十三日は折柄の大雨襲來に、奥羽軍は稍々沈靜にありけるが、

此間に於て、棚倉街道筋の西軍は、いよ〳〵南進して、棚倉攻撃に移れり。かくて棚倉城も遂に陥落して、奥羽軍の兵氣頓に弛む。さる程に、二十六日となりて、仙臺の援兵は石川大和に率ゐられて、矢吹驛に來る。然るに參謀増田歴治は、白河口の頽勢を望み見て、二十九日の夜を冒し、火を矢吹に放つて須賀川に退却す。茲に於て、變報、白河四邊の奥羽軍に到る。總軍愕然全く膽を潰して、その爲す所を知らず。されば細谷鳥は憤然その非を怒り、往いて増田を刺さむとして、須賀川に尾行し、兩將相會して燒討を論判するや、増田、細谷鳥の嘖問遁る能はず、歎聲を發して而して曰く、予や、白石に到つて自害せむと。細谷、是れ一の奸言たるを悟らず、増田を刺すを止めて、相約して別る。

七月一日、奥羽軍は白河を攻む。大目立武藏、仙軍を率ゐて阿武隈川を渡り、元天神山に奮戰して遂に是を破り、尚も尾擊して頑强也。而して二軍は立石山の麓に迫り、細谷鳥、天神町裏より躍進して、城背なる馬除院を略取し、尚も進みて城を衝くや、西軍百砲の陣は、猛彈を連發して頑守す。細谷鳥、百戰遂に拔く能はず、撤彈を浴せ掛けらるゝに至りて、那須原に退却したりけり。七月三日に至れば、軍事局總長坂英力は、仙臺中將の名代と爲りて、大兵を擁して白河に發足の報あり。奥羽軍是を聞きて凱歌天を衝く。

七月十五日、軍事總長、いよ〳〵須賀川に來る。茲に於て、諸軍を會して白河城の總攻を令す。依て諸軍は早くも根田口に迫る。然るに西軍は豫め是を探知して、根田に餌兵を止めて、主力を左右に潜伏せしむ。果たせる哉、奥羽軍の大勢は、忽ち根田の餌兵を討落して、大呼して城に向ひけるか、折柄起る西軍の伏兵陣、奥羽軍の後背に現はれて、根田の本道口を喰ひ止めたり。茲に於て、西軍放射の陣容は挾擊に在り。されば切角進み來りし奥羽軍も、慶戰苦鬪遂に敗れに敗れて、鏡沼指して走るに至る。

奥羽軍、四月二十五日以來の奮戰、七月十五日と爲りて、遂に起つ能はず疲兵を纒めて北行に決す。依て此所に白河口總督府を置かる。即ち鷲尾侍從は、白河口東山道西軍總督を命せられ、久我大納言、東北遊擊の督將となりて、白河常宣寺内に行營を置き、板垣退助、伊知地正治等と共に、大に作戰

を議するにありき。

〔附記〕白河の戰爭に於て討死したる西軍隊士は、同所長壽院墓地に埋葬せられたり。而して其氏名年齡出身地に就ては、棚倉町故井上光一氏の遺稿に詳か也。

白河口總督鷲尾侍從は、八月となりて、所勞の爲め歸京を命ぜられ、正親町中將、代つて軍務の總督と爲る。

〔二〕棚倉の戰

白河關門の戰鬪地と爲りて、奥羽軍連りに是が回復を計りつつある六月、その二十四日を以て、西軍には棚倉攻擊の命は降れり。茲に於て、薩州、長州、土州、大垣の諸軍は、白河關門棚倉本道口に戰守を張りけるが、大命一下忽ち方向を轉還して、本道に進擊戰を取る也。蓋し事茲に至れるは、西軍棚倉藩の虛を看破しての事也。何となれば、白河口の防備に於て、奥羽軍は是が回復を計りて、容易に白河の地を去らざるのみか、却つて戰守を固むる今日、その棚倉藩とて、同盟藩たる責任上、白河口總指揮の命は至重至嚴にして、等しく持場を守るべきは勿論なるを以て、此戰況に臨む間は、素より居城の武備を顧るの遑も無し。棚倉の實情それ右の如し。果たして然らば、今や棚倉街道に在りし西軍、俄然その委を殺して、南進するに至りし變報の起るに於ては、棚倉藩たるもの、何ぞ閑々として居らるべきものぞ。然りと雖も、白河關門の部署を虛にする譯にも參らず、茲に於て、白河在陣の棚軍は、西郷總督將の許可を得て、居城の守備に當るにあり。さりとて大兵を割く譯には非ず、實に寡勢の孤兵に止まる也。武士の去就は、斯る場合に處して、少しは馬鹿げたる感もありけれど、同盟の義約を主位として、自己一藩を客と爲すは、飽く迄も奥羽の士道を脫せず、棚倉藩たるもの、能く列藩の武道を体現したるなれ。

居城守備の許可に依りて、參謀阿部內膳、同平田彈右衛門等は、自藩の孤兵を以て、郷渡村の要衝を保ち、而して大敵を此所に防ぐにあれど、西軍の進擊は、破竹の勢を以て、巨門を開いて郷渡の陣を擊殺する也。されば棚軍は必死の勇を揮つて、大に防戰に努めしかど、元來が寡兵なるを以て、力拒遂に敵する能はず、退きて金山村に走れり。棚軍郷渡の敗戰に、白河在陣奥

羽軍の本營に於ては、相馬、石城、會津、仙臺の諸軍の中より、更に部署を割きて援を送るあり。茲に於て、棚軍は先觸を得て大に踴躍し、而して金山に一戰を交ゆるも、西軍大呼の勢には當る可らず、退きて松原に砲陣を敷くに到る。此時に至りて、白河の援軍は三森、上臺に據りて戰守するも、西軍一呼の勢は威風堂々棚軍の陣を拔き、更に急轉して三森に逼り、上臺を擊つに至る。石城相馬の諸軍、三森の陣を固守して是を防ぎけるが、砲戰一敗地に塗れて部署を壞亂し、而して逆川に遁れ、激鬪の戰陣これを遙かに望み見て、その拔く可らざるを知りて、淺川に退却して防備を固む。さる程に、上臺の戰鬪は猛烈を極めて、仙臺、會津の孤兵は烈戰遂に守りを失し、長驅して須賀川に兵を引く。かくて棚軍の孤兵のみ本道の大敵に當るに至りて、是が防禦の策も全く盡き果てゝ、本城の禍危は眼前に横はりたり。

西軍、上臺を略取して、愈攻城の策を決す。薩洲、大垣、黑羽の諸軍は、山手を間道して小菅生より進み、長州、土州、館林、彦根、因州の諸軍は、尙も本道に添ふて進擊す。然るに此時に當りて、海軍に依て常州平潟に上陸したる濱道の西軍は、奥州關田村より進み來つて、等しく棚倉に迫るにあり。西軍兩道の攻擊陣、巨彈を遙かの彼所より送りて、こゝに攻城の砲聲は傳へられたり。されば棚倉藩の孤城や、今や興癈興奪の分岐に掛る火急に臨み、一藩擧げて是が防戰に當るも、其多くは白河に在陣して、漸く警備の許可を得たるものゝみ、是が實戰に當らむとは、勝敗云はずして定まる所、更に列藩の援軍すら、石城、相馬の諸軍は、淺川にて援道絶たれ、仙臺、會津の諸軍は須賀川に走るに及びて、本陣の援兵派遣も、今や全く時遲く、向後たゞ城を枕に討死を決する外、更に手の出すべき策は無き也。

西軍、益々砲彈を送るに至りて、棚軍は孤壘に據りて、數門の大砲を以て應戰はしたるものゝ、東西の總攻陣には當る可らざる勿論也。かくて巨彈は益々城街に落下して、爆發四方に飛び上り、砲煙朦々、大風襲來して砲火を導き、見る間に黑煙は天に漲りて、棚倉落城の火災は起れり。西軍、是を望み見て、凱歌を擧げて猛擊すれば、飛彈は城郭に爆發し、石垣を破り、土堤を崩して猛彈の往行滿目悽慘。此間隊士は鬨高く、燒熱の戰場に向つて、劍

を拔いて發す。龍爭虎鬪、屍山血河となりて、尙戰に堪ゆる者は、血戰陣中に一死を決する也。勇往混亂、城兵みな去るに及びて、棚倉城、こゝに陷落す。

此時に當りて、平潟口西軍は新田山の險を拔き、總軍大呼して湯長谷藩に攻め入るの形勢にあり。されば棚倉追擊の西軍は此所に屯營して、南門外の民舍を宿營地に當て、而して平城の攻擊を環視するものとす。

〔三〕三春藩の降順顚末

六月二十四日の一戰、西軍、東西より進み來つて、遂に棚倉城を屠るに至りしと雖も、白河口奥羽軍の動靜は、兵を益々注ぎて四方に陣し、勇往決戰飽く迄も白河の回復を計りて止まず。二十九日の須賀川燒討、七月一日の白河總攻擊、三日の軍務總長南下と、奥州本街道の近邊は終日多端を告げ各地の防禦嚴なるに於て、奥羽軍は志氣大に振ふ。かくて、七月七日に至れば、仙將鹽森主税は、棚倉城の回復を計つて、郡山より三春に到る。茲に於て、仙臺、二本松、福島、棚倉、守山、三春の諸軍を統轄し、意氣揚々兵を進めて、十六日、古館山（石川郡淺川村）の嶮に據り、淺川の渡を隔てゝ巨彈を送る。西軍變を聞きて驟起勇奮、大に奥羽軍を防ぐに頑守する程に。折しも三春藩の持場は、總起して突如逆砲を發するあり。更に守山藩の擧動も不穩なるに至る。何れも古館山の要害に於て、斯る仕業なるを以て、奥羽軍の不利は言はずもがな、遂に苦戰大敗して、須賀川及び郡山にと逃げ來る。茲に於て奥羽軍は大に怒り、諸將を會し策を議するや。衆評一致して、今に於て大擧是を屠らむと云ふにありき。時に仙將氏家兵庫は揚言して曰く、古館山の一戰、三春に反盟の模樣ありと雖も、未だ判然たる確報を知らず。果たして然らば、輕擧同盟の藩を討つに至らば、それ人心の離反、こゝに始まらむ。さらば予や是より三春に到り、而してその形跡を確かめむと。即ち衆議一決して、氏家、三春に進發し、而してその擧動につき、虎視を四方に張る所ありけるも、反盟の形迹は絶えて認め難きなり。さわ云ふものゝ、苟も一藩の向背を決する重大問題、何ぞ氏家の如き凡骨に關知せしむべきものには非ざる也。三春藩

は氏家の來るを見て、早くも反盟糺問か、さなくとも何かの苦情を吐くに來るべしと豫知す。果たせる哉、反盟糺問の來意なるを以て、甘言人を溶解すとの諺の如く、氏家たるもの、三春藩の瞞着に罹りて、尙己れの不明を悟らざるも滑稽ならずや。

是より予輩は專斷ながら、三春藩の反盟顚末を記さむ。元來三春藩の今日に於ける地位や、白河破れ、棚倉崩れ、石城三藩も落城して、西軍益北進の兆あるに至りて、是より白河口の斷頭臺に上るべき順路に在り。されは眼前に斯る危態を望み見ては、有勢に無勢の筆鋒を以て、降服に出づるは、また數の免れ難き所、況んや、官軍に抗爭する賊舉たるに於てをや也。茲に於てか、三春藩には順逆論なるもの、いよ〳〵露骨に鋒起するに至る也。而してその張本人たるものは、憚りながら河野廣中也。河野、生來か才智群を拔くの傑物、その剛膽なる論鋒、滔々たる言說、誠に百萬の大敵も靡く程の豪のもの。彼が後年政治家となりて、板垣退助等と共に、自由黨の旗頭以來、物論の急先鋒と爲りて、天下に暴れ廻りて、大部日比谷警察署の手數を煩はせし如く、生れ根性が百歲までもと、幼にして一物を抱くの男なりけり。されば戊辰の當時に在りては、河野、歲僅かに二十前後の靑二才、素より舊幕の時世に於ては、若輩何ぞ殿中に一言を吐くの資格無し、豈曾に一言所か、足も踏み入る譯に參らざる分在なりしが程に、所謂順逆論なるものを提けて、竊かに天下の志士を氣取つたものなりとかや。然れども士農の懸隔天地の差ある當時、況んや一骨の靑二才輩の弱言、最初の程は、誰一人として耳を貸す者無かりしと云ふ。是素より當然の事也。茲に於て、有繫の河野も愈窮態に瀕して、自問自答の煩悶にてありけるか、愈最後の手段を取つて、家老の邸に遊說を開始す。曰く、降れば天兵と爲り抗せば賊と爲る、後世の汚名、我三春の社稷を保つ、それ何れに就くか是か、否かと。舊幕時代の僻見に於て、よくも所信を斷行したるなれ。河野たるもの、有繫は時代思潮を先見したる者、茲に於て、三春藩の重臣連は、遂に河野の言に動かされてか、俄然三春の去就は此所に至りて、奧羽同盟謀反の卒先者と爲る次第也。

然れども、よし降服、天兵と爲らむと欲せども、思ひは三春藩は白河口の

一藩たる以上は、今日奥羽諸侯か、大同團結して、斷然戰陣に起つ場合に於て、三春が單獨謀叛を斷行するは、聊か後顧の慮大なるを感せざるを得ず。仍て此際に、守山及二本松の兩藩をも叫合せむとして、三春家老秋田右近、同秋田收の兩名を送る。依て守山藩（常州松川藩の支藩）は、三春の論に服從的贊成意見にて、その去就を共にしたりと云ふ。果たして然らば、三春藩の態度は女々しく且不德の至り也。男子たるものが、自己の信念を貫くに當りて、他人に迷惑を掛くべき筈のものに非ざる自明の理なり。然るを何ぞや、奥羽列藩評定に大影響ある氏家兵庫を瞞着し、而かも氏家をして三春藩の總督將に任し、甘言能く是を卷き服せて、努めて自藩の爲めに回護せしめ、以て列藩の作戰をして、大に安心致させ置きながら、竊かに白河口の中堅たる二本松藩まで誘ふとは、列藩義約の觀念に見て、餘りに感服するものにも非ざる也。さらば二本松藩は何と答へけむ。思ふに二本松の事たる、敢て賊徒たらむ事は、是を欲するには非ずと雖も、奥羽同盟の今日に於て、己れが四圍の事情を考量せば、南には會津あり、北には仙臺あり、是れ何れも大兵の雄藩の間に在りて、白河口の中堅藩として、重き使命の托さるる以上は、今更順逆を以て去就を律すべき所にも非ず。依て二本松の興亡は、一に仙臺、會津と其の運命を共にせざる可らざるを以て、素より同盟降服を云々するの時に非ず。況んや、奥羽同盟贊成の卒先者なるに於ておや也。然れば三春藩老の勸告に峻拒して曰く、弊藩、約盟の議を重んぜざれば、列藩に對する面目を失墜するこそ、死して後世に汚名を殘すに至る。然らば是れ不可なる場合なりと。二本松藩の所說、是れ奥羽武道の本質也。茲に於て、家老細川孫六郎も同盟義約を知る身ながら、藩論の趨向、また如何とも爲し難き風情もて、再考を約して歸國するに至ると云ふ。

細川の一言や、決して二言はある無しと雖も、人事亦計り難しと。即ち二本松藩に於ては、三春の動靜を懸念して、憂苦措く能はず。事茲に至りて、一應は軍事局の所置を求むべく、二本松藩外交掛岡信吾を以て、急騎を飛ばして、福島にと派遣したりき。然らば軍事局の狼狽こそ、果たして如何。衆論囂々、一に是が防遏に腐心する也。仍ち其善後策には、藩主又は若殿を軍

事所に禁足するに決し、依て此所に當るべき交渉員には、先づ三春重臣に近懇者ならざる可らずとて、福島藩物頭高橋純藏、軍事局の正使と爲り、瀨多佐中、その副使と爲りて、共に福島を發す。時に福島藩の援兵は、重臣澁川半彌に率ゐられ、密使の護衛を兼ねて、三春方面に進軍するあり。かくて本宮に到る。折しも西軍の偵察は、變裝して動靜を窺ふの報あり。されば三春問題の實査員たる所は、大に人目を憚るの所なりとて、福島藩の援軍をば此所に止めて、密使の歸還を待たしむる事と爲し、而して高橋及び瀨多の兩名は、單軀を提げて、疑雲重疊四顧暗々たる三春に到る。依て高橋正使等はその城奥に入りて、來意を告ぐるや。重臣等は是を耳にして、蒼々顏色を失し而かも多衆の面前に於て、かゝる秘密問題を論判する事は、その意中たる、誠に迷惑の感あるにも似たり。茲に於て、その會見の場所を指定するに、川俣屋の本陣を以てす。川俣屋の本陣、此所には仙將氏家兵庫の採配する所、曩きには反盟糺問の使者、今は首尾瞞着せらるゝが儘に、擧げられて總指揮官に得々揚々たり。更に援軍を率ゐて來れる二將樽井彌五左衛門、三春陣に參謀たり。

氏家が三寸の紅舌、己れ瞞着せられ在るを知らず、督將に擧げられたるも悟らずして、僅か十二本の鼻髮を撫で流して、語氣得々高きに在りて、軍事局の密使を引見するに、能く三春の背約を否定し、且つ附言して曰く、明日とも計り難き三春の戰爭、總軍今や部署を定めて、徹夜の防備に汲々たり。願くは御藩幷に二本松藩以下、諸藩の援の急なるをと。而して是を證するに城内の空虛を數ふ。知らぬが佛とは、能くも云ひしものなれ。定めしや三春藩たるもの、氏家の御人好を咄へ居たらむ。然り、氏家の云ふ如く、三春の隊士は確かに城を空虛にせり。然れども是れ防備の爲めには非ずして、隊士を二本松國境に送りて、是を隱匿したるなりと。

聽つて城内の消息を窺ふに、川俣屋の會見、或は如何なる結果に輾回するか、その不明なる所に、杞憂と臆測は交々湧きて、鳴りを殺して虎視す。藍し、若し萬一にして、藩主又は若殿が、愈軍事局預りと爲るならば、それこそは取つて返らぬ一大事ぞと。即ち城内の憂苦は、川俣屋の返報を待つや切

なり。茲に於て、一策は案出せられ、家老細川孫六郎は、河野廣中と共に、劍士の一隊を率ゐて、町外森林の要道に潛伏して、軍事局密使の歸還を扼すると云ふ手筈。蓋し有無を云はずに密使を殺害し、而して藩主を道に奪つて降服を斷行せむとするもの。

危かりき軍事局の密使、然れとも氏家兵庫が總督將たる資格に於て、三春渝盟を否定したるの言説は、是を責任ある返答と深く信じて、再び單軀を以て、歸國するに至る。やがて本宮に來つて自藩の兵を率ゐ、而して二本松藩に到る。家老丹羽一學、同大谷鳴海等密使を城奥に引見し、その顚末を聽取して、茲に安堵の思ありけり。されば二本松藩は俄かに援兵を增し、郡山、須賀川を始めとして、各驛中を固めて城内空虛を敢てしたるなり。

此時に當りて、海陸の西軍に對しては、愈三春攻城の命は降れり。實に七月二十三日也。されば翌二十四日と爲りて、長州以下の諸軍は棚倉を進發し黑羽以下の諸軍は釜ノ子を發して、共に石川町に押し寄せたり。更に其平潟口の西軍を見るに、大村、柳川、佐土原、薩州の諸軍は、大村藩參謀渡邊清左衛門に率ゐられて、平町を發足して、渡戸村、上三坂村に到達し、翌二十五日には蓬田村に進みて、兩道の西軍は益三春に接近するに至れり。

果たせる哉、一藩反盟に内定したる三春藩に於ては、竊かに款を西軍に通ずべく、河野廣中を先頭と爲し、熊田嘉善、秋田廣喜をして、藩主萬之助の名代役と爲り、共に馬に鞭つて三春を發す。降服使、棚倉に到る。此所は白河口の西軍の屯營地たる事とて、環視嚴なり。然るに青二才の一騎は堂々として、諸軍の陣營を遙かに眼下に見て、隊士の監視を駈け分けて、一見大名然たる剛膽なる態度には、西軍も一泡を吹きたりと云ふ。思ひは一骨の青二才、西軍の指令部に入りて降を議するや、城明け渡しと先鋒を誓言す。總督將板垣退助も、青二才尙高論風生四面を壓する河野を見ては、有繁に一驚を喫せざるを得ざる也。而して此會見が板垣退助と河野廣中の奇遇にして、往年天下を騷かしたる自由黨の種なりと云ふ。

かくて、二十五日となれば、石川町出發の西軍は、早くも三春に現はる。されば藩主秋田萬之助は、大小刀を捨てゝ、カミシモの儘荒莚に座し、本城

大手門前に拜伏して、平穩を誓ふと云ふ格を以て、こゝに三春藩の降服は落着したる也。然れども天機漏らす可らず、列藩素より預り知る所に非ず。

茲に於て、奥羽軍は三春を去る也。而して殘黨は四方に分れ、是を尾擊して西軍は北進す。薩州、土州の諸軍は三春を先發して、七草村を砲擊し、次第に小濱町、本宮方面に迫らむとす。而してその石城より來る西軍は、仁井田村を拔き、尙進みて小野新町に迫る。茲に於て、殘黨一敗大越村を保つにあり。

〔四〕本宮の防備と須賀川の陣

西軍は三春を領して、漸々として二本松に向ふ。されば七月二十七日を以て、西軍の主力は三春を出發し、石城口の西軍は大越村を屠りて、白岩、鹽崎、糠澤方面に於ける奥羽軍を驅逐し、而して三春出發の間道軍と共に、早くも小濱町に宿陣するに至る。かくて、本道に向ふ西軍は、その二十八日を以て、守山藩を追落し、大呼猛突して本宮に迫るにあり。此時に當りて、奥

羽軍は主力を須賀川に注ぎ、その本宮は主として二本松藩に守らしむ。依て本宮の防備は驛中を固めて、更に糠沼を扼守する程に、忽然押し寄せる黑羽館林の諸軍、今や先陣の勇を揮つて、一擧して糟沼を攻めけるが、奥羽軍、殊守して之を迎ひ戰ひ、頑强勇邁當る可らず、攻防の激戰西軍遂に敗れて、退きて援の至るを待つ。さる程に、土州、大垣の諸軍は來りて、大勢の陣を敷きつつ、再び來り是を攻む。奥羽軍の防戰尙衆寡敵せず、一敗して本宮の陣を守るにあり。茲に於て、西軍大呼猛突の勢ひ、大小の砲を揃へて、いよ〳〵本宮の驛邑に迫る。奥羽軍、砲設を驛端に取り、胸壁を本道の左右に設けて、必死の勇猛堅守奮鬪、攻防烈戰彈丸益々飛び、而かも西軍の砲隊は本道に巨門を配置して、砲擊最も力む。時に小濱口の西軍是を見て、急遽援兵を送り、本宮を横擊して大に奥羽軍を破る。忽ちにして、黑羽、土州の諸軍は、一躍して本道口を猛進し、関を擧げて驀入す。血戰四方に起り、龍爭虎鬪の陣、奥羽軍遂に苦戰となりて、最早援軍の途無きに至り、隊士の混亂屍山血河を踏み越えて、敗士、多くは中畑村及び玉ノ井村に走る。夜に入りて、

奥羽軍は細谷十太夫の烏組を先鋒として、大擧して逆襲し來る。疾風迅雷忽ち黒羽の陣を拔き、大呼して忍藩の營に迫る。薩軍來り是を防げとも、細谷烏の勇猛に敵す可らず、西軍いよ〳〵苦戰と爲りて、百歩を退いて陣を保つ。かくて變報に依りて土軍も到り。續いて長州、大垣の諸軍も來つて、高倉山に迫る。仙將大松澤掃部輔、遂に押し卷くられて、奥羽軍の後背險惡と爲る。然れども尙倔せず、兵を益々進めて垣軍の營を拔きしも、攻防の激戰奥羽軍遂に利非す、退きて浪々たり。

此時に當りて、須賀川固めの奥羽軍に軍議あり。蓋し今までは白河關門の一敗に、西軍を此所に喰え止めむと、一意戰守に汲々たりけるが、西軍の三春を略するに依つて、作戰計畫は茲に一變し、一意二本松に主力を注ぐに至りて、その須賀川の陣は、事實上西軍の重圍に落ちて、攻圍壓迫に自滅する外、最早二本松に通する命路絶たれたる也。茲に於て、白河口の參謀たりし瀨上主膳等は、諸將を會し策を立てゝ曰く、我軍、此地に在りて敵を防がむと欲せども、敵、俄然本宮を畧取し、我軍の進止は絶えたり。然らば此所に握手傍觀するは女々しく、唯だ〳〵苦死するは武士の恥也。さらば刻下の中に本宮を破り、一擧して血路を開かむと。會津、仙臺、棚倉、二本松、脫藩の諸軍殘黨決死一團、大擧して須賀川の陣を發す。

西軍、本宮を領して、尙須賀川を顧る大なり。茲に於て、郡山驛を中心として、本道要害の地に關門を置く。果たせるかな奥羽殘黨の襲來、捲土重來、砲銃の亂擊四邊を震裂し、突如として館軍の營を拔く。忍軍來つて館軍と兵を合せ、是を郡山に防がむとすれども、遂に敵す可らず。かくて奥羽軍は日和田に迫る。本宮の西軍、變報に愕然急に大兵を送りて、巨砲を發して防戰猛烈なり。仙將瀨上主膳、各間道を進擊して挾擊を計らむとしけるが、西軍是を豫知して戰守巧妙なり。山手の一敗奥羽軍本道に投じて、彈丸雨注す。此時に當りて、細谷烏は來る。更に仙將鹽森主税、大目立主税、大松澤掃部輔等も殘黨を率ゐて、來り援くるあり。依て奥羽軍は一呼して、いよ〳〵本宮に迫る。砲聲轟々天地に震動し、龍爭虎鬪血戰慘を極めて、攻防の對峙慘また慘、奥羽軍、遂に拔く能はず、敗士を收めて中山路に走り、而して暮成

の嶮を守るにあり。

〔五〕二本松の戰

西軍、白河關門の突破以來、日に〳〵兵を進めて、棚倉を破り、石城を落し、三春を降し、須賀川を拔き、本宮を領して、愈二本松を屠らむとす。惟ふに、二本松藩たるや、奥州十萬石白河口の强藩、奥羽列藩が白石會議の評定に基きて、白河口本道を固むるに當りては、興廢の興奪みな是を二本松の去就に懸け、而して重き使命を托するにあり。されば二本松藩の地位、奥羽軍白河口防戰の中堅となりて、一藩總擧援を四方に配り、藩城を守るもの、實にや空虛と云ふも過言に非ず。思ひ見よ、白河口の嚴備は、西軍・東山道の全力を注ぎて、是を攻むる所以のもの、仙臺を攻むるも、米澤を攻むるも復た又會津を攻むるも、その先決問題は、二本松藩の追落にあるを。西軍の東山道の作戰、海陸二道の主力を合して棚倉を拔き、白河を崩して三春を從へ、急轉直下、唯だ一擊の下に是を屠らんとして切迫す。三春藩、曩きには

謀叛を煽動し、其議の容れられざるに及びて、奥羽軍を欺き、主として二本松の藩兵を四散せしめ、暗に隣藩の動靜を偵察して、その虛を確め、いよいよ先導の勞を取つて、空虛の城郭を窺ふに至る。

三春藩及び守山藩の嚮導に依つて、二本松進擊に向ふ西軍は、本道間道の通路の遠近、延ては要害陣地に至るまで、巧に妙を極むるは、素より其處にして、七月二十八日の軍議に基き、本宮口及び小濱口の二道より進みて、捲土重來も啻ならず。されば事茲に至りて、二本松城内の空虛も、今や藩公の安否に係る所、恩城危きに至るに望みつゝ、最早援道は絶たれ、隊士は各地に離散して、急遽歸藩する譯にも參らず。事茲に到りて、城を守るの隊士、だゞ寡勢を以て大敵に當るのみ。されば藩主丹羽左京太夫は、諸將を一堂に會して、談合夜も深更に及べり。茲に於て、防戰を配陣するに、城代家老丹羽一學、自ら城を預りて興亡を一戰に決せむと。即ち本宮口を防ぐには、大檀の地内に陣を固め、而して家老大谷鳴海と共に、總指揮を取る也。更にその小濱口を防ぐには、陣を俱中の砂原に取りて、家老三浦義彰、同樽井武治

高根義人等を以て、殊守する所たり。

兩道の西軍は、七月二十九日の拂曉を待つて、いよ〳〵攻め來る。大檀松原の砲陣は巨門を開きて、西軍の進擊をば天地に傳へたり。さる程に、小濱口西軍は阿武隈川岸に現はれて、三ッ石の嶮に據りて砲火を開く。倶中の奥羽軍是を望み見て、仙臺、二本松の諸軍を送りて、藪の入に於て接戰せしめたり。かくて本宮口に於ては、督將野津道貫、精鋭なる一軍を督して、本道を驀進し來る。柳倉殘黨力拒一敗して百歩を退くや、督將本村重太郎、松原の砲陣を指揮して、發砲甚だ努め、奮戰よく本道を防げば、野津、進む能はざるに至りて、田畝の間に撤兵して、大に銃を發す。二軍青山隊、ハラ〳〵本道に進み出て〻、一呼して是に迫れば、同じく岡山の率ゆる一隊は、彈丸雨注して戰ふ。龍爭虎擊、戰陣漸く多端を告ぐるに至りて、二軍の青山隊は劍を拔いて、鬪を擧げて亂入すれば、岡山隊も亦來つて奮擊突戰、雨々蠭起して遂に野津に組打ちとなり、今將に一劍を加へむとす。折しも駐け來れる黑軍、銃に彈を込めて、威風甚だ熾ん也。茲に於て、二軍の拔刀隊は志氣大に弛み、前衛を捨て〻皆大檀陣に駐け上り、一手となりて俯觀して是を擊つ。彼我の戰鬪天地を震動し、大小の彈丸雨霰も異ならず。さる程に、小濱口西軍は三ッ石に集まり、河を渡つて間道より猛進せんとす。二軍の總督將三浦義彰、倶中の陣に在りて全軍を激督し、防戰最も努む。さりながら、二本松の配陣は、主力を本宮口に注ぎて、間道倶中は寡兵を以て守るもの。今更ながら目に餘る大敵を望めば、隊士みな死を決して奮擊突戰、死傷相當りて彈を益々注ぐ。然れども大勢は既に河を渡りて、四方に撤兵し、鼓聲堂々、馬首肉迫して鬨高く、砂を蹴つて押し寄する樣は、恰も大山の崩る〻が如く、大檀の砲聲と相俟つて、爆音四方を震裂し、此間兩軍の隊士は、倶中の砂原に會して萬馬混亂、決戰勇猛、銃を振り、劍を拔いて、突き立て、斬り伏せ激鬪慘を極めて隊士馳驅し、今や屍山血河と爲る。二軍の猛將高根義人も、大村の陣に攻め入りて、遂に殪れしとかや。されば隊士の負傷や、戰尙堪ゆる者は、屍を踏むて、この血場に一死を決せんとす。總督將三浦義彰、今や數手の負傷を身に受けて、鮮血淋漓尙是を忍びて、全軍の志氣を鼓舞するも

勇敢にして悲壯也。思ひは三浦義彰、本來が二本松藩の非戰論者、そのいよ〳〵奥羽同盟の成るに於て、是が反對論者として暫く牢屋に幽囚の身、さりながら、事みな過去に屬して、今や自藩の興亡に懸るに至る。茲に於て、輕き一命を社稷に捧げて、隊士と共に運命を仰ぐべく、砲煙飛彈の逆賊陣に、弧軍奮鬪遂に殪る。

此時に當りて、大檀陣松原の砲隊は、四方より來れる猛彈の爲めに潰えて砲車は破れ、大砲碎かれて、彈つき、力つき、督將木村重太郎は此所に殪れたり。されば少年四斤砲隊も今や詮なく、主將の首級を斬り取りて、松本英才等是を荷負つて、少年隊、今や散り〳〵と爲りて、城下にとにげ來る。かくて、西軍は大呼して大檀を攀ち越し、攻防混戰走驅の巷と爲りしが程に、その俱中口の戰鬪に於て、西軍の精兵は、血戰陣中を斬り拔いて、早くも松ノ坂に迫る。仙將氏家兵庫、銃手鎗手を備へて是を防げども、押し來る敵に起つ能はず、早くも間道の防備崩れて、西軍は城下に迫るに至る。茲に於て大檀陣中の奥羽軍、飛報に狼狽してまた防ぐ能はず。俄かに陣を捨て、本道

を退けは、是を尾擊する西軍の突擊、隊士は相混入して、大手門前に接戰す血場激鬪數十合、慘又慘を極めて、隊士の疲勞は死傷と共に、戰陣に打ち倒るゝばかり。

悲慘なる哉、二本松の血戰、隊士心力交々つきて、最早起つ能はず、忽ち起る火の手は家老の邸より起り、炎煙渦卷上りて天日暗く、城壘今や猛火の中に落城したりけり。實に午前十時とす。思ひは四名の家老は、既に城を枕に討死し、今は僅かに一名の城代家老を殘すのみ。それすら孤城將に落ちむとするに臨みて、城代家老丹羽一學は、奥の間より來つて大手門前に座り、屠腹して大小腸を唐紙の上に捧げ、大空を睨んで而して死すとかや。剛憎不敵の丹羽一學、白石會議に會庄庇護を痛論し、列藩同盟を糾合するに氣焰萬丈、吾れ二本松十萬石の城代家老、死を賊陣に散らすとも、義を公道に盡し得たらむには、後世また何をか憾みとせむやと。武門の意地何と美なるぞ。

家老淺尾數馬之助、藩主を擁して北條谷に遁る。老幼男女隨從して、谷を渡り、山を忍び、遁れ〳〵て身心疲れ、今や飢に迫りて、信夫郡氷原村に到

る。今入道内名主等、篤志者を叫合するに西奔東走、藥餌を配りて敗士を慰す。落武者、荒川に北走して須川を越さむとすれども、土民は後難を恐れて殊更に橋を絶ちて傍觀せしとか。當時の百姓たるもの、士族の戰爭などは、他國の火事視したるものなれ。おちうど、傷病死苦の困難に漸く櫻本に遁れそれより庭坂村に至りて、救ひを米澤藩に乞ふ。

〔附記〕西軍は是より會津攻擊の爲め、左折して暮成峠に向ふ。

二本松攻城につき、東山道四軍總督將板垣退助より、同伊知地正治に宛てたる書翰あり

是ヨリ速カニ守山ヲ取リ候。兼々軍議御座候處、近者、庄内ニモ佐竹ト言遂相始マリ、米澤ニモ、兼テ相廻居候官軍ト戰爭相初リ候由ニテ、目下ノ處ニテハ、白河口ヲ顧ル譯ニモ可不參、三春之報知ニ依レハ、只今之所ニテハ、二本松城空虛之赴ニ付、其好之機會ニ御座候ヒハ、明二十九日、攻城是ヲ拔キ、夫ヨリ會津不意討ノ目算ニ御座候ヘ共、總督樣之御意見ニテハ、當分命之降ル迄二本松在陣可然旨被仰候。（以下略）

本書中、是より速かに守山を取り候とあるは虛言也。元來、守山藩は西軍の馬夫役の任に當りたるものにて、板垣退助は通過したるまでのことに過ぎず。

〔取消〕三春藩が降服を守山に勸告煽動したることは無根也。次項に詳說す。

〔六〕守山藩と白河口の城代

奥州白河口は二本松藩を主腦として、棚倉、三春、福島、守山、下手渡の六藩、領主の威力を以て武備を張る所、西軍は東山道海陸の全力を注ぎて、此所を突破を謀議するもの、蓋し仙臺、米澤、會津の何れを衝くの先決問題とせり。此時に當りて、守山藩主松平大學頭頼升は、白石評定の列藩同盟より脫して、欵を西軍に通するに至る。今その顚末を概言するに、守山藩は水戸藩の支藩にして、當時十歲の若殿たりし頼之は、水戸烈公二十二男に當り、仙臺、南部、會津は共に姻族の間柄にあり。

初め會津追討問題の白石評定に上るや、列藩一致して是が寛宥赦免の哀願を爲りけるも、遂に奥羽同盟して去就を同一軌に取らんとして、こゝに勤王佐幕の激論生じて方向容易に決し難きに臨み、その守山藩は己れ二萬石の分限と雖も、正邪を辨ずるには上下の區別無しとて、家老三浦平八郎は、水戸の家憲に基く純然たる勤王論を持ち出し、而して是を論難して曰く、數日の

論判、歸する所は一ありて二無し、何時までも左樣愚圖〳〵して居ては、小便も相催せる故是にて御免と、斷然座を起つて、憚り乍ら大書院の廊下より放尿數丈、一座のものを呆然たらしめし豪のもの、藩主頼升は病辱に在り、若殿頼之まだ十歳の少年、一藩の向背は重臣の預つて力ある所、三浦の所見は遂に藩論と爲りて、上下みな勤王を口にするに至る。

茲に於て、守山藩は敵地に介在して、所謂勤王の態度に出でたるを以て、家老三本木鎗三郎、同增子鼎一郎、同遠藤無位の三人は、恰も脫藩人なるかの如き扮裝にて、陣中を切り拔いて京都に向ふ。かくて京都二條城に到れば、烏丸待從より、錦旗一流及び錦肩印（官軍たる夫識に錦切れを右の肩に付げたるものゝ由）六十一枚を交附せられ、意氣悠々歸國するに至る。

時に白河口の戰況は、棚倉落ち、白河落ち、三春も歸順して、二本松の攻城に移りて、西軍は伍々として北進す。惟ふに、西軍は奥州の地に入りて地理を辨せず、交通の不便と對敵關係は、その作戰行動に絶大の困難を來すは勿論にして、彈藥の缺亡する所、敵地を行軍するは愴々惚々然とし、糧食の缺亡は恰も餓童の如く、運搬の困難は徒に長大息を吐くの有樣にあり。かゝる內情の西軍、眼前に二本松十萬石の雄藩を控え、更に會津、米澤、仙臺の追討を思ひ起しては、參謀等の苦慮は言語に絶す。此時に當りて、獨り守山藩は勤王黨に在りしを以て、幸事遂す可らずと云はぬばかりに、全軍の命路を守山藩に求め、而して糧食駄馬人夫の徵發を行ふに至る。西軍の二本松攻城の進軍は七月二十七日より起りて、その二十八日には、大村、柳川の諸軍早くも守山に達せしが、隊士は飢えて全く餓童と異ならざる實情、更に所々の西軍も出動するに當りて、或は響導に、或は運搬に、將た又糧食の補給に左の如き令書の降る頻々。

官軍滯陣中兵食人馬之儀其藩江賄方被仰付候事

七月二十八日　　大政官　會計局

續えて二本松落城と爲り、會津攻圍の進擊の爲め、東山道西軍は海陸合兵

して、いよ〳〵會津國境に向ふに至りけるも、白河及び棚倉の敗士は鄉土に潜み、北は福島を區分して、大森、庭坂、瀨上、桑折等に奥羽軍は配陣し在るに顧れば、白河口の守備整はざる間は、奈何にしても會津討入は爲し能はざる所、是を守山藩に托して、後顧の憂を絶つにあり。

三春領十ヶ五村朝廷御沙汰迄之間於其藩取締可有之候事

八月八日　　參謀

二本松領郡山組十三ヶ村片平組三十二ヶ村大槻組十二ヶ村朝廷御沙汰迄之間萬事於其藩取締可有之候事

參謀　渡邊清左衛門

阿部基之介（棚倉藩也）舊領今般其藩江取締被仰付候間別紙鄉村高帳之通早ク地所受取兼而仰出候御趣意ヲ奉體認取締方諸事

行届候樣可致

行政官

一、鄉村高帳左之通

白川郡　七十九ヶ村
石川郡　六十五ヶ村
高合八萬七千八百六十八石六斗八升九合五勺四才

以上は守山藩の白河口西軍に負ふ所の責任也。藩領三十有餘ヶ村、更に棚倉、三春、二本松三藩の領地として沿道に在る二百十六ヶ村は、事實上領主の權義を行ふ所、當時の政務の範圍、是を取締と云ふ外、具體的の分類は不可能と雖も、領内治安警察事務を始めとし、收稅、司法より、更に軍政に亘りて占領地の警備も含むや當然なり。

兵戰の迹は田畝疲弊して五穀實らず、細民飢に泣き、盜賊晝夜に横行して

羅雖の聲々所々に起り、陣所、代官所は出訴歎願に忙殺せられ、更に百姓一揆は筵旗を立てゝ四方に蜂起し、郷土の騒動言語に絶す。守山藩、此間に於て城代の職を執る、其困苦果たして如何ばかりなりしぞ。又一方には西軍の徴發命令頻々として、或は白河に、棚倉に、三春に、二本松にと、夫役の組立より彈藥砲車を始め、人馬の糧食まで調達運搬の勞役、士農みな擧けて是に從事するもの六百人、思ひは東山道西軍の左析して會津討入と爲り、克く本望を完ふし得たるもの、守山藩の夫役六百人の勞力と、糧食の補給至れり盡せる大功に預つて力ある所、その攻圍策戰と爲るも、兵粮馬糧を貢かせたる事は甚だ多し。

それ西軍は仙臺と米澤を懸念しながら、白河口を虛にして會津攻城三十日、克く會津武士の猛勇を朽きしもの、一に諸軍の奮鬪と主將の努力を高言し、以て己れの戰功を揚ぐると雖も、守山藩の內助の功は敢て是を秘す。見よ守山藩の當時の內政、予、玆に云はんとするもの、藩の窮亡を晒け出す格と爲り、當主松平子爵家幷びに藩臣に對して、粗妄の執筆を論難せらるゝ無しとせざれど、藩長人伊治地正治、否、板垣退助等が自我にのみ走つて、大我の觀念を沒却せる行動に見て、その戰功論に裏書せざる可らざる也。思ふに、守山二萬石の小藩、武門の格式として五百の家臣を支持すべき所。戊辰の擧件に處しては、更に天下幾萬の軍兵が日夜の兵粮を始め、馬匹の手當までも負擔するに至りて、夫役六百餘人を雇入れしのみならず、軍需品の供給に、城內所藏の米穀は既に食ひ盡し、是より軍用金を蠶食し、續いて藩公の御手許金悉皆を吐き出し、尙不足を告ぐるや遠きを以て、其資を得るが爲め、年々領內に貸付置きて、萬一の凶荒に充てんとせる備荒金に對し、半減辨濟又は三分一辨濟帳消の方法を以て、是を領民より取り立て、遂には領內富豪に借財すること數萬兩、是等無理算段して巨額の費を投じ、而して幾萬の西軍需用と二百有餘ヶ村の行政をして、その悲なきを得せしめたる也。守山藩が斯る果斷を爲せしも、誰一人として不平の聲の發せざるは、小藩故に兵隊の奉公は役に立たざるを以て、せめて御上の役に立つならばと云ふ料見にて、水戸藩の家憲に基く勤王の一念に外ならず。王師は藩長人のみに在らねば、

備州も、大村も、藝州も、黒羽も、苟も錦肩のあるものに對しては、萬人一樣の奉公なり。然るに斯る實情も、薩長には左程とも認められず、奥羽各藩よりは憎惡せられ、東西全く孤立となりて、殘るは軍資數萬兩の借金と利息のみ。蓋し當時の趨向は、薩長に直接奉公するに非ざれば、勤王の實無きものと爲せし如く、此意味に於て、守山藩は薩長をして甘き汁を汲收せしむる爲めに、言はゞ椽の下の力持ちを爲したる譯なり。惟ふに明治創業に於ける薩長人の施政は、東北に對して苛酷とすべきもの多々あり。就中、金錢問題に見るも、盛岡藩の獻金七十萬兩につき、盛藩が有らゆる辛酸を嘗めて英人より三十萬兩を借入、内十二萬兩を盛岡の豪商村井茂兵衛に運用せしめ居る中、英人の債權を大藏省に引き繼き、遂に其所有尾去澤鑛山を沒收せる如き、水戸藩が藩札三萬兩を辨濟し能はざるを見て、十三萬坪の水戸屋敷（今の砲兵工廠の全土地）を沒收せる如き、今又守山藩の公債を自辨せしめし如き好一例也。

〔七〕福島近郷の動靜

（イ）福島藩の動靜

是より先き、西軍棚倉出發、三春淪盟と共に、益々北進し來りて、二本松の孤城落命は迫れる折柄、その福島陣を保てる奥羽軍は、仙臺藩を主力として、隊士僅かに五百人、若し須川口に迫り來らば、一擧にして是を擊ち破らんと、意氣揚々炬火を起し、日夜に戰備を張りて、陣容甚だ熾んも。

七月二十八日に至れば、砲聲は南の空に起りて、五里の道程を傳へ、本宮及び小濱の戰鬪を報じ、二本松藩より來る急騎は頻々として、援兵の派遣を迫るにあり。茲に於て、奥羽軍は俄然として憂色湧き、眼前この危急を望み見て、蒼々色を失へ、翌二十九日となれば、未明より起る砲聲は一層激烈を極め、戰爭いよ〳〵激甚なる間に、南方の大空には、黑煙高く宙を焦し、こゝに二本松の落城を告げたり。

二本松の一戰、奥羽軍一敗して遁れ來れば、福島陣の奥羽軍、いよいよ膽を潰して、みな落武者に伍して、瀨上方面にと走り去る。茲に於て、その殘壘を保つもの、僅かに福島三萬石の孤兵のみ。藩士奈何に勇猛の士のみなり

と雖も、日に餘る天下の大敵に抗せんは、事餘りに大膽過ぐるを以て、此際の一戰、孤立となりて破るゝより、寧ろ盟主の許に到りて大兵と共に戰はんとは、板倉藩臣の論議。茲に於て、福島藩兵は、仙臺に走るか、米澤に走るか、評定騷然容易に決せず。然れども、仙臺は大藩に似合はず、割合弱卒共のみとは當時の定論。僅か三萬石の麾下なれども、實は其置場所に窮する譯にて、遂に米澤に托することに一決す。物頭高橋純藏は、此時軍事係となりて、福島と庭坂との二里の間を往復して、要路を警戒すること嚴なり。

福島藩の家臣は、藩主甲斐守を擁して、一度に福島を發し、庭坂村を經ていよ〳〵米澤藩の福島口關門たる板谷に達す。然るに米澤藩とて二本松崩れ福島明拔きとなりては、自藩の東方を守る途全く絶えて、風雲甚だ穩かならざりしかば、俄然板谷の關門を閉さして、猥りに他藩士の入るを禁ず。茲に於て、米藩は布告して曰く、板倉の家來にして、老幼男女及び手負の者は是を引き取るも、血氣戰爭に堪ゆる者は、斷じて入門を許さず、依て藩主救護の身代はりに、往いて庭坂を固むべしと。

さる程に、二本松の敗士も、散り〳〵となりて米澤に落ち來り、又もや板谷關門の禁札にて、老幼男女以外は入門する能はず、兩藩の敗士は伍々として逆戻り、而して庭坂口を守るにあり。かくて米藩に於ても、大國筑後を督將と爲して、藩兵を送りて敗士を統御し、二本松藩家老淺尾數馬之介を總督將に任じ、德川軍監吉村要人介を總參謀に補す。茲に於て、その庭坂村を固むるもの、米澤、二本松、棚倉、福島、彰義隊合せて總勢八百人、銳意大森街道を警戒して、關門の守備堅く、庭坂村組頭澤田玄德等に命じて、驛邑の辻々に炬火を起さしめ、意氣甚だ熾んなるものあり。

西軍東山道の主力は、今や二本松に在りて、會津進擊を待つにあり。されば庭坂口の奥羽軍は、八月十七日を以て、大森街道を南進し、大舉二本松を衝かんとして松川村に到る。折しも彦根の一軍、大島擣を固めて、忽然猛彈を發し來る。總督將淺尾數馬之介、憤然起つて兵を二道に進め、馬首肉迫突擊迅雷して、彦軍の營を衝き、烈戰相當りて遂に是を拔き、尙も尾擊し（小島擣を攻む。彦軍また敗れ、退きて叢林より猛擊すれば、此時砲聲に出動せ

る薩軍。鼓聲堂々進み來つて彦軍を保ち、尙も進んで突戰し來る。淺尾、馬首を陣頭に馳せて令して曰く、薩賊來る。吾が藩祖の遺業を賊する奸臣、それ一舉に是を擊ち破れと。德川軍監吉村要之介、蹶然、兵を躍らせて突進し銃丸雨注して是を攻むれば、彦軍橫背より突入して、吉村を猛擊す。福藩高橋純藏、福島、棚倉の諸軍を率ゐて、擊て是を走らせ、吉村と共に猛進す。さる程に、淺尾の率ゆる二軍及び大國筑後の米軍は、大呼浴突して肉迫最も激烈を極め、遂に小島擣を崩して、西軍を安達郡二本柳に擊退す。西軍、更に援を二本松に仰きて、戰守最も努む。然れども此所に迫れるは、奥羽軍の死士八百人、烈戰奮鬪飽くまでも本城を恢復せんとするもの、捲土重來、殪れて後ち止まんのみ。かくて彼我の戰鬪は益々彈を込めて相當り、龍爭虎鬪戰陣たゞ轟々として、砲聲野山を震蕩す。棚軍勇猛遂に彦軍に迫り、胸壁を踏み越えて、血戰縱橫に往行し、薩軍も爲めに發銃稍々怠る。茲に於て、吉村要人介、二本松、彰義の諸隊を率ゐて突擊迅雷し、淺尾、大國筑後と共に尙猛擊止まず。西軍苦戰遂に拔く能はず、守りを捨てゝ瓦解すれば、奥羽軍は鬪を擧げて猛進す。折しも後背に起る霹靂一聲、砲銃彈を雨霰に注ぎて、勢ひ甚だ熾んなり。何ぞ二本松より急馳せる長州、土州の諸軍、二本柳の敗陣を保たんとして來るもの。奥羽軍、後を顧みて狼狽し、後背の敵を防ぐに百歩を退けば、今まで逃げたる彦根、薩州の諸軍、俄然として還り返し、今や挾擊の陣に陷れて、奥羽軍を苦しむ。奥羽軍殊守力戰遂に起つ能はず、退きて油井村を保てば、西軍一勝の勢疾風迅雷當る可らず、激鬪尙破れて庭坂村に逃げ歸る。

然るに信達二郡の暴動惡漢組は、福島城の空虛を狙つて、瀨上宮代の巢窟より襲來して、將に城内に侵入せんとす。福島の狼狽惶々として、難を四方に避くるもの頻々、折しも福島代官所の壯士に屠られて、暴動組四散せりとの報に諸軍愕然、殊に福島藩は、由を庭坂米軍の陣に上陳し、其許可を得て、藩城を守るに至る。

さる程に、福島藩客將澁川强之助（板倉勝達）は、曩きに天機奉伺として、九條大納言の東下以來、京に上りし身、戰後の今日行衛も詳かならざりしが、道路

の傳說二本松より來つて、以來因州藩參謀河田佐久間に容れられ、關東戰爭より白河口の陣中に在りて、今も尙二本松在陣の報あり。茲に於て、內藤魯一（豐次郎）、鈴木六太郎等は同志を叫合して十九人、夜暗福島城を脫して、澁川强之助に通じ、以て西軍の陣門に降るに至る。かくて澁川は河田の命を奉じ、脫藩人少壯の勇士を撰びて、變裝の刺客と爲し、以て暗夜二本松を發足せしめ、本道を密行して福島に至らしむ。

須川の關門、仙軍、瀨上及び桑折に在りて、尙此所を警戒し、暗夜變裝の二士を捕縛して、米軍是を斬らんとす。仙軍是を見て、二士を一應の訊問に附すれば、二士は福島の脫藩人小倉源藏及び小林茂なるもの。即ち暗夜に城郭に侵入し、澁川の命に依り、板倉三家老（池田權左衞門、齊藤十太夫、松原作右衞門）の首級を取つて、板倉の功を擧げんとせるもの。茲に於て、仙米の諸軍大に怒り、福島藩に嘖門して荒繩のまゝ是を引き渡し、而してその首級差出しを迫る。福島藩軍事係高橋純藏、同山岸文藏、一意二士の謝免を請ひとも、遂に許されず。茲に於て、長樂寺に指り、奧羽軍事局會藩評定員南摩三郎（羽峰）及び三瓶梶助に哀訴懇願、身を以て其責を負はんと詰まれば、南摩、遂に純藏等の赤心に動き、旨を仙軍に諾りて、斬殺を延期し、而して小倉等を檻囚し置く。

此時に當りて、幕府の閣老小笠原壹岐守は桑折に在り。福島脫兵の隱謀事件早くも此所に達して、諸軍の憤怒いよ〳〵高み、桑名公松平定敬、桑名軍事奉行山脇十左衞門、庄內參謀中村七郎右衞門等みな會議に列して、仙臺、米澤、庄內、桑名の諸軍を以て、大舉是を屠り、而して福島を燒討する大計は成りたり。茲に於て、福島藩軍事係高橋純藏、己れ一藩の軍務を司りながら、澁川强之助の密謀を初め、脫藩人を出せしこと、更に家老の暗殺事件の生せしには、福島藩の降意瞭然として、諸藩の嫌疑を氷解すべき策なく、術計いよ〳〵盡きて、斷然死を決し、屠腹して其義を立證せんとす。奧羽軍事局は是を評議に上せ、純藏の赤心を諒とし、漸く福島藩の疑雲を解くに至る。

二本松の西軍左折して、いよ〳〵會津に進む。茲に於て、會藩南摩三郎等は國難を望み見て、軍事局を發し、而して會津に歸る。仙將瀨上主膳。同鹽森主稅、同大目立主稅等、石筵の嶮に敗れて、高湯峠に現はれ來る。庭坂村

の奥羽軍は變を聞きて、偵察を送るや、偵察、早くも是を西軍と誤信し、恟々狼狽して本陣に報ずれば、米藩、三百兩の補償金を以て、急遽高湯温泉地を燒き拂はしむ。瀨上等いよ〳〵來つて、理由を庭坂本陣に嘖問する所ありけるが、何れも誤斷を知りて桑折に向ふ。

〔附記〕板倉藩は愈謝罪となりて、藩論二派に分れ、脱藩組の客將淺川强之助は、自ら正義黨と稱して、板倉謝罪の周旋を鼻に掛け、更に因州參謀河田佐久間の應援を得て、板倉藩政改革論を起し、二本松白木屋の奥座敷に於て、板倉三家老の斬殺を密議せりと。玆に於て、終始奥羽列藩の義約を尊重して、城内に戰守せるものは、一言の下に賊組と爲り、是迄の苦辛は全く水泡に歸したる譯也。さのみならず、三家老の斬殺とありては、最早一人の家老も存ぜざる次第となるを以て、後顧の憂色心も心ならず、依て旨を三家老に報ずれば、三家老の決心、勅命に死するは異存無けれども、同輩奸臣の言下に瞪るゝは、死して尙恨みありと。玆に於て、一死を捨てたる純藏、自ら發起して同志を叫合し、而して三家老の運命を助くるに至る。後ち純藏は、三家老救護の理由を以て、荒繩に伏し、囚檻の身と爲りて旬日。九條大納言の東京凱旋に當り、福島通過の際、醵醵忠敬公、變を聞きて、過去の恩義に見て、純藏の繩を解きしと云ふ。然れども、當面の人たる純藏翁、予輩、十數回に亘りて、當時事件の眞相を尋ねども、此事遂に一言も發せられず。右の件々それ或は誤見無きを保し難し。敢て附記す。

薩州、秋月、土佐の壺力に依りて、坂本守内と云ふもの、板垣退助の命を帶びて、二本松商人に扮裝し、庭坂村本陣に來つて、米藩の謝罪方を、大國筑後に申入れ、それより正式なる謝罪となる譯也。

(ロ) 兵亂中の盜賊團

岩城濱通りは、駒ヶ峯を畫し、岩代本道は二本松を限りて、その以南は共に西軍の勢力範圍たり。近くは福島藩米澤に退走するに至りて、信達の二郡は今や隊士の固めなき、所謂無政府の觀を呈するに至る。此時に當りて、威を專らにし恣腹を肥す所の、所謂暴徒惡漢組に對しては、空前絶後の豐年は來るなり。時適々仙臺藩細谷十太夫の「鳥組」なる精兵は、白河口の戰場に在りて、常に奇功を奏する所ありしかば、土民皆擧げて其威望に恐怖したりけり。惡漢の徒輩、能く民情に通じ、虛を衝くに長ずるあり。即ち自らを鳥組と尊稱し、徒黨無賴の奸物を狩り集めて、一種の暴動盜賊團を編成し、南進して、伊達郡に浸入し來る。地方の同類相需め、今や猖獗を極め、盜團の

本據を伊達郡掛田驛の山中に置き、告文を流布し、賊徒の叫合また大仕掛なりと云ふべし。曰く

此度賊徒（薩長）征伐ニ付、仙臺家ト御味方仕リ度輩ハ、幾人タリトモ相募リ候樣可有之候、尤モ、戰功有之ニ於テハ、御恩賞モ被成下候條其心得ヲ以テ盡力可有之候　以上

辰七月

仙臺軍事方

この文言たるや、去就實に堂々たるものゝ如しと雖も、その仕業を見る時は、戰爭は萬餘義なき防衛の爲めにして、主たる目的は掠奪、窃盗、殺人、放火にあり。これ仙臺軍事方の本意なるや、否や。大に疑ふて可然ものなり。

八月十四日、仙臺藩士數人浪々として、御代田村に出沒するあり。下手渡藩（伊達郡小手村立花出雲守）是を追跡する所ありけるが、浪士、雲を霞と其影を失ふ。忽にして二百人の一隊は、砲を發して山中より迫る。下軍戰守を部署して、大に戰はんとす。盗團夜に入りて其踪跡を殺す。夫れ下手渡藩は筑後三池藩の支藩にして、今や西軍の地位なり。賊團、即ち戰爭兼暴動を此處に起さむとす。

八月十六日、賊團數百人は、下手渡陣屋に襲來し、火災を四方に起して、物情爲めに騷然を極む。下軍、兵を送りて警戒を嚴にして待つ程に、果たして賊團は鼓聲堂々槍鐵砲を提げて、疾風迅雷、有無を云はずに、陣屋に亂入して、隊士を放逐し、軍資金及び所藏の糧米數百俵を手にして、而して去る。下軍、變を聞きて惚々狼狽し、飛報を三春屯營の西軍に送れば、此時既に別途の賊團は、日立村に侵入して强奪頻々。柳川軍來りて、日立村を砲擊して、兵を進めて是を捕縛せんとす。然るに賊團の閉息は、遂に柳軍の方向を迷はせ、凱歌を擧げて走り去る。日、遂に暮れ、柳軍、下手渡に宿陣すれば、又もや起る賊團の大勢、押し迫りて日立の近邑は再び騷然となる。されば近傍の鄕民は、土冦となりて、筵旗を押し立て、竹槍を提げて攻め來る威風、當る可らず。かくて柳川、阿州の諸軍も來りて、ここに夜戰は起れり。然れども賊團の退却巧に妙を極め、西軍の配陣の虛に乘じて、何時しか消え失せて追跡里余、更に踪跡を見ず。

八月二十日賊團小島村に侵入す。されば前日來の被害に、土民は皆武裝し

て奮鬪大に賊團を破り、盜掠の財物を奪取して意氣熾んなりけるが。その二十三日に至りて、賊團は前日の恢復を計りて、再び小島村を襲ふ。徵發頻々、白晝强盜となりて、小神村及び秋山村に亙りて猖獗を極む。鄕民警鐘を亂打し、人夫を組立て、各々武器を手にして、晝夜兼行の警戒も誠に其處たり。茲に於て、阿軍は小神村に進み、中軍は秋山村を攻め、柳軍小島村に急馳す砲聲轟々、戰鬪激烈を極めて、互に勝敗あり。此時に當りて、小田村に遁れし棚倉の殘黨は、間道して急遽山手に陣し、西軍の進擊せるを望み見て、是を砲擊すること猛烈を極む。茲に於て、隊士の戰爭と、賊團の防禦戰は、愈々本物となりて、四ヶ村に亘り攻守の激戰酣なり。翌二十四日小島村に大火あり、是素より賊團の仕業たる所、掠奪過多、賊團凱歌を揚げて掛田方面に走れり。西軍前進して愈山手に迫る。棚軍堅鬪死守して之を防ぎけるが、遂に利非す、退きて賊團を援けて、掛田を固守するにあり。賊團即ち陣を四方に取りて、大に西軍を迎え戰ふ。砲戰數日、勝敗決せずして、彼我の對峙頑强なり。賊團は此間に於て、別動隊を派し、戰線區外の驛邑に亘りて發展す。

掛田の別隊、西漸して信夫郡に至る。瀨上村宮代の古城趾に本據を定め、荒手を福島方面にと延長し來る。福島藩は、米澤に逃げ込みて以來は、城内今や空虛となりて、財物の管理者なし。賊團襲來町人みな店を閉ざし、道路は行人の跡も絶つに至りて、物情騷然を極む。茲に於て、福島代官富田善平は非常の令を發し、目明し淺草宇一郎をして、城街に虎視を張らしむる所あり けるが、果たして賊團の先手は、早くも城郭を窺ふに至りて、淺草、壯士を率ゐて之を防ぐ。激鬪數合、壯士の奮鬪は、能く賊團を撲殺して奇功あり。賊團一敗退きて宮代に來る。即ち土民を召集し、掠奪の財物を頒布して、而して走り去る。

（八）桑名侯と奥羽軍

會津若松の戰陣に、兄容保と別れて、米澤に赴きし桑名藩主松平定敬は、羽州に援を仰ぐ所ありしも、羽州諸藩は今や、庄内應援の急なるに最早詮なきに至りて、米澤を發し、輪王寺樣に謁を乞はむとしけるが、宮殿下には既に白石陣所を去つて仙臺に在り。時に幕府の關老小笠原壹岐守は福島に在り

即ち庄内藩と謀りを通じて、白河口を挽回する所あらむとす。桑名公、是を聞きて大に喜び、來つて福島長樂寺内奥羽軍事局に列藩を主宰せむとす。

時に二本松には西軍寡勢の守備ありしかと、近くは殘黨の逆襲ありて以來油井村、松川村等を警戒するに至りしを以て。その米澤藩に於ては、庭坂口を固むると共に、更に大森村に兵を送りて、要道を環視せしむる所ありき。然れども庄内の接戰は、是が援助に急を告げ、八月三十一日の夜半を以て、急遽大森及び庭坂の部隊を引揚るに至る。されば軍事局にありては、この變報に接して、愕然たらざるを得ず。依て急を白石に告ぐ。仙軍、一條十郎と共に先發して、大森陣屋に來る。仙軍國境の守備を解きて、福島方面に來るもの、日に〳〵大勢となれり。かくて大森村の防備は、稍々活氣あるに至りて、飛報來る。會津の形勢嶮惡なりと。茲に於て、福島軍事局の謀議は開かれたり。曰く、今にして援軍を會津に送らば、是が救援必就なり。然らば是より二本松の守備を拔き、右折して、會津に向はむ、それ會津挽回は同時に全軍の頽勢に係る大なり、良ろしく激を四方に通せむと。

軍事局の令旨は、四方に送りて、列藩援軍は伍々として、大森村に來る。庭坂村に於ける奥羽軍には、即ち二軍五小隊、棚軍三小隊、脫軍五小隊之なり。九月五日となりて、列藩より來るもの、仙軍五小隊、庄軍四小隊、山軍二小隊、上軍三小隊、米軍二小隊、平軍二小隊あり。更に大松澤掃部輔及び布施備前等、大勢の仙軍を督して來り會す。茲に於て、桑名侯は軍事局を發し、大森村に到りて全軍を督し、愈會津逆襲の援軍を起さんとす。實に危機一發、今に於て、松平定敬が、再び母成峠を踏破して、會津攻圍の西軍後背に當りて、二千五百の大兵を注がば、會津攻圍の戰陣は、定めて天外にも逆轉したるなるべし。然れども、世渡りは萬事儘ならぬものゝ如く、奥羽軍の陣容は意氣揚々大森陣營には成りたるも、何分天下の大軍が後を衝くには、彈藥の缺亡を來すこと大なると共に、陣屋には一粒の兵糧無きに一同愕然、されば切角の計畫も、茲に至りて詮なきなり。然れば督將松平定敬は、諸將を陣屋に會し、竊かに相議して曰く、諸士極秘の裡に是等の需用を整ひん、然れば進擊の日取りは、改めて是を決せむと。茲に於て、列藩主將は暫く城地に走

り、藩地に至りて、大に準備する所ありき。

さりながら、列藩の軍備何れも多端の今日、大森村の鋏亡こそ、頗る不如意なり。かくて十日となるも、準備未だ成らず。九月十四日に至りて、會津より米澤に走りし大鳥圭介、身は德川脱軍の督將ながらも、今や落武者となりて、銃卒數人を伴ひ、吾妻の山嶺を踏み越して、信夫郡荒井村に逃げ來る。一夜の宿を白山寺に明かし、會津街道を辿りて、大森陣屋に至る。圭介即ち桑名侯に會見し、嘆聲を漏らして曰く、賊輩、新發田を降して、大舉羽州に驀入し、遂に米澤を陣門に降すに至る。依て米藩は急遽檜原の關所を閉ざし、而して仙會の連絡を斷ちたり。貴藩の兵、今や進退その途を失し、鹽川を予と共に引き揚げて、今や大鹽に困滯苦境に在り。且つ會津の四面重圍となりて、最早防ぐに途なしと。桑名侯、唯だ悄々として、大息あるのみ。兩將密議數刻、大に向後を計る所あり。仙藩の令旨來る。これ榎本武揚等仙臺に在りて、作戰計畫あるなり。小笠原壹岐守、福島藩の攻擊を兼ね、白河口回復戰を斷行して、いよ〳〵會津擁護の兵を擧げんとし、諸公の奮起を促すこと

急。然れども大鳥圭介是を聽かず、一意仙臺に發足を促す也。茲に於て事の爲す可らざるを見て、松平定敬、小笠原壹岐、圭介等共〳〵に仙臺に向ふ。

奥州平潟口戰史

〔一〕岩城の戰

上野東叡山に彰義隊を突破したる西軍は、薩州、長州、館林、大垣、岩國因州、藝州、伊州、筑前、筑後、肥後、宗州、久留米、備前、佐土原の諸軍にして、鋭意奥州濱通に注ぐにあり。而して肥前大村藩參謀渡邊清左衛門、總軍の督將にして、長藩參謀木梨精一郎、總軍監たり。藝藩參謀藤堂監物、因藩參謀馬場金吾を始め、將主の面々意氣天を衝くの慨あり。

されば奥羽列藩は、平潟口を守るに當りては、平藩家老上坂助太夫を軍事總長に推し、仙藩中村才助を總參謀に補し、こゝに戰鬪準備は成れり。而してその部署如何を見るに、平、泉、湯長谷の各藩は城を守るに要道の關門を固め、晝夜に亘りて見張番を置くは勿論、更に小名濱陣屋には、仙將山本丹

後を送り、その平潟村には石城三藩幷に仙臺の諸軍を送りて、仙將大江文左衛門、是が總守將と爲り、更に勿來關、中ノ作の要衝を固めて、戰備いよ〳〵嚴なるに至る。

六月二日となりて、上野の山に敗北したる彰義隊の殘黨は、幕府遊擊歩兵隊長人見勝太郎、下總の浪人請西藩主林昌之助等に率ゐられ、汽船に依つて平潟港に遁れ來る。石城の戰陣俄かに活氣滿ち、奥羽軍には、仙臺、中村、米澤の諸軍、伍々として日々に來り會す。

六月十六日、天地は朗かにして波靜かなり。西軍艦隊は波を蹶つて、突如平潟沖合に雄姿を現はすに至る。依て奥羽軍の平潟陣に於ては、仙將大江文左衛門、兵を激して彈を込めて待つ程に、黑煙朦々沙風に靡かせつゝ、平潟の驛邑に向つて、艦隊の沿岸砲擊は起れり。茲に於て、海陸呼應の攻防の砲戰天地を震裂して、對峙いよ〳〵猛烈と爲りけるが、海上の猛彈甚だしく沿岸を碎くに至りて、奥羽軍衆寡敵せず、兵を纒めて關田に遁る。かくて西軍は益々驀進して、遂に關田も拔くに至れり。茲に於て、大江督將は更に退き

て新田山、湯長谷の要害を保つにあり。

六月十七日、仙將大江文左衛門、遊擊隊長人見勝太郎、請西藩主林昌之助等は、仙臺、平、泉、脫藩の諸軍を率ゐて、關田に進擊して、西軍を勿來關に破り、尙も益々進みて、平潟を侵奪せむとしげるが、端なくも西軍の艦隊は、是を沖合に望み見て、巨彈を連發して大に阻む。奥羽軍殊守及ばず、退きて湯長谷を守る。

六月十八日、大江、林の兩將は、湯長谷の館を發して仁井田に出て、山に據りて戰守を張れば、西軍は筑州、肥州、宗州、館林の兵を送りて、鮫川より植田に進みて、進擊甚だ猛烈を極む。茲に於て奥羽軍は兵を二道に分ち、一擧して西軍を狹擊しければ、攻守の接戰俄然として西軍は狂亂し、遂に敗績す。さる程に、西軍の艦隊は平潟の閉息を見て、更に小名濱港に向ひ。砲口を並列して、巨彈を以て攻擊猛烈也。仙將山本丹後、平、仙臺、泉の諸軍を指揮して、彈を込めて是を防ぐ。彼我の砲彈益々飛交し、砲聲の轟き又百雷も霤ならす。かくて奥羽軍の巨彈は、天地に悽聲を放つて、西軍艦隊の要

部を拔くあり。奥羽軍、凱歌を擧げて戰ふ程に、海上には忽ち爆發の音響天地を震裂し、水煙霧を起して四海暗瞑、烈戰相當りて、茲に海陸の砲戰止む。西軍艦隊、その拔く可らざるを知りて、遠く沖合に影を沒するに至る。

それ平潟は西軍の全力を注ぐ所、是を防がむと欲せば、奥羽軍は一意新田山を固守せざる可らず。茲に於てか、參謀柴田中務、部隊を結束せしめて、西軍の北進を扼守する所、六月二十三日と爲れば、幕府純義隊長渡邊綱之助遊擊歩兵隊監軍澤錄太郎、彰義隊の殘黨及び關東の脫軍を率ゐて、新田山の陣に來援するにあり。

六月二十八日、西軍は兵を二道に進めて、いよ〳〵新田山に迫るべく、豫め大兵を本道に注ぎて、陣を四方に取りて連擊し、鋭意奥羽軍を壓する間に、その海岸迂回の一軍は、泉の館を襲擊して是を拔き、新田山に裏切して、奥羽軍の後背にと突貫し來る。茲に於て、本道を防ぐ奥羽軍も、その後背險惡を告ぐるに至りて、最早戰守の策無し。督將柴田中務、殊守遂に利非す、兵を纒めて湯本村に長驅す。

翌二十九日は西軍新田山を出發し、大勢一呼して、湯長谷の館に迫る。奥羽軍、戰守を部署して力戰せしかど、此所は湯本の前衞地たる所より、兵勢は自ら寡少なりしかば、砲戰一敗地に塗れて、湯本に逃げ歸る。依て西軍の突擊は、一躍して湯本の驛外に迫りて、砲銃の亂擊百雷も曾ならず。されど奥羽軍の殊守決戰頗强當る可らず。依て西軍は更に精鋭を注ぎて、肉迫互に勝敗あり。折しも相馬將監、中軍を率ゐ、新屋村を間道して、湯本攻擊の西軍後背を衝くに至る。須臾にして、米軍も亦高坂村より現はれて、等しく西軍を横擊す。茲に於て、三道に迫る奥羽軍の進擊隊は、百砲を以て攻守猛烈を極め、龍爭虎擊、肉迫相當りて血戰し、大に西軍の中堅を拔くに至りしかは、西軍も本道を保つに由なく、力鬪苦戰となりて、百歩を退きて惴々たり折しも藝州、伊州、筑前、宗州の諸軍は後詰となりて、突如湯本の驛中に驀進し、火を民舍に放つて、奥羽軍の足もとを燒きて攻め立つ。茲に於て、奥羽軍の部署は、俄然として動搖し、西軍總擧の勢ひ最早防ぐ能はず、陣を捨てゝ退却すれば、西軍は益々突進し來りて、早くも兵を三道に分ち、以て急

轉直下に高坂、新屋、新町を攻む。兩軍の接戰百砲迅雷の間に、西軍の鋭鋒は捲土重來し、見る間に新町口を斬り破りて益々迫る。頽勢一敗諸口の奥羽軍は逸早く守りを失して、土崩瓦解となりて、天子橋に逃げ來る。茲に於て奥羽軍は天子橋の嶮を固守すべく、急遽橋板を撤し、壘を兩側に築造し、更に右方藥平寺臺、大館山の丘上に至るまで、戰備を張りて扼守すれば、西軍の突擊は、見る間に前面に群がり來りて、發銃最も努む。奥羽軍、是を俯瞰して防戰必死、有利の陣形は、攻防烈戰砲聲四方に湧く間に、西軍突擊の陣を壓し、兵氣大に振ふ。依て奥羽軍は忽ち攻勢を取り、大呼猛突して関を擧げて陣を發す。龍爭虎鬪血戰遂に是を拔き、西軍を湯本に擊退するに至る。

此時に當りて、松島發航の仙軍は、砲艦一隻、運送船二隻に分乘して、中ノ作港に在りけるが、天子橋の戰勝に肉躍り、精鋭必ず一勝を收めんとて、隊士千餘人、督將富田小五郎、參謀安田竹之輔、軍監加藤十三郎等と共に長崎濱を經由して、小名濱村に達せしかば、此所を守備せる奥羽軍は、荒手の兵の來るを見て、兵氣大に揚り、直ちに進擊を令して曰く、敵の大勢は湯本に在り、我軍今にして泉を回復すれば、平潟口の作戰、それ大に利ある所なるべしと。茲に於て、富田小五郎は小名濱口より進み、柴田中務は平本道を進み、古田山三郎は山手に間道し、こゝに三道陣を以て、泉を屠らむとす。參謀柴田中務、大呼の勢を以て、未だ泉に到らざる二十數町の地點に到れば西軍は早くも富岡村の丘上に陣して、拍手して是を環視するにあり。やがて本道の西軍放射の陣は、霹靂一聲天地を震裂し、彈丸雨注して奥羽軍の不意を衝く。柴田參謀、悵々殆んど膽を潰し、仰いて頭上を見れば、西軍千兵の陣その敵すべからざるを知りて、兵を纒めて退却を始む。西軍、是を高きに望み見て、丘を駈け降りて、銃に彈を込めて突進す。奥羽軍混亂今や土崩瓦解となりて、遁れ〳〵て中ノ作港に擊退せらる。然れども西軍の尾擊は益々驀進して、猛彈を注ぐこと雨霰も雷ならず。柴田、敗士を叱咤して戰守を令すれども、踏み止まるものも更に無く、先を競ふて磯邊に走り、而して小舟に乘つて、本船に逃げ戻る。仙艦、辛ふじて敗兵を收め、西軍の砲擊を避けて、沖合にその影を殘し去る。

かくて六月も暮るれと、西軍の壓迫は日層しに猛烈を極め、石城三藩の運命は、刻々として迫り來る。されば平藩近藤權平、德川脫士酒井豐三郎は早馬を馳つて會津に發足し、而して援兵の急派を迫るにあり。さる程に、急轉直下、西軍には平城の總攻擊起れり。

七月一日、天、曉を報すれば、砲聲は遠きより起りて、西軍襲來破竹の勢を以て、平城に押し寄せ來る。されば奥羽軍は軍治山に據つて、その進擊を防ぎけるが、攻防の一戰衆寡敵せず、退きて谷川瀨村を保ちしも、頽勢一敗地に塗れて、平城の禍危いよ〳〵迫る。果たして西軍の總擊は、兵を小名濱及び湯本の兩街道より進めて、霹靂天を衝き、威勢甚だ熾んも也。茲に於て、仙臺、米澤、平の諸軍は湯本口長橋を守りて、烈戰奮鬪殊死して是を防ぎ、戰鬪は益々猛烈と爲りて、相馬將監、新屋口に激戰尙利非す、退きて新川町を保つや。西軍の突擊疾風迅雷し、早くもその足もとに突入して、火を民舍に放ち、而して中軍の陣を燒く。かくて南方菩提院に迫れる宗州、筑州、肥州の諸軍は、水田を踏み越して、境内を目掛けて砲口を並列し、而して平軍の砲臺を衝く。依て平軍は巨彈を連發して、必死を以て防ぎけるが、肥軍の砲隊は數丁の距離に迫りて、門を拔かむとして大呼し來る。砲彈爆發四方を衝き、菩提院の門扉遂に碎けて、平軍の陣は危態に陷りたり。茲に於て、平軍、俄かに土俵を築積し、榴彈を放つて頑守す。かくて長橋元の米軍元込銃隊は勇往決戰、西軍隊士を殪す其の數を知らず。然れども此時既に仙軍は苦戰起つ能はず、更に薩州、大村、長州の諸軍の躍入するありて、血戰遂に守りを失して、米軍元込銃隊は包圍の中に瀕し、孤軍奮鬪幾んと全滅して、隊士僅かに數名と爲りて、こゝに湯本口本道の防備は破れたり。西軍、いよいよ平城の外郭に迫る。奥羽軍堅鬪よく四圍に是を防ぎ、兩軍の接戰砲聲轟々として、天地は彈丸雨霰と爲り、硝煙朦々陣を包むて悲壯慘憺。されば、此時に當りて、米藩若林軍監、平藩上坂軍事總長は、馬に鞭つて防禦の陣を馳驅して、全軍の志氣を鼓舞し、仙藩中村參政は、城内に在つて関を湧かしつゝ是を戰陣に聲援するに、隊士尙數千人、意氣揚々たるの虛勢を張るにあり。平藩老公元幕閣の有司たる安藤信正は、城櫓に上りて四方を環視す。將士の

奮戰激鬪數十合、龍爭虎鬪の陣いよ〳〵多端を告げて、勝敗尙決せず。此時に當りて、平、米澤、脫藩の諸軍は遊擊步兵隊長人見勝太郎を先鋒と爲し、西軍後背に逆擊を試みるべく、朦々たる硝煙の中を潛行して、長驅して天子橋を渡り、小島村に放火して、總軍の反擊陣を起して猛突す。それと見たる平城の奥羽軍、また蠭起して捲土重來、彈丸雨注するに至りて、西軍は前後の敵を顧みて愕然たらざるを得ず。茲に於て、隊士の狂亂幾んと戰守に苦しみ、堅守の猛擊最早敵す可らず、西軍こゝに敗績す。而して小名濱街道の西軍は、城郭近く迫り、新手を入替へて攻めけるが、仙將古和田參謀よく防ぎ平將三田指揮役、奇略を以て、早くも後を絕つに至りて、西軍狼狽軍治山に退きて防げども、此時湯本口西軍の大敗を耳にして、惚々俄かに戰守を解き兵を纒めて小名濱に走り去る。

平の防戰奥羽軍は大勝して、沈止せる敗兵の志氣を挽回す。茲に於て、敗士四方より盛り返して、捲土重來も啻ならず。七月二日、中村、平の諸軍は泉、湯長谷の兵を合せて、一衆して神谷村の西軍を屠るや。七月五日となりて、湯本を襲擊し陣營を燒討して、西軍を湯長谷の館下に閉息せしむ。勝報頻々、奥羽軍の防備いよ〳〵嚴也。夜來の東風、雨を催して此日より降り起し、十一日に至りて止む。其間道は流れ、河水溢れ、運輸の便全く杜絕して兩軍進擊の折もなかりけり。されば風雨の戰陣彼我の內情偵察こそ、唯だ暗々たりと雖も、竊かに敵情を探れば、東は高久村、西は新屋村、南は軍治山に至るの間、今や三方一里の戰線を保持するものにして、大勢一呼の肉迫も、旦夕を知る能はざるの姿にあり。

七月十三日の天空は霧深くして咫尺を辨せず、西軍は大霧に乘じて精銳を送り、尼子橋及び新屋敷口に迫りて、猛擊を開始したり。闇中唯だ轟々として、最早昨日の談に非ず、今日の西軍進擊陣、聞けは棚倉駐屯西軍の大勢も此所に應援して疾風迅雷。されば奥羽軍は、堅守して是を防ぎ戰けるが、果して押し來る威勢は、早既に昨日に數倍し、連擊當る可らず、三田指揮役、塵戰苦鬪も敗れに破れて、敗兵を收めて退却すれば、大勝に乘ずる本道の西軍、早くも谷川瀨村に現はれ、而して先鋒を平三丁目に送る。かくて霧も晴

れ亘れば、俄然西軍の主力は輾囲して、藥王寺臺、大館山の丘上に陣するを始めとし、高坂、御臺境の二村を經て、鬼越の嶮を越し、好間村より久保町を衝き、研町を衝き、而して才槌門に迫らしむべく、精鋭なる間道軍を起して、いよ〳〵平城の三面砲擊を開始す。

斯くて三道より進む西軍先鋒は、本道不明門に迫り、才槌門を衝くに至りて攻城の猛彈は四方より注ぐに至る。凄々たる砲煙は、萬山に霞み砲聲と共に城頭を覆はむとす。奥羽軍、殊守決戰、對峙いよ〳〵頑强なり。されば三道を防ぐ奥羽軍の隊士は、その部署を守るに決死の勇あり。龍爭虎擊、接戰相當りて、西軍は躍動して門を蹴り、城郭に侵入し來る。鼓聲彼我に起り、六間門を始め、各所の陣は崛起迅雷、勇往邁進、血戰慘を極めて、隊士の殪るゝもの其の數を知らず。然れども奥羽軍は、是を守るに益々志氣を皷舞して防ぎ戰ふ。兩軍の接戰猛烈となりて山田隊は躍進するあり、小野隊は撤兵するあり、堀内隊の射擊あり、大藏隊に血戰あり、久野隊退き、中村隊援後するあり、神谷隊突擊あり、桑原隊苦戰するあり、此間三田指揮役、中村參政柴田中務、若林軍監、相馬將監は何れも連合數隊を督して四方に疾驅し。上坂軍事總長もまた、營外千軍萬馬の中に在りて、東奔西走大に全軍を督嘖して防がしむ。血戰激鬪、鬼爭の巷も啻ならず。此間に於て、遙かに戰陣を望めば、城頭の叢林は朦朧として、砲煙に包まれ、大小の飛丸に枝葉を紛碎せらるゝは、恰も暴風雨の襲來の如く、轟々たる砲聲萬山に呼號するは、百雷の亂走にも似たり。小銃彈は飛び來りて城壁屋瓦を擊つものは、恰も飛霰の其れにも類し、天地愕動何時しか、日も暮れたり。斯くて中空は星清く、照々たる明月は死人の屍を照らして、兩軍の對峙も茲に解けたり。平の戰場殊守の陣も、今や内外寂莫として、夜色悽慘だり。

城鐘の響も沈々として、前日來の激戰は、屍の山を築くに至る。然れば隊士尙ほ戰に堪ゆるもの、今は身心疲れて、而かも寡勢とはなりぬ。剩つさい列藩援後の途も、こゝに中絶して最早これまでなり。飜つて城内を見るに、額米こそは、全軍の對峙尙ほ數日を支持するを得るとも、その彈藥たるや、僅かに二十數個、小銃彈二千を出でず。此窮境に臨みて、捕給の役に立つ彈

藥庫すら、今や西軍の戰線に在りて、運搬するに策なきなり。今にして西軍の夜襲たもあらば、最早明日を守るの策は果たして何を以てせむ。

十三日の明月は中空に冴え亘りて、夜は深々として更けたり。奥羽軍は露營の守備を城外に張り、以て偵察を嚴にしつゝ、其間に於て城内大書院には軍議開かれたり。會するもの、總指揮上坂軍事總長、總參謀中村參政を始め、列藩參謀の面々、この窮境に迫りての會議こそ悲壯なれ。諸將、孤燈を圍みつゝ、相語るらく、勝敗は兵家の常、滿腔の力戰尙ほ及ばざる以上は、是れ天命の死にして、逆賊の汚名ありとも、後世の笑とはならざるべしと。衆論即ち城を枕に討死を決するなり。時に上坂總長は、暗涙を揮つて、而して曰く、我軍明日は最早守備の力盡くべきの運命なり、列藩御人數の御奮鬪誠に深謝に堪えず、諸士、奥羽は廣大なり、到る所我軍の作戰を盡するに存分なり、然らば此孤城に守死せんよりは、出でゝ相馬領界に據り、列藩援助を仰きて、殊守決戰したらむには、此地の回復決して難きに非ず、然らば是より城を忍び出て、以て其要害に就かむと。嗚呼。悲絶壯絶、平潟口の開城決議

孤軍肅然たゝ咽鳴して血涙あり。隊士伍々として城北なる戸張門を出て、而して北行す。時に上坂總長の影なし。衆、是を怪みて城を顧れば。上坂、泰然座を固くして城にあり。曰く、諸士、事は速かなれ、不肖上坂獨り本城を預るなりと。隊士漸く是を制して、起たしむ。斯くて憾みを殘す人馬の物音、唯だ一と筋に相馬路に就くなり。月下遙かに南顧せば、人なき城郭には、その殿中の一隅に當つて火色の認むるあり。是を怪しむ實に束の間にして、火焔朦々石城の空に漲り、平の雄城、即ち奥羽軍と別るゝに、火災を以てせり。亦慘と云ふへし。

岩城奥羽軍は、七月十四日より行軍を起して、二十五日夕を以て、石城相馬の境界なる大堀村に着したり。茲に於て、上坂總長は、親しく相馬の營に就き、石城今回の開城顚末を具狀し、併せて援後の情を謝す所ありき。

〔附記〕進討計畫を見るに、平潟口は、岩城落城後に於ては、相馬を殘すのみなり。然るに白河口には、三春、守山、須賀川、本宮、二本松、福島と奥羽軍の割據實に過多なり。茲に於て、白河口を平定するに非ざれば、西軍行動は意の知く

ならざるなり。蓋し白河口の興廢は、會津、米澤、仙臺の起伏に關する所、白河口を先決問題として、主力を此所に注かざる可らずと。蓋し西軍も白河關門の激戰には、餘程鑑みるに依る。茲に於て、石城口西軍中、薩州、備前、柳川大垣、佐土原、大村の諸軍は、大村藩參謀渡邊清に督せられて、白河口西軍に屬せしめ、爾餘の西軍は、長藩參謀木梨精一郎、總軍監となりて、尙ほも濱通を進擊し、中村を追落して、以て仙臺國境に於て、白河口平定を俟つにあり。白河口平定後は仙臺追討にあり。四條少將總督、追討總督と爲る。

〔二〕濱通奥羽軍の動搖

石城の戰場に殊守決戰の奥羽軍は、七月二十六日を以て、相馬境界を去ること二里有餘、木戸村に據りて、戰守の陣を固めたり。されば此地は中村藩の興廢を決すべき要害の地なるを以て、中村藩は主腦となりて、是より海岸に亘りて、戰線を張ること三里、胸壁を築き、砲陣を配置して、西軍の到るを待つ。

此時に當りて、石城進擊の西軍は岩軍を先發せしめて、早くも辨天坂の斷砦を襲はしむ。更に因州、藝州の諸軍は岩軍の後詰となりて、來て是を援後、し互に勝敗あり。此時に當りて、西軍艦隊は木戸村濱手に雄姿を現はしけるが、仙將伊達藤五郎、逸早くも膽を潰して走り去る。かくて木戸村本道は、忽ち西軍の驀入する所とはなりて、奥羽軍は敢死奮鬪するも當る可らず、土崩瓦解となりて、富岡村にと逃げ來る。元來、仙藩は奥羽最大雄藩として、自ら同盟の主と爲り、鋭意その平潟口を擔任すべき筈なるに、石城三藩の落城以來は、接戰頓に拙劣と爲り、而かも小藩を先鋒に用ゐんとして、己れ實戰に當るを避くるの嫌あり。奥羽軍は是を不可とし、その手段に深慨を抱くも、何分大藩なる威望を懸念して、敢て改革を試むるもの無し。果たして二十八日に至れば、熊川村の接戰、防戰必死を盡して、攻防いよ〳〵酣となりけるが、仙軍は早くも瓦解し、米軍も亦陣を捨てゝ、共に浪江の衝を保つに至る。然れども中村藩は自藩の浮沈に關する所、諸軍の退走せるも顧ず、頑强勇邁、此所を固守して一歩も退かず、相馬將監、部下を叱咤して孤軍奮鬪殪れて後ち止まんのみ。されど群がる大軍には衆寡敵せず、惡戰苦鬪して浪江に兵を引き、督將相馬將監は重傷の身となる。